

心を無くした男と、嘘  
つきな王さま

朝霧=Uroboross

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※ネタバレが大量に含まれております!! 2部6章未履修の方、またはネタバレ見ないで進めたい方はブラウザバックを推奨します。

時は1990年代。日本のある都市にて万能の願望器たる聖杯を求める戦争——第四次聖杯戦争が行われようとしていた。

時を同じくして、事故に巻き込まれたことで、逸般人だらけのFate時空に転生してしまった少年、『朝露<sup>アサツユ</sup> 虚映<sup>コエイ</sup>』。奇しくも、彼は聖杯を求める戦いへと巻き込まれてしまう。

様々な陰謀が埋めく中、彼が呼び出したのは、本来は呼び出されるはずのない存在。FGOにて、ブリテンを、世界を滅ぼすために、その策謀による猛威を振るつた、『妖精王を騙るモノ』であつた——。

祝・オベロン実装（今さらすぎる）、そして「あれ？オベロンまだ少ないな」と思い付いて書き上げただけの行き当たりばったり小説でございませう。

完全見切り発車なので拙いのはご容赦下さい。

# 目次

キャラ設定等	1
第四次終了時：設定	7
第四次聖杯戦争／zero編	
どうしてこうなる？	13
とりあえず、作戦会議	22
裏話：オベロン①	32
戦線開幕	45
”呪塊妖精”	57
お願い、帰って？	67
さて、じゃあ遊ぼっか	75
いいね、最高だ	85
退場の時だよ、ご老人	96
騙すのも楽じゃあない	107
聖杯問答（前編）	117
聖杯問答（中編）	127
聖杯問答（後編）	139
厄災の進撃	150
『聖剣』解放	163
オベロン②：記憶	173
決戦前夜	184
妄執の騎士、喝采の卑王	196
ご愁傷さま	205
『彼方と落ちる夢の瞳』	213
幕間：英国／事件簿編	

幕間①	：第四次感想戦	—	223
幕間②	：英国旅行	—	231
幕間③	：会談	—	240
幕間④	：妖精と謂ふ者	—	250
幕間⑤	：妖精と謂ふ者	続	259
幕間⑥	：魔眼収集列車	# 1	271
幕間⑦	：魔眼収集列車	# 2	282



# キャラ設定等

・〈主人公〉

名前：朝露 虚映（あさづゆ こえい）

※傭兵稼業の時は『アルレッキーン』と名乗っている。

魔術系統：『風』、『無』

身長／体重：165・4cm／55・5kg

性別：男性

年齢：19歳

誕生日：六月六日

詳細：『風』魔術系統の中でも中堅に位置する『朝露家』の最後の血筋。転生者ではあるが、Fateについての知識はまちまちかつウロ覚え。

一人っ子で、14歳までは両親共にいたが、とある魔術礼装の制作中に術式が暴走、物理的に蒸発してしまい、天涯孤独に。

家と金があったが、前世から『刺激ある生活』に飢えていたのもあって傭兵業を営み

始める。キテレッツな戦術で先が読めず、むしろこれ何も考えてないので？と錯覚させる。勿論、何も考えてない。

楽しいことが好き、面倒事は嫌い、興味ない相手はどうでもいい、強い敵を踊らすのは嬉しい。精神破綻者とよくいわれるが、ある意味間違っていない。

『浅ましくも生き続けようとするものが気持ち悪い』というオベロンに対し、『永久の平穩を希う世界が気持ち悪い』という虚映。似ているようではあるがその根底は真逆。だが、だからこそ馬が合い、結局の着地点が一緒になる。

趣味は読書と傭兵業。たまに野良猫と戯れては噛まれている。リングと洋ナシが好き。納豆は嫌い。

## 〈サーヴァント〉

### ・オベロン

クラス：Pretender（現・聖杯戦争中はキャスターとして活動）

詳細：言わずもがな、FGO：2部6章『アヴァロン・ル・フェ』において黒幕として、『騙す者』の意味を持つプリテンダークラスのサーヴァントとして登場した。

こちらのオベロンはカルデアに破れ、奈落の穴を落ちていく中眠りにつこうとしていたところ、虚映の『虚構魔術』により霊基が”こちら側”と接続、『真夏の夜の夢』を触



媒にして召喚された。

召喚当初はかなり不機嫌だったが、マスターとの相性がいいと判ると、二人で”落とし穴”を企てたりなど共謀するような仲に。

「ま、良くもなく悪くもなくってどこじやない？」とはオペロンの言。

基本的にマスターの魔力量から、行動自体には問題ないが戦闘行動にやや不利益がある。その為、基本的にはF G Oにおける一臨・二臨の姿でいる。

その後、間桐邸の蟲蔵に侵入し、内部の虫を全て掌握し、桜ちゃんと一緒に全て略奪してきた。これにはお爺様も激おこ。

余談だが、この虫達の出番は、性質・見た目的にかなり後になってしまっているのであった。

・〈その他の登場人物〉

・『間桐／遠坂 桜』

↓原作の展開から救済された子。養子に出されてからそれほど長く経っていないかつため、見た目の変化は小さく、精神もギリギリ繋ぎ止められていられた範囲内。

オペロンによって助けられた後は虚映の義兄妹として『朝露 桜』となっている。陰はあるものの、虚映のお蔭で原作より表情がよく出る。

助けられた時の『小さな小さなお姫様』というオペロンの言葉が記憶に新しい。今は虚映の知識を借りて『虚数魔術』の性質を学び、制御できるよう特訓している。

近所の人達からは「仲良しな兄妹」として認知されている、

・『雨竜 龍之介』

↓虚映が教会から帰って来て数日後に発見・捕捉され、『邪魔だから』という理由で始末された。

原作で海魔に喰われた男の子は、無事に来年小学校を卒業する。よかったね。

・『間桐 蔵硯Ⅱマキリ・ゾオルケン』

↓蟲蔵の虫達を全部奪われて怒り心頭、激おこムカチャツカファイヤーなう。

オペロンのせいだとはバレてはいないが、時間の問題でもある。しかし、当のオペロンとは最も相性が悪いと言える。

・『言峰 綺礼』

↓無関心。強いてあげるなら『敵になる人物の情報が一人知れた』というだけ。

〈その他〉

・『虚構魔術』

↓虚映の持つ『無属性魔術』。 ”存在しないものを象る” 術式であり、使う人によつては『ボクの考えたさいきよのまじゆつ』ができれば。

ただし、準備・展開・発動の全段階において気の遠くなるほどの時間がかかる。最長十年単位なんてザラ。さらには消費魔力もバカにならないので、虚映も初めは何度も死にかけていた。今でも過度になると視界が真っ赤になるレベル。

『ストック』という、術式を閉じ込めた宝石系統の結晶を作ることと瞬時に発動できる。それでも制作にかなりの時間と技術を要する。

自分の思い描いた理想の力ができる夢のような力であり、使い方を一つでも誤れば即座に自滅する体内爆弾——いわゆる”デーモンコア”のそれである。

〈登場術式〉

・『星天投影鏡』

↓ホロスコープ。 ”その光景を目視する” 千里眼とは違い、 ”未来に起こり売る光景を過去のものとし、それを投射する” もの。その特性のため、多人数で見ることができ、再使用に最低でも一年はかかる。

ストック：計5回分（内三回は使用済み）

・『対・千里眼術式』

↓虚映がこの魔術系統の特性を知って真つ先につくりあげた、『千里眼によって自身を見られなくする』術式である。オペロン召喚後、『対人理』スキルを参考に術式を新しくしている。

なぜ作ったのかというと、「千里眼組に目をつけられるとロクなことにならない。主にマーリンとか」とのこと。

ストック：計7回分（内4回使用済み）

・『誤認隠蔽術式』

↓正体をわからなくさせる術式。相手からは、時には旧友、時には宿敵だったり、その姿を誤認させることによって自らの能力などを隠蔽する。

複雑化はするが、見せる姿の指定もできる。ただし、多用しすぎると逆にバレやすくなる。

ストック：計12回分（内7回使用済み）

## 第四次終了時：設定

・朝露<sup>あさづゆこえい</sup> 虚映<sup>うつ</sup>Ⅱアルレッキーン

性別：男性

年齢：20歳（第四次終了後）

誕生日：10月16日

身長／体重：168・5cm／58・0kg

イメージカラー：グレイブルー／コアブラック

魔術属性：『五大元素：風』『虚構』

起源：『空虚』『隔執』

本編の主人公。普段は常識的で優しく、のんびりとしているが、内面は刹那的享樂に酔う精神破綻者。その正体は、『たった一人を排斥することによる、人類が望んだ自滅願望』を体現した存在。

転生者だが、前世にて周りと手を取り歩もうとした結果、嘲笑と裏切りによって孤立した。そのため、『正義の味方』や『勇者』などといった善性の塊をひどく嫌う

魔術属性は『風』の『共鳴』。一種のテレパシー系に長けている。こちらは家系魔術で

あり、諸事情によって継承不足なため、できることは少ない。

だが、代わりに固有魔術として『虚構魔術』を使える。属性としては『空』に当たり、望みと対価が充分であれば万象に携われる。ただし、相応の対価が必要であり、なおかつ非常にコスパが悪い。なので大抵のものはストックを使って賄っている。

現在は無人となった間桐邸を改造し、表向きには自身の大工房として所有している。とは言え、住んでいた和式邸宅の方も使用しており、家族団欒の際や貴重品などはこちらに置いてある。

将来に向けて就活中。なぜか知らないが、物理と数学の教師免許を取得済み（前世では苦手分野だった）。

・オベロン・ヴォーティガーン

クラス：〈ヘキヤスター〉↓〈プリテンダー〉

第四次聖杯戦争からの虚映のサーヴァント。それまでは『妖精王』<sup>オベロン</sup>として振る舞っていたが、身内だけのときは『奈落の虫』<sup>三睡の時</sup>の姿になっている。

虚映のことは、藤丸立香が『好敵手』だとすると、彼は『悪友』だと認めている。あ

る程度の指示は聞きはするが、それ以外はお互いに好き勝手やっているそして大体は事後報告。

第五次聖杯戦争開始時までに、優笑顔しく嘆願側喝して、虚映作の”仮想宝具”をいくつか所持している。なお、この件に関して当人曰く、「手札は多ければ多いほどいい。そうだろうか？」とのこと。

〈所持している仮想宝具一覧〉

・『墮穢せし湖光』  
ケイオス・アロンダイト

↓ 『無毀なる湖光』の”なんちやつて”パクリ宝具。過剰使用するとぶつ壊れる。不

壊属性とは。

・『今は崩れし紺藍の魔城』  
コブ・オ・イム

↓ 詳細不明。第四次から五年以内に作られたものとされる。

半ば崩れた、血塗れの城壁が見える。

・『黄昏を臨む終秋の亡森』  
エー・ト

↓ 詳細不明。第四次から五年以内に作られたものもされる。

黄葉が吹き散る、夕暮れ時の森が見える。

・遠坂 桜 ↓ 朝霧 桜

本来は間桐家の養子として惨たらしい日々を背負うところを、オベロンが救出したことにより、虚映の暫定的な『従兄妹』として迎え入れられる。『妹』ではないのは、色々と不都合な部分が見えてしまうからである決して個人的事情ではない。

魔術属性はもちろん『虚数魔術』。加えて、魔力量が人並み以上に開花したため、虚映の製作活動を手伝うこともある。魔術協会からの”封印指定”対策として、虚映の『風：共鳴』も違和感を持たれない程度に習得している。

最近の悩みは食べ過ぎで太らないか心配なのと、いい加減子供扱いはやめてほしいと思う反面、このまま甘えたいと思う難儀な乙女心をどうかしたいとか。

〈その他〉

・朝霧家両親、及び一族

はじめはマトモだったが、次第に非人道的なことに手を出しはじめていた。虚映を『作品』としか見ていなかったために根絶やしにされた。ナムナム。



・間桐家生き残り一家

↓虚映に殺されず、まだ冬木市のどこかに住んでいる。なぜか知らないが、通帳に贅沢しなければ普通に過ごせるだけのお金が入ってた。

犯人曰く、「ワカメは大事だから、うん」。

・言峰 綺礼（愉悦神父）

↓初めは愉悦できない（・ω・）としていたが、ギルガメッシュと居たとき（＝原作）と大して変わらないう悦でできているため、あまり不便していない。

ただ、遠坂家の資産に関してはザルになってしまったため、虚映に一任していたりする。やっぱザルだった（なお、虚映はそれ含めて一度過労で倒れかけた。愉悦）。

虚映達とは、第五次が始まるまで不可侵としていた。開始後に関しては言うに能わず。けどなぜかご近所さんのノリになることが多い。

・遠坂家

↓遠坂母は原作通り記憶障害持ちになってしまっている。凜ちゃんは四苦八苦しなから頑張っており、いずれまた桜ちゃんと家族付き合いがしたいと思っている。

トキオミの葬式から一年後、間桐家と同じく贅沢しなければ数年は持つ程度のお金が振り込まれた。しかし、二年と経たずにすぐ溶けた。

犯人曰く、「サービスであげたら、なんかパツと消えてた。何言ってるかわからねー（以下略）」。

・虚映の通帳

↓間桐家は割と節約してる。遠坂家はすぐ溶けた。桜ちゃんの学費は問題なし。生活費も問題なし。

ただしお小遣いはあんまり無い。虚映は宇宙猫。後に彼は語った、「大金に胡座をかいてはいけない」と。妖精王は呆れていた。

## 第四次聖杯戦争／zero編

どうしてこうなる？

初めまして諸君、冒頭からいきなりで失礼する。いや、本当はこんな口調じゃあないんだけど。少し自己紹介してもいいかしら、いいよね？

え？なんで唐突すぎるのかって？だつてさあ……………。

「やあ、初めまして。随分と面白い喚ばれ方みたいだね。おっと、自己紹介、自己紹介。僕はオベロン。妖精王オベロン。一応キヤスターとして来てみたけれど、君がマスターでいいのかな？」

だれが”黒幕”を呼べと言ったのか、吊し上げて問い質したいぐらいです……………。

話をしよう。割と慌ててるから言葉が雑になってしまおうが。

オレの名前は『朝露<sup>アサツユ</sup> 虚映<sup>コエイ</sup>』。未だ人気のソシャゲ『FGO』のプレイヤーの一人だった……。そう……。あれは今から36万、いや、一万……。とか言うほど昔じゃなくて、簡単に言うると『周回してて周り見てなかった事故』なんですよ、ええ。

しかもテンプレ通りなら神様に会って「転生シマスカー？」みたいなこと聞かれるんだらうけど、そんなこともなくて。気づいたら転生してたというわけ。

転生した家はどうやら魔術師の家系だったみたいで、隠すまでもないことだから言うのと、家系術式は『風魔術』に分類されるらしい。詳しいことまではついぞ教えてくれなかったから何とも言えないのよね、これ。

それと実はもう一つ、親にすら言っていないものがあるんだけど——それはまた追々。

そんなこんなで現在は二十歳手前、何をしているかと言うと——親のコネ使って冬木市にいます。なんで？

原因は分かっている。『親』だ。本当ならうちの父親が参加するはずだった『冬木の聖

杯戦争』けれど、魔術の実験中に術式が暴走。腐るほどの大金残して両親は物理的に蒸発。そして今に至る。

それから冬木市に到着し、親が遺っていた深山町の一区画の家に引越して荷物を運ぶ。家はそこそこ大きいものの、前世で見た衛宮邸と比べると一回り小さいぐらい？かな。

中の整理をしていると、やっぱりありました地下室。降りていくと、まあ呼び出す準備をしていたのだろう、書きかけの魔方陣が描いてあった。実際のところ、冬木市に来た瞬間、手の甲に鋭い痛みを覚えたから、もうマスターとしては登録されてしまっているんだろう。

どうしようもないので夜までお気に入りの本ども読むなりして時間を潰していた。

そして、刻限となる。



—— 告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処ここに。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷しく者。

汝、三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤のま——

—— ツクチュンアアアイツ!! 畜生めえ!?”

やつちまつただあああ!!? そんなことあるう!?”

こんな一世一代レベルの大事な場面で普通くしやみなんかするか…? まあいいさ、魔方阵もうんともすんとも言わないし、失敗だろこれ。

「はあくあ、くつだらね。止めだ止め。ま、聖杯なんてどうでもいいしねー。戻って寝るか—— つとと。つて、あ」

緊張していたんだろうなあ、硬い身体を背伸びをしてほぐそうと思った。そうしたら、暇潰しに持ってきて、退かした机の上に置いておいた最近お気に入りの本——  
”シエイクスピア作『真夏の夜の夢』”——が魔方阵の中に落ちて——

「うおっ!？」

魔方陣がとびきりの魔力反応を叩き起こす。そこから現れたのは、メルヘンな絵本の王子様の様な格好をしたサーヴアント——

っておい、ちよつと待て。抑止よ、それは“アリ”なのか。

「やあ、初めまして。へえ、随分と面白い喚ばれ方みたいだ。おっと、自己紹介、自己紹介。僕はオベロン。妖精王オベロン。一応キヤスターとして来てみたけれど、君がマスターでいいのかな？」



——と、ここまでが冒頭の出来事までの経緯と言ったところだ。そろそろ落ち着いてきたので話し方を元に戻そうと思う。

こうやって落ち着いたことでなんとなく読めてきたが、とりあえずはまあ意志疎通を  
図るとしようか。

「あー……つと。そうだ、名目上オレがあんたのマスターということになる」

「それは良かった。この通り、お飾りの王様だけど、微量ながら君の力になるよ」

人当たりのよさそうな笑顔を浮かべるオベロン。はつきり言つて、正体を知つてると  
胡散臭くて仕方がない。と、普通は思うだろう。

そもそも、F G Oにおいてオベロンというのは、他人の心を読み通す『妖精眼』を持つ  
ている。だが、残念ながらオレには効かない。もう一つの術式が作用しているからな。

——というわけで、ちよいとカマをかけてみましょう。

「宜しく頼むよ——」ライダー”のオベロン」

「——。おいおい、しつかりしてくれよマスター。僕は『キャスター』だよ？」

うん、嘘だな。オレがライダーと言った瞬間に固まったのが見えていた。それに少し  
本性の片鱗が出ている。

とは言え、地下室でこうも長話するのも「つまらない」。なので彼を上へ連れていき、とりあえずは応接間に通す。

その後、応接間にだけ秘匿用の隔離境界を、なるべく他陣営に悟られないように静かに張る。そして、オレはオベロンの前に座り、喧嘩をふっかけてみることにした。

「さてと、これで他の奴らには聞こえないし知られない。というわけで――

――なんで来たのかな? 『プリテンダー』」

「――へえ」

オベロンの顔が変わる。さつきと変わらない微笑みを浮かべてはいるが、その笑みはどちらかというところ、そうだな――『警戒』、に近いだろう。

なので、勝負を仕掛ける。こういう時に前世の知識があると中々「楽しい」もんだ。

「惚けるなよ。――」  
「プリテン」、  
「カルデア」、  
「藤丸 立香」

「……………」

黙る。つまりは凶星。やはりこのオベロンは間違いなく、FGOの2部6章の黒幕、現在と未来に対する大嘘つき。そして――

「『奈落の虫』」

「――驚いたなあ。君、一体何者だい? まあ別に知りたくもないけどさ」

オベロンがついに破顔する――嫌悪の、だが。

やれやれ、こんなのを召喚するなんて、オレも中々ヤキが回ったものだな。さて、ここからどうするべき、か。

「それに君、なんなの？俺の『妖精眼』が機能しないと、本当に人間？」

「失敬な、まだ人間だよ。この先どうなるかは知らねえけどな」

さて、この先の『原作知識』とやら、ウロ覚えでどこまでいけるもんかね。現状はオベロンとの完全な協力体制の確立、本来のマスター候補である『雨竜 龍之介』の対処、そしてこの先の展開をどうしていくか。

中々先の読めない状況になってきたけれど、存外、昔のような平々凡々な生活じゃあ味わえないような、面白味があるじゃないか。

## とりあえず、作戦会議

目下のところ、今日の前にいるこのオベロンが、『妖精國のオベロン』であることが判った上に、恐らくはカルデアとの決着までの記憶を有している。それもそうだろうに。オベロンはカルデアに負け、奈落へと落ちていったのだから。

ただ、少し飛ばしすぎたのかもしれないな。さっきからずっと懐疑的な目で見られてる。すこぶる警戒されてるわ、これ。うーむ、さて、どう話を綴っていかうか……。

「——、止めた。あんたと腹探り合うのはこっちに不利すぎる」

「はあ？」

いわゆる快樂主義なオレからしたら、このオベロンと腹の内を探り合うのはちと不利に過ぎる。理由としては、

一つ、前世の記憶についての言い訳がしにくいにも程がある。

一つ、あくまで“光景を視る”ための『千里眼』と違って、“心を視る”ための『妖精眼』を誤魔化し続けるのには無理がある。

そしてなによりも——『奈落の虫』にはストレートに話した方が“舞台”も

盛り上がるだろう。

「そら、こつちの”偽装”も解いたから、なんで知ってるかぐらいはわかるだろ」  
「情緒不安定かよ。というか、そこまで具体的には見えないっての」

あれ？ そうだっけ、結構昔のことだからほとんど忘れてらあ。と思つてたら、呆れたような表情からもつと呆れたような感じになつてきた。あー、視てるなコレ。

……というか、オベロンつて確か——。危ない危ない、坩堝に嵌まるとこだつたわ

「ま、細かいことはいいや。とりあえず、今後の方針と対策云々から始めるぞー」

「おいおい、俺が言うのもあれだけど、君が知ってる俺を信じていいのかよ？」

胡乱気な目でみてるけれど、大丈夫でしょう。本当に”否”つていうレベルだったらとつづくにこの世界のことぶち壊しに來てるだろうし。

「そりやあな、あんたの言葉は信用できないし、あんた自身は信頼できねえよ」

「そうだろ？ だつたら——」

「けどな」

オベロンの台詞を遮る。確かにコイツの言葉は全部ねじ曲がつて嘘だらけ。加えて『気持ち悪いから』つていう理由でブリテン諸共世界——人類史を根絶しようとした、とある数学教授もビックリな”敵”。

けれど、だからこそ言えることがある。

「あんたのやることは信頼できるし、あんたの信条は信用できる。一夜の狂騒？なら万々歳さ。」

——夢で済むなら容赦なんていらないだろう？」

「——。うっわ、本心から言ってるのかよ。何？君ベリル・ガットみたいな感じの奴？」

「失礼だなオメエ。誰があんな頭トンチキ渴愛マードリオンだよ。——まあだけど、狂ってはいるわな」

目の色が変わった。口元が釣り上がっているのが自分でもわかる。というか、そんなヤバそうな顔してるかね？これ。とか言いつつ、気分が高揚してるのはホント。

魂胆の探り合いはこれでオシマイ。一旦空気を落ち着かせるためにテキトーにお茶を沸かして差し出し、自分も一緒になって飲む。

あー、うまい、お茶うめえー。キメてるわー、これ」

「本心声に出てるぞー。まあそこそこつてぐらいの味だけだよ。————それで、ここからどうするのかな？」マスター」

お茶を置いてオレを見据えるオベロン。成る程、どうやら乗り気ではあるらしい。良き哉。

なので、オレもお茶を置いて語る姿勢を取る。前世については後々バレるだろうけど、そこはそれ。あくまで今は、開発中ではあるがオレだけの魔術礼装である”アレ”の結果としよう。

「まず端的に、今回の聖杯戦争の目標は”勝たない”ことだ」

「ふうん……う？つまるところ、あれか。ジョーカー的な動きしろってことかい？」

いいね、流石オベロン。”勝たない”の一言だけで動きまで読み当ててきやがった。そういう頭回るところにシビれちゃうね。

「そーゆーこと。ぶっちゃけてしまえば、オレ達は聖杯が要らない。いるとしても”目的の為の保険”でしかない。なら結局は要らないだろ？」

「そうだねえ。欲しがる理由も湧かないし、いいんじゃない？」

うーん、この。さすがにまだ三臨じゃなくて一臨の姿だけど、このなんとも言えない違和感としっくりくる雰囲気はこのチグハグ。流石はオベロンと言ったところか。

思考が脱線しかけているので路線戻して。基本的にオレもオベロンも聖杯はいらないだよ。オベロンはいわずもがな、オレは割と本気で願いもなんにもないわけだからな。

「で、こちら当戦場の地図と要所ね。赤マーカーは”御三家”っていう、この聖杯戦争の仕組み考えた人達のいるところ。青は特筆した龍脈のあるところかね」

「中々準備が速いねえ、僕のマスターは。——それで？僕は何をすればいいのかな？」

お、役に入ったか。ならうだ言うてもしよがないから、あんまり大事じゃないやっだけはしよって伝えましようかね。

「そうだな、まずは——」



く冬木教会く

成る程、ここがアイツのハウスなわけね（唐突）。しかしまあ、聖杯戦争において大事なプロセスとは言え、あんまり気乗りしないなあ。

だつて……ここにうちの情報与えたら、あの愉悦神父にもれなく伝わるってことだし。あーやだやだ、憂鬱なんじゃない。

「（文句言つてないでさっさと行つたら？ 僕も忙しいんだけど）」

うーんひどい（棒）。さてと。そんなじゃま、顔も整えていきますかねえ。はあーどっこいしよー。

——教会の扉が開かれる。言峰 璃正 は応対をするために作業を中断し、入ってきた御仁を出迎える。

聖堂へ入ると、そこに居たのはまだ年若い少年だった。だが、中々に修羅場を潜り抜

けてきたであろう風貌でもある。

——この少年、只人ではない——長年の経験からそう直感した璃正は、彼に話しかけようと近寄っていく。

「ようこそ、冬木聖堂教会へ。如何されたかな?」

「お初にお目にかかります。私は 朝露 虚映 と申します。聖杯戦争における参加表明をしに参りました」

やはりか。璃正はそう思わずにはいられなかつた。年若いものの、相当の修練を積んだであろう身のこなし。そして、只人ではない気配。

「成る程……」

「もしや、規定違反でしたか?」

——若いのに、よくできた子だ——。

そう思いながら、困つたように眉を下げる少年に慌てて璃正は訂正を入れる。

「いや失礼、考え事を少々。勿論問題ないとも。ましてや、君が一番最初だ。それで、君のサーヴァントはどこかな?」

「当方のサーヴァントは現在、諸事情で席を外しております。なので、私の方からクラスと真名の登録をば、と」

はて、諸事情。喚ばれた土地に張り付けになるタイプのものか、はたまた自らは動か

ないタイプのものか。そう考えるも、今は彼からの答えを聞くことにする。

「承知した、少々待ちなさい。——待たせたね。では、宣誓と共にサーヴァントのクラスと真名を」

「私、朝露 虚映 は、聖杯戦争に参加することをここに宣言する。我がサーヴァント、クラスは——〈キヤスター〉、真名を〈オベロン〉」

璃正は、告げられたその名前に驚く。オベロンと言えば、シエイクスピア作、『真夏の夜の夢』で一躍有名になった妖精王であり、その存在は璃正でも触り程度ではあるが知っていた。

しかし、その妖精王に関する聖遺物なぞついぞ見つからず、そもそも創作上の存在だとされて見向きもされていなかったものだ。

どう喚んだのか、なぜ喚べたのか、興味がないわけではないが、それを監督役である自身が聞くのは越権行為に値するとし、自重することにした。

「——うむ。これで登録は完了した。君の武運を祈る」

「——お客人ですか？」

奥から声がかかる。振り向けば、自分の息子である『言峰 綺礼』が歩み寄ってきていた。

「おお綺礼か。丁度いい、彼は朝露虚映君と言ってね。お前と同じ聖杯戦争の参加者だ」

「朝露です。宜しく」

ふむ。やはり綺麗なお辞儀だ。礼儀がすっかりしている。彼らには是非とも生き残ってもらいたいものだ――。

――げえええ!!? 綺礼!? 綺礼ナンデ!?

最悪だ。初っ端から最悪な相手に顔知られちまったよ。

あーもーやだ帰りたい……帰るけどさあ! (逆ギレ)

「やあ、おかえりマスター。随分と楽しそうだね」

「へいへいそりやどーも。そっちも”虫蔵”掌握オツカレサン」

うっへえ、嫌味の応酬で笑うしかねえわ (笑)。

オベロンにはオレが教会に行っている間に、戦力として某虫爺さんの虫蔵を掌握して

もらいにいってたってわけ。

オベロンは『奈落の虫』だからこそ、虫の死骸やらなにやらを攻撃に転用できる。なら配下にする虫が多ければ多いほど強化されるのでは？と狙わせたわけサ。

お陰様でオベロンからは、『嫌味か？』と随分と睨まれちゃたけどねえ！お互い様だよ  
ねえ、あつはつはつはつは！

「んで、もしかしてその子——」

「ん。ああ、そうそう。蔵の中にいたから連れてきたよ。君、こういうの好きでしょ？」  
「んー、やつば間違いないねえな。」 間桐 —— いや、まだ『遠阪 桜』だな。だいがぶ汚されてはいるがまだ問題ない。心臓の虫も……あー、こりやあ真つ先に無力化されてんなあ……。

「ってか、ここに桜連れてきちゃカリヤおじさん参戦理由どうすんの？身代わり必要になつちやう系はやだよ？あーもーメンドクサイなあ もおおおつ。」

## 裏話：オベロン①

——落ちていく、堕ちていく、墜ちていく。ゆつくりと、永遠に、永久に、落ちていく。

”堕ちた妖精”を放ち、カルデアに取り入り、モルガンを討ち、厄災達を解き放ち、あの厄介な神の死骸だって消してくれた。お膳立てはバツチりだった。実際、もうブリテンの跡は”奈落の虫”が食らい尽くす だけだった。

けど、負けた。いや、正確には目的の前半——ブリテンの崩壊はほぼ完了していた。けれど、人類史の破壊までは出来なかつた。

英霊になったアルトリアと、それを信じたカルデアのマスター——『藤丸 立香』。ほんと、憎らしいぐらいにキラキラ輝いてて、それがもう、本当にうざつたらしくて。

——ああでも、せめて”君”に会うことができたなら。

叶わないことを、鼻で嗤う。なんだ、充分に未練たつぶりじゃないか。

空が閉じる、瞼も閉じる。空を視た、星を視た。ならもう充分だ。あとは眠るだけ。

永遠に醒めない、深い深い夢に――

――それなのに。気付けばこんな場所に、またサーヴァントとして喚ばれて、いつきりため息を吐きたくなっただき。

聖杯戦争？やれやれ、あのカルデアのマスターみたいな奴じゃなけりやいいんだけども。ま、そうじゃなくても騙してさっさと帰らせてもらうだけどさ。

けれど――俺を喚んだマスターはおかしなやつだった。

『よろしく頼むよ。"ライダー"のオベロン』

『――』

思わず閉口してしまったよ。いやあ、今思うとあれは悪手だったねえ。多分あれで確

信を持たれたよ。一体どうしてバレたんだろうね？

それから自己紹介してもらって、尋問まがい——つていうか、アレ確信持った聞き方だったよね。そもそも、あのお話を一体どこから知ったのやら。

ぶつちやけ言ってしまうと、俺より怪しかったよね。いやほら、普通は自分だけが知ってるはずのこと言われると怪しむものじゃない？俺だって同じことしてたから、そういうの判るからね。

かた思えば急に「止めた」とか言う。なんなの？情緒不安定なのかな？そう思つて素直にぶつけてみる。

——振り返つて見せたその笑みを見た瞬間、俺はアイツのことがよく判つた。”

ああ、コイツ同類か”つてね。

『夢で済むなら容赦なんていらないだろ？』

俺がブリテンという島——言ってみれば、”神秘”という概念が望んだ『破滅願望』に對して、コイツは多分、人類が生み出した、人類悪とは別の『破滅願望』なんだろう。もしくは、そうあれとされたか。



ぶっちゃけ、割と本気でお仲間なんて欲しくないし、ぶっちゃけ嫌いだからサボろうかと思っただけど、なんとなく”面白そうだ”とも思ってしまった。

「そうだな、まずは——オレがなんで未来を知っているかを教えようか」

「おや、そういうのって教えてもいいのかい？」

ちよつとそれは予想外だった。確かに、なんで俺——僕のことを知っているのかは気になってたけど、ええ？そういうのつてもつとこう、引きずらない？

「オレがなんで知ってるかっていうと、オレの魔術属性が関わってくるんだわさ。

オレの魔術属性は『風』——つてのは表向き。本当は『無』属性の『虚構魔術』つていうやつなわけ。まあ諸々の説明は省くけど、それで作った魔術式の一つに、『<sup>ホロスコープ</sup>星天投影鏡』つていう、まあ擬似的な未来視だな。それで視たつてわけ」

ふむふむ、成る程——うーん、嘘でもないけど本当でもない、ね。まだ何か裏があるんだろうけど、何かまでは解んないか。

にしても、擬似的な未来視ねえ……。

「それは、『千里眼』とは違うのかい？」

「全く違うな。『千里眼』はあくまで”光景を目視する”ものだ。対してこつちの『星天投影鏡』は、”未来に起こるであろうことを過去にして現実に映像投射する”ものだ。

「ま、簡単に言えば、直に目で視るか、映画みたいにして見るかの違いだな」

「いやはや……正直、絶句ものだ。確かに、性能的には『千里眼』の方が優れているだろう。けれど、こっちはそれよりとんでもない。だって、言ってしまうえばこれは——

未来に起こりうることを多人数で見れるってわけだ。

「そんなの、ぶっ壊れにも程がある。それでよく」抑止「に目を付けられていないな、と思ったけど、よくよく思い返したら言ってたじゃん。——『虚構魔術』って。

「虚構。つまり、」存在しないものを象る「ということ。ならそこから推測して大体のことを理解する。」

「ふんふん……。つまり、」抑止「とかにバレたら間違いなく目を付けられるけど、その『虚構魔術』のお蔭で誤魔化している、と」

「全く、お前さんほんと流石だよ。こちとら全く説明してないんだがな」

「おいおい、今回の僕のマスターほんとぶっ壊れすぎだろ。流石の僕でもひきつった顔になるぞ。」

「そんな俺の内心を知ってか知らずか、まだまだ会議は終わらない。」

「まあ、言うて発動までにバカみたいに時間かかるし、消費魔力もバカにならんしでー、つてまあ、それは『虚構魔術』全般になんだが。」

そういうわけだから、『星天投影鏡』で見た未来——”オベロンが参戦しなかった場合の未来”でのストーリーから考えて動こうと思う」

「ちなみにだけど、僕じゃなかったら本来誰になつてたのさ？」

『ジル・ド・レエ』

えーつと？——うわ、興味本位で聖杯から情報覗聞かななきや良よかつたよ。なにこいつ、ほんと、人間の醜みにくいところを浮き彫りにしたような奴じゃん。

ほんと、人間つてこういうやつを生み出しては消そうとする。醜みにくい上に吐き気がしそ  
うだ。

おっと、話に戻らないとね。

「ごめんごめん、続けて？」

「おう——アレで視た通りなら、参加するマスターはオレを除いて六人。」

まず、〈ライダー〉イスカンドル。マスターはウェイバー・ベルベット。

マケドニアの征服王だな。コイツは余程のことがない限り相手にする必要はない。敢えて狙うなら、マスターが未熟なのを狙って見誤った判断を誘うのが有効と考える。

次に、〈ランサー〉デイルムッド・オディナ。マスターはケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

コイツはぶつちやけそこまで脅威じゃない。強いていうなら宝具にさえ気を付けなければいい。マスターも水銀を操ってきはするが、『戦争』を貴族の嗜みか何かと勘違いしてるド阿呆だな。無視だ無視。

んでもって〈バーサーカー〉ランスロット。マスターは間桐 雁夜

「は？いや待て待て。え？アレってバーサーカーになっちゃったの？」

静かに頷かれる。うへえ、どんだけ執念貯まってるんだよ。はあ……”アイツ”から”最優の騎士”とか言われといてソレとか、笑い話にもならないね。ま、他所から聞いた話なんだけどね。

妖精國の”ランスロット”——いや、『メリュジーヌ』はあれを元にしてるっていう話だったけど、そんなことになってたんだねえ。これだから人間は。

「コイツはお前さんの”本当の真名”を明かさない限りわからんだろうけど、コイツ自身は場合によってステータスの隠蔽やら変身やらしてくるから、嵌められないようにしないとな」

「何時から聖杯戦争はなんでもアリ大会になったのさ……」

いやほんと、聖杯戦争ってそんなトンチキなものだっけ？ なんだかよくわからなくなってきたなあ……。

あれ？ もしかして、あいつの居たこの汎人類史って、相当メチャクチャだったりする？ ええ……。

「おーい、放心してるとこ悪いんだが、ここからが本題だぞー」

「あ、ああうん、大丈夫だとも」

危ない危ない、まだ話は終わってないのにのんびりするところだったよ。まあ、のんびりしても勝てるだろうけどね。流星にアルトリアとか出てきたら気まずいのはあるけど。

「さて、ここからが本題というより、要注意陣営だな。こいつらがキーマンセルに成り得る、てか成る。」

一人目、〈アサシン〉百貌のハサン。マスターは言峰綺礼。

サーヴァントの方は単純にワラワラと出てくるアリみたいなものだけど、厄介なのはマスターの方だ。端的に言う性と性根の腐った聖職者。アイツ相手に近接戦闘はご法度だな。

二人目、〈アーチャー〉ギルガメッシュ。マスターは遠坂時臣。

こつちはマスターも強くはあるが、より警戒すべきはサーヴァントの方だ。

世界最古の王、”英雄王”とも称されるギルガメッシュは無尽蔵とも言える宝具をこれでもかと撃つてくる。しかも『千里眼』持ちときた。コイツに関しては、関わらない” or ”即・撤退”だ。

こいつらは互いに手を組んではいるが、ギルガメッシュの影響で言峰が裏切る。ま、残念ながらそれが何時か詳しいところは解らんがな」

ふむふむ。英雄王、ね。如何にもな奴が出てきたもんだね、いやほんと。口には出さないけど、僕はそういうの大嫌いなんだよね。

わざわざ関わる必要もないし、放置放置つと。やれやれ、中々面倒臭いメンツばかりで困るね——

「三人目、〈セイバー〉アルトリア・ペンドラゴン。マスターは衛宮切嗣」

「は？」

は？いや、流石に”は？”ってなるだろそれは。何？ウワサしてたら出てきましたつていうのか？勘弁してくれよ……。なんで汎人類史に来てまでアイツと顔会わせないといけないんだ。

セイバー、ね。凡人類史側とは言え、やっぱり面倒臭いな。別人とは分かつてるけど、顔は絶対そっくりだろ。”アルトリア”なんて名前なんだし。

「目下のところ、こちらの最大の脅威は〈アーチャー〉と〈セイバー〉の陣営だ。特にセイバーには、お前さんの本当の名前を知られた時が一番マズイ。

ただ、脅威度はギルガメッシュの方が高いな。理由としては、セイバー——アルトリア側はマスターとの不和と、奴自身の身勝手な理想・夢のせいで軽度の弱体化がかかってる」

「あ、そうなんだ。まあどうでもいいけど。それで？僕は何をすればいいのさ？」

作戦は聞いた、さっさと切り上げよう。————全く。理想を抱いて逝くのはどこの

アルトリアも同じなのかい？ほんつと————気持ち悪いね。

「そう急かさんな。まずオベロンには間桐邸に行き、そこにある”蔵”の中を掌握してもらいたい」

”蔵” あ？なんでまた」

”蔵” だなんて、また遠回りな。————つて思っただけど、蔵っていうぐらいだから、何かしらの聖遺物でも保管してあるのかな？

今のマスターの魔力量だと、良くて”オベロン”のままだ。”■■■■■■■■■■”になるにはあまりにも足りない過ぎる。それに、カルデアと戦ったときよりも遥かに弱体化

してるからね。なるべく早めに戦力増強を――

「ただの蔵じゃないぞ？その名も”虫蔵”さ」

「はははは、早速死にたいのかな？僕のマスターは。ああ、寧ろ殺されたいのかなあ？」  
いい笑顔で言い切りやがって、腹立つなコイツ。俺が人間も、妖精も、虫も、何もかも気持ち悪くて大嫌いなものぐらい”ホロスコープ”で知ってるだろうに。

割と本気で殺してやろうかな、と”槍”を出そうと思っただけ、慌てた様子で待ったをかけられる。

「待て待て待てつ、ちゃんと理由があるんだって。

――オベロン、お前さんは『奈落の虫』だ。言ってみれば、虫の死骸やら何やらで象られた”穴”だ。なら、少しでも触媒が多いほど助かるつものだろう？それに、あそこの虫のほとんどには魔力がそれなりにある。戦力にも糧にもなると思っただけだ」

「ふうん……。一応考えてはいるみたいだね。いいとも、掌握すればいいんだろう？」



——と、ひと悶着あつたのも数時間前。会議中に見せてもらった地図を頼りに間桐邸にたどり着きました、つと。

あー……なるほど。これは酷いね、吐き気がする。僕が嫌いなタイプだな。一番反応がでかいのがいるけど、後でいいや。さっさと”虫蔵”？だつたつけ。掌握してしまおうか。

——あのさあ……僕こういうのほんつと嫌いなんだけど。うじやうじやと有象無象に蠢く虫達の中に放り棄てられた裸の少女。まるで、あの時の僕みたいじゃん。

——ああほんと、反吐が出る——

気付けば少女を助けてしまつてるし。つて、心臓に虫？いいや、そこ退いてくれる？あ、あとついでに”それ”にへばりついてるヤツも取ってきてくれる？

うーん、別にどうでもいいんだけど、助けちゃつたし……まあ、マスターに任せればいいか。僕は預り知らないことだし。後なんか喚いてる”虫”がいるけど、放置でいいよね。長居してると鳥肌立ちそうだよ。

——さ、行こうか、ブランカ。今度の僕らは、どんな結末を迎えるんだろうね。最初

の目的である、汎人類史の崩壊か。はたまた、カルデアの奴らみたいに、誰かを助ける”英雄”になるのか。

願わくば、今度は巧い具合に事を進めたいものだね——

## 戦線開幕

——  
他愛ない  
——

——  
地を這う虫けら如きめ  
——

——  
ぐあつ?  
!!?  
——

「うーん、やつすい三文芝居だなあ」

二人して同じ意見を交わしてしまう。いや、仕方ないだろこれは。アニメ見てた同時は『おおー』とか思ってたけど、実際こうやって見ると安いにも程があるつてもんだよ。と、自宅で、予め起動しておいた“ホロスコープ”を覗きながら、ポップコーン食べ

ながら見させてもらってます。うめうめ、あんまし好きじゃないけど。

さて、これでもうストックしてある”ホロスコープ”の起動術式はなくなったわけだ。けど、遠目の観賞はここまででいいだろう。あとは実地観戦だな。

「んで？一応あの台座に”虫”を張り付かせてるわけだけど、壊すの？」

「うんにゃ、当分は無視よ。本格的な戦闘は明日からだからな」

ソファアの背もたれによりかかる。それでもつて背伸びをする。やれやれ、仕込まないといけないものが多くて困っちゃうね。ま、是非もナイヨネツ！

然程じゃないけど重い腰を上げて書齋に向かう。ひよっこりとオベロンも付いてくるんだが……まあ、いつか。

この書齋は、平時はただの書齋だ。だが、ある手順で本を動かすと、机が上がり、下からオレが今まで貯蓄してきた各種『虚構魔術』の発動結晶がしまつてある。

オレの『虚構魔術』はどれだけ効率化しても、びっくりするほど時間がかかる。だから予め、一工程シングル・アクションで発動できるように、起動式のみを外した全工程をこの結晶に閉じ込めてある。

ちなみにこの結晶、貴金属系であればなんでもいいのです。市販オツケー安上がり、うーん、オイシイ。ただし強度は保証しない。

「んーと、”コレ”と、”コレ”と……」

「うーわ、ナニこれ。えっと——『ホロウ・マナカノン虚式魔導砲術式』、『魔眼屈折反射術式』、『対・千里眼術式』……いやほんとに何これ」

なんかオベロンがドン引いてる感じがするけど、オレは知らん。生き残るためだったからなあ、兎に角作りまくったんだっけ。特に“千里眼組”には目をつけられたくなかったからね。

ちなみに『対・マーリン用対抗術式』もあるヨ。

さてさて、それじゃあ引つ掻き回しにいきましようかね。

「さ——It, s show time. だ」

——夜風吹き抜けるコンテナ置き場。そこに駆け抜けるような足音がいくつか鳴り響く。そして、ふと、とある場所で止まる。

そこには、二振りの槍を持った青年が佇んでいた。やがて、鎧姿の女騎士と青年がぶつかり合う。それを遠目に見る狙撃手が二人。そして、クレーンの上から眺めるへアサシンが一体。

——次いで、どこからも死角となるコンテナの陰から、ひよつこりと顔を覗かせる二人の姿。

「(うーん、あれが汎人類史のアルトリア？なんというか……鳥肌が立ちそうなんだけど)」

「おう、間違ひなくお前さんの反吐が出る『正義の味方』サマだよ」

こつそりと戦闘を觀賞しながら、念話でコソコソ話をする虚映とオベロン。本来ならば虫を放てばいいだけの話なのだが、戦場の空気感や相手の気配を知るためにも、この戦場へと来ていた。

しばらくして、拡声魔術でも使っているのか、恐らくはランサーのマスターのものであろう声が戦場に響く。

——そのセイバーは難敵だ、速やかに始末しろ。宝具の開帳を許す——

「遅くないか？いや、順当なんだろうね」

「まあな。様子見しすぎってのは否定しないけど」

そうこうしているうちに、ランサーが宝具である『破魔の紅薔薇』を開帳し、セイバーを追い詰めていく。

ふと、オベロンが他所を向く。何事かと思い、目線のみを向けると、どうやら“虫”からの報告を聞いているらしかった。

「（ライダー）が動いたってよ」

「（そうか、ならそろそろ、一幕目の中盤ってどこかね）」

視線を戻せば、セイバーはランサーの隠し種にしていたもう一つの宝具——『必滅ゲイの黄薔薇ホウ』を避けきれず、あえなく“聖劍”を封じられてしまっていた。

「(ああ、バカなの？片腕で戦えるとか、あのアルトリアとは180度違うなあ。気持ち悪っ)」

「(本音出でんぞー、”キャスター”)」

今にも唾を吐き捨てそうな勢いで嫌悪感を露にするオペロンと、ケラケラとしながらも窘める虚映。

そして、セイバーとランサーが互いににらみ合い、再びぶつかり合わんとした、その時だった。

『A—rrrrrrrrrrrrrrアイツ!!!』

「(いいや、うるさっ!?)」

地に轟く落雷と共に、天を揺るがすような大声が響く。あまりの大声に二人共耳を塞ぐ。

キンキンと耳鳴りがしながらも視線を戻せば、“ライダー”————イスカandalが名乗り上げているところであった。彼のマスターたるウェイバーが文句を上げている



が、デコピンで黙らされてしまう。

「(うわカワイソー)」

「うぬら——」一つ我が軍門に下り、聖杯を余に譲る気はないか!!」

そんな大声量が、虚映達が潜むコンテナ裏まで聴こえてくる。聖杯戦争の仕組みやどういう代物なのか、前世の知識で知っている虚映はもちろん、オベロンもまた、そんな阿呆の極みのようなイスカンドルの台詞に——苦しそうに口元を抑えていた。

「(わらうのはいいけど、バラすなよ。ここでバレるとかナイからな)」

「(わ、かってる、けどっ——バカみたいで、っ)」

その間に、イスカンドルとセイバー・ランサーの会話、というよりも、戦闘を中断されたことへの怒りが叩きつけられている。

そして、それをさらりと流したイスカンドルは、高らかに腕を広げては声を荒げて叫ぶ。

「———そうとも、他にもおるだろうが!!闇に紛れて覗き見してる連中は!!己が胸に誇りを抱く英霊ならば!今、ここに!その姿を現すが良い!!なおも顔見せを怖じる様な臆病者は!」

——征服王イスカンドルの侮蔑を免れぬものと知れ!!」

「(出る？僕は嫌だよ?)」

「(こつちも願ひ下げじやい。ペーってしてやりてえ)」

顔をしかめて不動のまま見続ける。すると、T字路となつてゐるコンテナ通りの街灯に、金色の光を放ちながら、一体のサーヴァントが現れる。

——それは人ならざる神の如き輝き。紅い双眸を、不機嫌そうに見開いて、その口を開く。

「——我を差し置いて王を称する不埒者が、一夜に二匹も湧くとはな」

サーヴァント——ギルガメツシュ。古代メソポタミヤ王朝における人類最古の英雄王。その眼には、万象見通す『千里眼』を持つという。

しかし、その『眼』には、虚映達の姿は映つていなかった。故に、ギルガメツシュはこの戦場に立つ前、己の眼に見通せぬものがあることに苛立ちを抱いていた。

その原因は何を隠そう、虚映の術式によるものである。今晚持つてきた、というよりも、この術式を完成させたその時から使い続けている術式——『対・千里眼不可視化術式』である。

これにより、虚映、並びにオベロンは『千里眼』による認識がされることはない。

——つまるところ、『アヴァロン・ル・フェ』において、マーリンがオベロンを認識できなかつた原理と同じであり、それこそが、オベロンの持つ『対人理』スキル、その魔術式化としての完成形である——。

「——我が拝謁の榮に佳くして尚、この面貌を見知らぬと申すのなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すら——ないッ!!」

「(よく見ておけキャスター。あれが英雄王ギルガメッシュの主要宝具——  
ゲート・オブ・バビロン『王の財宝』だ)」

ギルガメッシュの背後より、金色な波紋が浮かび上がる。そこから、神話級に匹敵するであろう、“神秘”を宿した武器が、その先端を覗かせる。

間もなく撃たれる——その瞬間、彼らの視線の端に、黒く蠢くものが現れる。目視では、辛うじて人型であるとわかるが、それ以外——ステータスなどといったものが全く見えない。

「(——で、あれがランスロット、ね。随分と酷い姿になっちゃってまあ……。僕はあつちの方が好きだけどね)」

『Uuuuaaaa……』

「——誰の赦しを得て我を見ている。狂犬めが。せめて散り様で我を興じさせてみせよ、雑種」

”神秘”を秘めた武具が、波紋より発射される。そして——ランスロットに向けて、炸裂する。

だが、当のランスロットは全くもって無事であり、それどころか、ギルガメツシュの放った武具を手に取り佇んでいた。

イスカンダルの称賛を余所に、怒りに顔を歪ませるギルガメツシュ。その怒りと共に、黄金の波紋を幾重にも展開する。波紋から放たれる無尽蔵の”宝具”達。その全てをランスロットは弾き、打ち返し、叩き落とす。

——それがまさに、”無窮の武錬”。

「——痴れ者が。天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるなど——万死に値する!!」

加速する戦況を見つつ、オベロンと虚映は戦力分析を積み重ねていく。

特に虚映の脳内では、膨大なほどのトライ&エラー、そして、分析結果によるサーヴァントの性質・性格を踏まえた作戦が立てられていた。

「(あのギルガメツシュは最も傲慢だった頃。だからこそ、倒すのならば戦争が終わる前

にケリを着ける。しかしこの後にギルガメッシュは必須……アルトリアは聖剣が封じられている為、戦力が激減。それらを踏まえた作戦は……しかし、ランスロットのマスターがカリヤだとして、その目的・利用価値は———」

「(……………)」

それから戦況は進み、ギルガメッシュがマスター——遠坂時臣の令呪によつては撤退し、その場はお開きのような雰囲気となる。

それを感じ取った虚映達もまた、撤退の用意をする。

「——さて、戻ろぞキヤスター。こちらも仕掛けを動かさなきゃならん」

「(はいはい。”アレ”だろうか？どこで仕掛けるのか見物にさせてもらうよ。———」

——まあ、”**■**<sup>ア</sup>**■****■****■**”を模造するつて、相当物好きなんだらうけどさ)」

「……………むう？」

## ”呪塊妖精”

夜半の刻、誰もいない道路、何も起きないはずはなく……。

というわけで、やってきました。ジル・ド・レエ登場シーンのアソコ。まあ正確には遠視の魔術で見てるわけなんです。

ここでセイバーさんにはちよつとした実験に付き合ってもらおうと思っけています。まあ、実験っていうとどこぞの”殺しが愛情表現な奴”みたくなるから嫌なだけども。

「さてと、んじやまキャスター。GO」

「メンドー——んんつ、結構気が引けるんだけどね、これ」

遠視で見ている景色に、影が蠢く。さてさて、一体どんな風にやってくれるんでしょかねえ？あの”騎士王”サマは、さ。

——夜。無人の道路を疾走する一台の車両。街中で走れば即通報もののスピードで、粗つばいながら割と正確な運転をする。

「ね、ね！結構スピード出るものでしょう！」

「お、思いの他、達者な運転ですな……」

峠の道走り屋のように駆け抜ける。歓声を上げながら乗っている女性——アイリスフィールと、苦笑いしながらも護衛とさして付き添うセイバー——アルトリア。

巧みな運転と強烈なスピードで走るそれは、常人から見ても相当なソレと伺える。



「専門の運転手を雇っても良かったのでは……」

「ダメよ、つまんな——あいや、危険ですもの。ここで敵に襲われたらどうするの？」  
 などと言いつつ、割かし運転を楽しんでいるアイリスフィール。そのはっちゃけた姿に、なんとも言えない状態になるアルトリア。

ふと、顔を前に向ける。アルトリアは遠目ながら、何かを“居る”のを視認した。

「——止まって！」

ブレーキを踏み、急停止する。スリップ音を鳴らして軽く滑りながらも、蠢くものから少し離れた位置に止まる。

「アイリスフィール。車から出ないで下さい」

そういつてアルトリアは車の外に出る。

ゆらゆらと揺らめく“影”。まさしく尋常ではない様子だった。アルトリアはもしもに備えて、『風王結界』インレシブル・エアを纏った聖剣を喚び出す。

「貴様——何者だ」

「……しし死ぬつててなnだああ？ここkろしstらwくるかなああ？あはhhはは」

ベトリ、ベトリ。糸の切れかけた操り人形が歩むかのように、ゆつくりと向かってくる“ソレ”。不気味な声をあげ、人なのか本当に怪しさを覚える。

そして、次第に姿がライトに照らされると――

――”ソレ”はまるで、泥でできたかのような、醜い人型の、青年のような”ナニカ”だった。

『ひっ!?』

「そこから離れないで下さい!」

「Coooo!Cooooooooooo」■■■■■■■■■■『!!』

やがて、ギリギリ保っていた人としての姿も崩れ落ち、不定形スライムな影のような姿となる。

不協和音のような鳴き声を上げながら、にじり寄ってくる”ソレ”。

「止まれ!それ以上近寄れば斬る!!」

アルトリアがそう声を上げた、その時だった。

『■■■■■■■■■■』

「くっ、悔るなっ!!」

突然”ソレ”は自らの体から触手のようなものを伸ばし、アルトリアを捕らえようとする。”直感”で、”ソレ”に触ること自体良くないものと感じ取ったアルトリアは、聖剣で触手を切り裂いていく。

『!?!』

恐らくは苦悶の声と思われる絶叫を上げながら、くねり悶える”ソレ”。

最早、人ではないと判断したアルトリアは、聖剣を振り上げ、一刀に斬り裂く。今度は悲鳴も断末魔も上げることなく、ただ塵となつて消えていった。

「セイバー、大丈夫なの?」

「ええ、ですがアレは……………」

アルトリアは自らの記憶を遡る。斬り裂いた一瞬、アルトリアはあの”影”から、自らがよく知る気配を感じた。それは、時として自らを助け、時として自らの”仇敵”として現れた存在——

「(——あれは間違いなく”妖精”の気配……………だが、私の知るものよりも禍々しく、そしておぞましい。一体、何が……………)」

——と、まあめでたく騎士王サマは勝利を刻みましたよ、と。うーん、やつぱり”モドキ”程度じゃ話にならないか。にしてもああまでバツサリいくとは……人の心ないのかね？（外道）

皆さんお気付きの方はお気付きだろう、オレが何を生み出したのか。やれやれ、勘のいいガキは嫌いだよ。

そう、何を隠そうオレが生み出したのは、お馴染み『2部6章：アヴァロン・ル・フェ』に登場した、”堕ちた妖精”こと『モース』なのさ！（ケルヌノスデアドン）

とは言え、本来のモースは妖精達によつて殺された『神様』からの”呪い”呪によつて生まれたものであり、オレがやったのはそのモドキでしかない。だから本来のモースよりも呪いの力が弱いし、動きもトロいったらありやしない。

「やれやれ、マスターも酷いものだ。まさか人間にモース毒を打ち込むなんてね」  
「オレの発想じゃねえよ。」前例”がいたからやってみただけだ。今後はやらんよ、多分な」

心底嫌そうな顔をするオベロンに、オレはそう返す。なんで嫌そうかつていうと、オベロンは、『オベロン』になる前は『モースの王』として活動していた。なら、モース毒

だって作れるのでは？とダメ元で聞いたわけ。

そしたらなんかできちゃったから、丁度都合のいい器もあつたし、それに注入してハイ完成。名付けて『ゲル・モース』。うん、そのまんまだな。嫌なのは存在じゃなくてオレのネーミングセンスな、ガハハハ。泣きそう。

「とりあえず、仮称ゲル・モースより、単純にモース毒を固めた量産体の方が効率いいな」  
「確かにね。モースを作れるって解つたお陰で、力もある程度戻つてみたいだし」

椅子の背凭れによりかかりながら、結果を資料にまとめていく。お陰様ですこちらファイル五つ目でございますよ畜生。

ひっぱり出せば意外と色んな手札あるからな、オベロンって。中々面白い”ゲーム”ができるってもんよ。

「そういえば、マスターは傭兵なんてやってるんだっけ？お金なんて腐るほどあるのに、なんでそんなのやってるのさ」

「趣味。つまらん平穩より刺激的なもんが欲しい、以上」

次の策を考えながら答える。だってそうじゃない？前世でも、特にやれることもやりたかつたこともなかったわけだし。無駄に平和だと惰性に生きるしかないからねえ、つまらんつまらん。

つとと、まあ下らん話は置いて。つか、いきなりなんでそんなつまらん質問する

かね？お陰で”戦略”<sup>ルート</sup>組み直さにやらなくなつたわい。忘れん坊は困るネ。

「急にどないした、そんな質問。お前さんにや珍しい」

「いや？ただの興味本意だとも。ところで、あの子はどうするんだい？」

ほほん？なるほど、こういう会話からマスターについて知ろうとするわけか。まあ、いいけどさ。

とは言えだ。確かに桜ちゃんの今後については考えないといけないな。ただでさえあの子は下手すると闇落ちしかねない、ある意味将来のジョーカーだからな。

とりあえずのところ、桜ちゃんの高校から大学まで、掛かるであろう必要経費は別口座に分けてはある。それもあつて残つて使える金が割と少ないんだが……。そこのところはオベロンの力もあつて安上がりで済んでるしな。問題なし、つてやつだ。

「ま、オレ達が順当に勝ち上がつて、最後の決戦”まで生き残つていればそのまんま面倒見るな。負けたら次策で遠坂家ないしは衛宮家に預ける」

「遠坂つて、あの根性無しのかい？悪くないけど。衛宮家つていうのも珍しいね」  
うーん、相変わらず批評が酷い。ま、是非もナイヨネ！（二度目）

正直言つて、今から辿るルート上では遠坂に任せるのは無しだ。あれは今後、外道神父こと言峰綺礼のせいでどんどん没落していく。つまり全てギルガメッシュが悪い。異論は知らん。

だから強いて上げるなら、っていう前置きありきで衛宮家が一番いいだろう。ただ、終わったとき、切嗣の精神状況がどうなっているかにもよるな。やれやれ、考えることが多いと面倒臭いなあ——

「——マスター」

「おう、わあつてる。流石は“征服王”、堂々と来やがった」

チャイムが鳴るけど、出るかどうか迷——う暇なんてないのでさっさと出る。アインツベルン城ならまだしも、流石に街中だからな。突撃されようもんならたちまち噂になるわ。

書齋からスタコラサツサと、玄関まで小走りで向かう。へいへい、そんな連打しなくてもちやんと聴こえてますよーだ。だからやめれっ、壊れるだろオ!?

「うっさいわ!?!壊れるだろ!?!」

「おお、出よつたぞ小僧。ハハハハ!」

「出よつたぞ、じゃないだろバカア!?!なんでわざわざキヤスターのところに殴り込みに行くんだよ!!」

ああ、苦勞してるねウェイバー君……頑張つて手綱握つてもらて、どうぞ。

その間にオベロンにぱっぱと念話を放つて、書齋の中の資料全てを格納してもらおう。

あんなもんバレたらこの征服王、何を言うかわかったもんじやない。絶対口滑つてオレ達が大変なことになる。

仕方ないから応接間に通して——征服王クツソガタイいなやつぱり。ちよつと頑丈めな椅子に座ってもらつて要件聞いてさつさと帰ってもらおう。

はあ……もうやだ寝てしまいたい……。



# お願い、帰って？

征服王と名高き英雄——イスカンドルを応接間に通した。まあそこまではいい。市販だけど、ちよつと気分転換に飲むつもりだったそこそこいいお茶を“粗茶だ”って出したのはいいい。いや、というか少しは疑えよ、ウェイバー君見習えよ。

とか言いつつそこまではいいんだよ。問題は、さ——

「ほほう、陰険なやつが多いキャスターの工房にしては、中々小洒落た家屋ではないか。確か、この国由来の建築なのだろう？ こういうのも悪くないものだな」

「そんな暢気なこと言ってる場合かよ!? 見ろよ! キャスターのマスター滅茶苦茶頭抱えてるじゃんバカ!!」

「……………、……………」

帰ってほしい、切実に……。割と小一時間ほどずつとこうして居座ってるんだよ、この人。いやさあ、こつちも割と暇じゃなくてだね、やらにやらなん仕掛けがまだまだあるわけよ。

あー、こうしていると本当に、前世があつたーとか、未来を知ってるーとか、めつちやどうでもよくなるなあ…。言うてそもそも、前世の記憶とかクソ臍気だし。そもそも

ゲームやってたレベルでしか覚えてねえし。前世ってなんだったんだ……今が楽しいからいつか（現実逃避）。

「おいライダー！もうキャスターのマスターの目が死んでるから！イイカゲン何しに来たのかぐらい言えよバカ！」

「おおすまんすまん、すっかり忘れておったわ。——はて？何をしに来たのであつたか？」

「すっかりしてくれ……頼むから……」

キレっちまったよ、久々になあ……。ふう、落ち着け。イスカンドルは一見いい加減な脳筋に見えて、割かし知略にも長けている。下手をすると呑まれかねない。

「お主、先の戦いを見ておったであろう？何故現れなんだ？お主のサーヴァントに誇りはないのか？」

「直接聞いてくるつてところは流石だね、いやホント。」

—— 一つ目、確かに見ていた。戦力を分析するには実地観察が一番だからな。

二つ目、あそこで出てくるのはよつほどのバカか、よつほどの実力者かだ。どつちでもないこつちからしたらどうだっていい。むしろ、キャスターで表に出る阿呆は居らんだろうに。

三つ目——は、本人から聞け。——キャスター」

オレは「キャスター」を呼ぶ。すると、輝かしい粒子が形を為していく——ように見せかけた、要はただのエフェクトである。

実際は、コソコソと部屋に入り、タイミミングを見て虚映の隠蔽術式を解き、エフェクト付きで現れたという、なんとも遠回りな背景だった。

「呼んだかい？ マスター」

「ほう！ 其奴がお主のサーヴァントか！ 見るからに相当名のあるサーヴァントと見受けるが、どうだ？」

一臨の姿で『オベロン』という役にはまり、演じている。知ってる側から見たらほんとはよくやれるもんだと思うわ。

それに対し嬉々とするイスカンドル。この見た目のオベロンに何を期待しているんだが……（笑）。

——ん、開帳許可？ 構わん、やれ。『オベロン』が真名の時なら別に知られたところでどうともならんしな。本当の特性がわかるわけでもあるまいし、ね？

「うーん、期待しているところ悪いけど、僕はそれほどのものでもないさ。とは言え、マスターからも許可が出たし、名乗らせてもらおうか。」

——僕は『オベロン』。妖精王『オベロン』さ。王、とは言ってもこの通り、お飾りの王様だけどね」

「お、おオベロンだつて!?!」

お? ウエイバー君がびつくりしちゃったぞ。オベロンってそんなに有名だったっけ? つて思ってたけど、そりや魔術世界じゃ有名か。

んー、でもそうだとはいえ、オベロンの名前が初めて世に回ったのはシェイクスピアの『真夏の夜の夢』が初出だったはず。うーん、やっぱ不思議だね。

「なんだ坊主、知っておるのか」

「そりやあまあ……オベロンってのは伝承科とかで噂されてる、幻想種『妖精』の王様としてされてる存在なんだよ、でも、実存が不明とされてて、長らく与太話みたいな扱いだったんだけど……」

はっはっは、まあ妖精やら幻獣やら闊歩してる世界の出ですし、おすし。そう思うと、オレよくオベロン喚べたなあ……トリガー何だったの? というかどこで縁繋いだ?

考えてもわかんねえ……あー、わかんないこと多過ぎて嫌になつてくるぜ。うーん、本当はさつさと本当の姿で盤上メチャクチャにしたいんだが……それだどつまらんしなあ。はあ、どこでもしがらみが多いとだるくなるもんだなあ。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。まあでも、僕はそんな大したものじゃないさ」

「ふうむ、王というのなら、お主らと呼ぶのも一興か……。なあ、お主にちと提案があるのだがな?」

—— あー、アレか、聖杯問答か。うーん、ぶっちゃけ言うと、オレもオベロンも、王とさてのうんたらかんたらとか、民とは人とは何とかとか、そういうのどうでもいって質タチだからなあ。

「一応聞くが、他に誰を呼ぶ?」

「うむ、あの黄金のは必ずとして、騎士王も呼ばねばなるまいてよ。それで、どうだ?」  
「どうだ?」とか言つて、ほんとはイエスと答えない限りずっと聞いてくるくせに。メンツも案の定だし、どうするかなあ……

「(マスター、これは乗ってもいいと思うよ)」

「(ん、リョーカイ)」

「解つたよ、やる時には—— あー、ちよつと待つてろ」

さてさて、アレはどこへやったか……。地下倉庫に行つてー、ゴソゴソ探してー、えーんーとー……。お、あつたあつた。

「そら、それ使つたらわかるから、やる時にはそれに魔力込めな」

「うわつと—— なんだよ、コレ」

ウェイバー君に投げ渡したのは、一枚の札。ただまあ、勿論なんの変哲もないつてい

うわけじゃなくて、うちの家系術式である『共鳴』。これを応用した、いわゆる信号式告知装置的なやつだな。

うーん、うちの魔術系統の価値ってあんまりよくわかってなかったけど、系統説明した瞬間ウェイバー君がびっくりしてるし、こりや相当だったかな？

……あのさあ、後からチートのわかるってどうなん？それ……。言うて汎用性ないしなあ……。あーもーわからん！やめた！これ以上はなりゆきに任せろじゃい！

「ではーまた会おうぞ、妖精王とそのマスターよー！」

「バカー！もう少し静かにしろ！近所迷惑だろー！」

おう帰れ帰れ。もう日の出迎えててこちらら眠いんだよ。ヒラヒラを手を降って帰して布団へGO。はあ……。やつぱFate世界ってよくわかんねえぜな……

「きやすたあ……。指示はあ、紙にい、かいてあるからあ、よろしくう——ZZZ……」

「ええ……。全く、人使いならぬ妖精使いの荒いマスターだよ、ほんと——」

〈爆睡中〉

おはよう諸君。夕方だがね!!

さてさて？仕込みの方はどうなっておりんじよ。

「おはようマスター。人には働かせといて自分はグツスリかい？いいご身分だよねえ、ほんと」

「すまんて……こちとら人間だから、睡眠取らんといかんのじやて……」

めっちゃ拗ねとる……。いや、ほんとすまんて……。

平謝りしつつ仕込みの方を確認する。今晚は確か、ジルがセイバー陣営に襲撃かけて、『おお、聖処女よ!』とかいう熱烈な愛の告白する場面だったな。

ぶっちゃけ改めて自分の境遇振り返ってみると、お前ほんとに転生者か？つてレベルでこの世界に浸透してたな。実際、Zeroやstay night、Grand orderの知識・記憶はあれど、それを実際にフルに使うのは今回が初なんだよな。

オベロンの時は、確かに前世の知識イエーってなったけど、正直前世の知識あつても適切な対応できんと生き延びれねえわこれ。だから知識には頼らん、あくまで自分で視たものしか信じない。そのスタンスで行こう。

「おー、いいじゃないいいじゃない。この数ならセイバーやランサー相手にも引けはとらんやろ。あとは——こうで——ここで——ここで——こうしたら——うん、よし」

「作戦は決まったのかい？」

「疲れたような顔をするオベロン。ごめん、今度メロン買ったわ、マジで。このままだと、オベロンにおんぶにだっこ状態だなあ……」

「やれやれ、今日一日でだいぶ腑抜けちまったわ。はあまったく——このツケは高くつくぞ、サーヴァント共。」

「さあ、ここからだ。一気に仕掛けていこう。楽しい楽しいパーティーをはじめたために、下らない理想主義者共の目を覚まさせに——いや、永遠に覚めない夢を見せたいこうか。」

「ま、夢は夢でも悪夢なんだけどもねっと。」

「術式発動。模倣：妖精厄災『獣』、第一段階起動。完全起動まで残り四日」

「——では始めよう。ここから本番だということを、その身に思い知るがいい。我々は、”勝たない”のだから。」



さて、じゃあ遊ぼっか

!!

。

、。

んおっと、これはあれか、切嗣とアイリさんとセイバーのケンカのシーンか。んー、  
やつぱ虫越しだから言語が捉えられてねえな。仕方ないけどさ。

んで？切さん屋上あがって？アイリさんに弱音を吐いてらっしやる。——いい  
よねえ、好きな人いるとさあ。そうやってイチャイチャできるんだもんねえ？

「……チツ。オベロン、やれ」

「それ、醜い嫉妬っていうんだよ？ま、もうやったけどさ」

セイバーが一人きりになっていた部屋。そこを監視していた虫の視界が歪み始める。そして、セイバーの驚く顔を最後に、接続が切れる。

これでまず一手目——よし、次。別の虫の視界に切り替える。そこには、胸を押さえて苦しそうに喘ぐ、間桐雁夜の姿。さて、こちらはオレ自ら交渉に出向かないとマジイ、か。

「そっちは任せた」

「はいはい、いつてらっしやい」

といえわけで桜ちゃん連れてレッツツラゴー。とかなんかしつつオベロンの方を確認する。どうやら丁度森に放った”間桐製”魔力虫共をオベロンがモース化させる。

うひゃー流石オベロン、慈悲がないねえ。と言つても、もう魔力抜かれきつてたから半ば死骸みたいなものだし、最後に一花咲かせましょうということ。

「——やあ、始めまして。間桐雁夜殿？」

「だ、誰だっ——ゴホツゴホツ」

ふうむ、無理をして刻印虫を埋め込んで、さらにソイツが余計に魔力食ったことによ

る魔力欠乏症、と。それだけ無理しておきながら、本筋じゃあ桜ちゃんも救えずに御陀仏しちやうのか。カワイソラス。

ま、こちらは救いの手を差し伸べさせてもらいましようかね。打算ありきではあるけども。

「私の名は『アルレッキーン』。今宵は一つ貴方に商談を、と」

「な、なんだと……?」

ここからは答えはミスれない。気張れよオレ。

オベロンは向こうで行動しなきゃならん。臓硯の“目”はそう長いこと誤魔化せない。長時間やり続けると、オレの魔術回路がぶつ壊れる。

——”賭ける”は命、チャンスはこの一回だけ。さあさ、”勝負”<sup>ゲーム</sup>といこうじゃないの。

「貴方のお探しの『間桐 —— いやさ失礼。『遠坂 桜』さんはこちらで保護させて貰っていますよ、ええ」

「なっ、ほ、本当なのか!?!」

よし食いついた。第一段階——『交渉への意欲を湧かせる』はクリア。

次の手札だ。さて、どれがいい……? 考えろ、考えろ、考えろ——”賭ける”<sup>レイズ</sup>。

「すぐにも貴方に会わせたいのですが……こちらにも、退つ引きならない事情がある

のです。わかりますね？」

「つ……俺に、どうしろと」

次、”賭<sup>レイズ</sup>ける”。

「貴方には秘密裏にこちら——へキャスター陣営と繋がって頂きたいのです。勿論、タダでは申しません。貴方の『魔力欠乏症の緩和と効率化』、『桜さんとの面会』、そして

——『間桐臓硯の始末』。これらを報酬と致します」

「で、できるのか!?——いや、やる、やってやるさ」

「ただ、気を緩めるな。これは一種の”契約”。だからこそ、慎重に、かつ相手に疑う隙を与えるな。」

「良いお返事、嬉しく思います。つきましてはこちら——『<sup>セルフギアス・スクロール</sup>自己強制証明』にて詳細の確認、そして署名を。その後、桜さんと面会させましょう」

「わ、わかった——これで、いいのか」

確認する。

——一つ、『間桐 雁夜』（以下：申）は、『<sup>朝露</sup>アルレッキーノ<sup>虚映</sup>』（以下：之）に対し、半永続的な協力関係を築く。

—— 一つ、甲は乙に対し、詐欺行為、反逆行為などといった敵対行動、ないしは乙への殺傷行為を禁ず。

—— 一つ、上記の代わり、乙は甲に対し、『魔力欠乏症の解決』、『魔力等戦力のバツクアップ』、『遠坂 桜との面会』、『間桐 臓硯の始末』を報酬とす。

—— 一つ、上記に違反する行為が行われた場合、各々のサーヴァントは自害、マスターは令呪を明け渡し、自害するものとす。

—— 一つ、これは、当聖杯戦争の期間内において、決して破られることなく存在するものとす。

よし。まあ、見る人からみればこちらにとつて益もなく、非常に不利に見えるかもな。確かにそうだろう。だが、これでいい。一見穴だらけに見えるソレは、確かに穴もあれば不備もある。と言つても、こちらにとつて必要な不備だがね。

「——確かに、契約は成りました」

「は、早く桜ちゃんに会わせてくれっ」

「そう、慌てなさるな。——もういいよ、おいで」

そう言つてオレは桜ちゃんを呼ぶ。おやまあ、雁夜おじさんったら泣いちゃつてまあ。うんうん、感動の再会つていいよねえ。

さて、奴さんとは——お、やってらっしゃるやってらっしゃる。結果は上々。あちらの攪乱は成功。これで“アレ”の放つ気配にはもう気付かなくなるだろう。起動したての今夜が山だったからな。

更にこちらは『狂化した湖の騎士』という新たな手札を手にいれた。対セイバー、対アーチャー用の手札としては万々歳の結果だ。

さて、臓硯の”目”の誤魔化しが効かなくなるギリギリまで残り十分程度。それまでは、彼らの好きにさせていきましょうかね——。

——アルトリアは、驚く他なかった。急に自身を見つめる視線を感じて振り返ると、そこには一匹の、なんの変哲もない”虫”がいた。ただそれだけのことだった。

だが、その虫が急激に膨れ上がり、かと思えば毒々しく、禍々しい色合いのタール状の液体に包まれ、いつぞやの”影”へと変貌する。

「なっ——くっ、同じ手は食わん！」

即座に聖剣を喚び、一刀の元に切り伏せる。昨晚出会ったものと同じく、ソレは塵と成って消え失せる。

冷や汗が流れるアルトリア。だが、すぐさま我に帰り、己がマスターである切嗣とアイリスフィールを探しに行く。だが、館内には既にいくつもの”影”が蠢いており、アルトリアは焦りつつも的確にソレを倒していった。

同時刻、それぞれもまた、それぞれの動きをしていた。

衛宮切嗣とアイリスフィールは、次々と溢れ出てくる異形を滅ぼしながら、セイバーとの合流を目指していく。その中で久宇舞弥と合流し、令呪の魔力を辿っていく。

言峰綺礼は、己が垣間見た『衛宮切嗣』という存在を知るために、ヘランサー陣営は、己の魔術工房を破壊するという、闇討ちへの怒りにて、魔境の森へと歩みを進める。

だが、彼らは未だ知り得なかった。今やその森は本物の『魔境の森』と化しており、そこかしこに異形の影たちがひしめきあっている、などと。

そんな最中、アルトリアはどんどんと外へと誘き出されていく。影達を追い追われ、迫り迫られ、一進一退を繰り返しながら。

そうしてアルトリアは、森の少し拓けた場所へと出る。先程まで目の前に立ちはだかっていた影達は、何時の間にかやたら円形に広場を取り囲む。

すると、ふと、蝶が一匹ひらひらと飛んでいく。夜の闇のように、なにもない暗闇のように、真つ黒な蝶が飛んでいく。

飛んでいく先には——数多の虫が集まり、形を成してきていた。曰く形容しがた、人型をとろうとしているのであろうソレに、アルトリアは不思議な感覚を覚えた。

その気配は遠い昔、ブリテンの島で出会った始まりの仇敵。己は『民』を想い、彼は『島』を想った。だからこそぶつかり合った。それこそ、彼一人によって、多大な犠牲がもたらされるほどに。



アルトリアは思い出す。かつて、『島』を想い、『民』を嗤ったその男を。"赤き竜"は思い出す。かつて戦った"白き竜"の内に眠っていた、"魔の存在"を。

「あ、ああ——き、さまは、貴様はッ!!」

「やあ、底抜けにお人好しな騎士王さま。久しぶり、元気してた? 誰も幸せになんてなれないのに、よくもまあそこまで頑張るねえ。——でも、その夢はここで終わり。君には、負けてもらおうよ」

——それは、まだ神秘に溢れていた時代、その最後の代にてブリテン島が願った『自滅願望』にして、ブリテン島が生み出してしまった『終末機構』。数多の夢を嗤い、果てのない"終わり"<sup>悪夢</sup>を見せ続けるもの。

『妖精王オベロン』など、仮初のもの。それなるは『奈落の虫』。かつてブリテン島そのものが願った『終わりの使者』。それこそが彼、それこそがそこに立つ"魔竜"。

「なぜ、なぜ貴様がここに——」

『卑王ヴオーテイガン』!!  
』

# いいね、最高だ

はあ、やれやれ。ほんと、疲れるよね。マスターはぐっすりした後には交渉に向かつて、僕はあれこれと仕掛けまくって挙げ句に戦闘だよ。まったく、人使いが荒いと思わないかい？

さてと、それじゃあ皆、よろしくね。と言つても、もう物言わぬ屍なんだけども。

うーん、騒がしくなってきたね。じゃ、そろそろマスターから貰ったこの術式を使うとしますか。うんうん、どうやら順調に発動したみたいだね。

今発動したのは、いわゆる『誤認隠蔽』の魔術。元々は相手によつて見える姿が変わるらしいけど、今はわざわざ手間をかけて設定させてもらったよ——”汎人類史の『白き魔竜』”にね。

それなら多少本気を出してもいいだろう、つと。魔力を集めて、身体霊基を再構築する。魔力量は——うん、多少荒っぽくなつても問題なさそうだ。

「にしてもまあ、ここまでお膳立てされるとね……………。くく——くつはははは！いいね、最高だ」

いいね、あのマスター。最高にイカれてる。確かに、虫達からの監視でも見ていたけ

れど、このままだとあの騎士王は、アサシンのマスターと、更にはランサーの陣営ともぶつかる。まさに挟み撃ちだ。

けど、こちらのマスターは、その騎士王よりも更にバカだ。もちろん誉めてるよ？ だって、こんな三つ巴の中心に立つだけじゃなくて、全員に攻め込むとか、本当にイカれてるとしか言い様がないね。

——触れれば移るモース毒。それは本来、妖精にしか効かないはずだった。それを、僕——いや、オレが『モースの王』だったからと言って、人間にも呪詛が移るようになってしまった。

「さーて、オレのマスターはこの駒達をどう動かすのかな？」

オベロンは、数多の虫を引き連れて目的地へ向かう。それらは次第に形が崩れていき、呪詛の塊——”モース”となつて森中に展開していく。

ソレらの呪詛の根底にあるのは、『間桐臓硯に、実験体として使われたことへの怨み』もあるだろう。だが、ソレらのほぼ総てがねじ曲げられ、聖杯戦争への——ひいて

は『聖杯』という願望器の存在への怨みとなっている。

もはやこの森はただの森に非ず。聖杯を求める者達を怨み食らい、そして呪う者達の巢窟。触ればたちまち、彼らの仲間入りを果たすことだろう——。

——止まれ。

言峰綺礼は、その直感的な啓示に従って、森の入り口手前で立ち止まる。

何かがおかしい。見た目は普通の森だ。魔境の森などと言われているが、所詮ただの森。——つい最近までは。

どうしてか、今の『森』からは、安易に近寄れば“死”よりも筆舌に尽くし難い“終り”が訪れる。そんな予感がした。

「……………？」

ふと、森の中から何かが出てくる。いや、正確には這い出てくる。何か、液体のようなものが這いずるような、曰く形容し難い音。

月明かりに照らされて、言峰はその正体を見る。

「……………ふむ」

ソレの正体を、言峰は一目見ただけで悟った。これは呪詛の塊。触れば即死、ないしはこれらに従属するものになりさがると。

だからこそ、言峰は洗礼の施された黒鍵を取り出し——容赦なく投げける。憶測では、これによって有効打となりうる、はずだった。

果たして、確かに洗礼を受けた黒鍵なれば、呪詛は苦悶の声を上げて呻く。しかし、すぐさま何事もなかったように修復し、触手を放つて襲いかかる。

さらに追い討ちが如く、幾重にも呪いを固めた、砲弾並みの大きさの玉を射ち放つてくる。このままでは、目的を達成する前に己が力尽きる——そう思い、言峰はやむなく撤退する。

それを見届けた呪詛達は追うこともせず、ただ静かに佇み、そして、何事もなかったかのように森の中へと消えていった——

「——これは…ッ」

デイルムツドは、背筋が悪寒で震える錯覚に陥る。目の前にこれでもかかと湧いて出てくる異形の存在。それらの気配は、デイルムツドもよく知るものであった。

「妖精……なのか……？ いや、しかしこれは…」

『ランサー！ その化け物共の相手はいい、セイバーの拠点まで道を開くのだ！』

デイルムツドのマスター——ケイネスからそう指示が飛ばされる。彼もそうしたいところではあったが、そういうわけにもいかなかった。

なぜなら、彼の目前には、その異形達が壁になるかのように押し寄せていたからである。セイバーの元へ行くにしろ、そのマスターが居る拠点までの道を切り開くにしろ、その異形達を倒さねばどうにもならない。

「すまない、名も知らぬ成り果ての妖精達よ。その怨み——悪いが、切り開かせてもらおう!!」



「なぜ貴様がここにいる!! 『卑王ヴォーティガン』!!」

「さあ?なぜだろうね。自分で考えてみれば?」

なぜだ!?なぜ奴がこの聖杯戦争に参加している。しかも、あの時の姿のまま。

——不味い——ヴォーティガンの強さは生前からよく知っている。我がキャメロットの精鋭たる騎士達を、兎戯が如く消し飛ばすのみならず、円卓随一頑強なガウエイン卿を、あろうことか日中で昏倒させた。

あの時は復活したガウエイン卿と共に、その両腕を二つの聖剣で固定し、心臓を聖槍で貫くことでようやく倒せたのだ。

だが、今ここにはそのガウエイン卿も、ましてや『聖槍』さえ持ち合わせていない。マスター——切嗣のサポートは恐らく絶望的。最も、サポートできるとしてもこちらはそれを受け取りたくはないが。

「そおら、逃げるだけかい?」

「くっ——おのれっ!」

奴は聖剣の間合いを知っている。だからこそ、『風王結界』で隠す必要などない。しかし、『風王結界』の解除をしようにも、マスターの許可がなくてはそれもできない。

両断するように振り下ろした剣を、奴は嘲笑うように避けていく。初戦にて、デイルムツド・オディナと戦ったときから、己の動き一つ一つに何とも言えない違和感を覚え

ている。

「おいおい、いつまで”ソレ”隠してるつもりなのさ。もしかして死にたいのかい？」

「貴様、なぜここに現れた！——まさか」

私がそこまで思い至った瞬間、奴は口元を裂けるように吊り上げて——ワラう。

「ははっ、なんでわかるかなあ。まあ、君には分かるようにしているから当たり前だろうけどさ。」

——とは言え、オレが”どちら”かだなんて言うわけないんだけど、さー！

「ぐうっ!？」

一瞬で間合いを詰められた、だど!?!間違いない——生前より遥かに強くなっている。とつさに聖剣で守ったが、衝撃が腕から身体へと伝っていく。

一瞬だけ見えたのは、恐らく短槍ほどあるトゲ、いやツノか? いまいち判断がつかないが、槍のようなものであったのはわかった。恐らくはあれが今の奴の得物なのだろう。

「あれ? 今完璧に貫いたと思っただけだ。……まあいいや、オレはそろそろ退かせてもらおうよ。邪魔者も来たことだしね」

待て、と言おうとしたが声が出なかった。よくよく見れば、先の一撃で膝が笑って

たのだ。そのせいで身体に力が入らず、膝を地に着かせてしまう。

——バカな、そう言いたくなる。だがそれと同じく、案の定か、とも言える。何しろ相手は『卑王ヴォーティガン』。彼のガウエイン卿を日中で、それも一撃で昏倒させた男。

そんな風に私が思考を巡らせていると、背後より異形達を突き抜けてサーヴァントが一人、私の前に立つ。

「そこまでだ。何者かは知らないが、これ以上の暴挙、このデイルムツド・オディナが見過ごさないと知れ」

「はいはい、言われなくても去りますよ——オレはね」

奴が指を鳴らす。その瞬間、周囲で沈黙を保っていた異形達が一斉に襲いかかってきた。それに対しデイルムツドは、その双槍を風呂敷わせることによつて一掃する。

だが、その間に奴はいなくなってしまった。私も、なんとか衝撃から回復し、デイルムツドと共に異形達を屠っていく。

『ああそうそう、帰る前に教えてあげるよ。君達が相手してる“ソレ”は“モース”っていう、いわゆる墮ちた妖精さ。触ったり触られたりしたらお仲間になるから、せいぜい頑張って生き残ってね、騎士王サマ』

舐め腐った態度を、と声高々に叫んでやりたかったが、間髪なく異形——モース達が

襲いかかってくる。幸い、この『聖剣』だと一撃で屠ることができるようだ。

しばらくして、ようやく余裕が出てきたがためにデイルムツドの方を流し見ると、デイルムツドの方も、その槍の力によって難なく倒れているらしい。

そうして夜が明ける前に、どうにか現れていた全てのモースを倒しきることができた。私もデイルムツドも、双方共に息が上がってしまったている。ふと、デイルムツドが焦ったような表情になる。

「すまない、セイバー。勝負をつけたいのは山々なのだが……マスターが」

「構わない、デイルムツド・オデイナ。貴殿とは必ず、再び相見えると誓おう。勝負はその時に」

——忝ない——そう言つてデイルムツドは去っていく。私も剣を降ろして警戒を解く。その後、マスターから召集がかかり、私は集合場所へと向かう。

それにしても——なぜ、あの卑王が聖杯戦争に参加しているというのか。現状ではランサー、ライダー、アーチャー、アサシンが判明している。最も、アサシンが既に敗退した、というのも怪しいのだとか。

残るはバーサーカーとキャスター。だが、バーサーカーは既に目の前で相対している。消去法で考えればキャスタークラスだが、あの強さはキャスタークラスのものとは思えなかった。

ならば——もしや奴は、マスターとして参加しているのか？そんな私の思案は、昇る朝日に照らされたことで中断される。

とにかく、今は奴の危険性を、どうにか”マスター”にも知ってもらわねばならない。その為にも、なんとか耳を傾けてもらえる程度には……いや、必ず耳を傾けてもらう。そう思いながら、私はその場を後にした。

## 退場の時だよ、ご老人

——ふう、疲れた。あーあ、全くもって吐き気がしそう。それでもって、お腹抱えて笑い転がりたいぐらいだ。

見たかい？彼女のあの間抜けな顔。挙げ句の果てには『なぜ』だつてさ。いやいや、なぜも何も、聖杯戦争に参加しているからこそソコにいるだろう？つていう話なんだよねえ。

「あ、おかえりなさい、オベロンさん」

「ただいま、桜ちゃん。ところで、マスターはどこかな？」

「カリヤおじさんといっしょ。居間にいるよ」

どうやらマスターは居間にてカリヤとかいう、これまた騎士王サマとは別ベクトルのお間抜けと一緒にいる。ま、僕からしたらあんな蒙昧な善人の塊より、ただ一つに對し愚直に進む奴の方が愛せるけどねー。

昨夕に燻っていた僕の怒りも、騎士王サマを弄んでやったことでだいぶ発散された。不完全燃焼ではあるけど、割と上機嫌な方ではあると自負するとも。

「やあマスター、今戻った——つて、ナニソレ」

「離せ！離さぬか！ええい、一体儂に何をしたのだ!!」

もごもごと、みつともなく足掻く。轟。人の形をしてるからなのか、マスターの拘束術式で縛られている。

「おうキヤスター、お疲れさん。お疲れついでなんだが、コイツもやっちゃって」

「ええ……流石の僕でもこんなの従えたくないよ」

いやいやドン引きするって。なんでこんな気色悪いの従えないといけないわけ？流石に萎える——と、普段なら言うところだけど、今回はちよつと話を聞いてみようか。

「んで？こんなの捕まえたってことは、何か理由でもあるんだろ？」

「ご明察。端的に言うとお、バーサーカーのマスターと協力関係を築くために、目の前でソイツを殺さなきゃならんのだよ」

ふむ、まあ理由としてはわかるけど、なんでまたバーサーカー？バーサーカーって確かランスロットだよ。僕らからしたら天敵じゃない？

—と、思っていたのが知られたのか、マスターから詳しい説明がされた。それによると—

——まずその一、バーサーカーの真名『ランスロット』は、今の姿で騎士王サマのと

こに向かわせれば、間違いなく精神的に追い詰められる。

その二、ランスロットの持つ宝具、『無<sup>ア</sup>羅<sup>ン</sup>無<sup>ダ</sup>湖<sup>イ</sup>光』を参考に新しい武装礼装を製造、それを僕の戦力補強に使う。

その三、ランスロットの存在はセイバー以上に厄介な対アーチャー対策として最上位に位置しており、敵として倒すより味方に引き入れる方がメリットが大きい。

——ふむ、確かに。強いてあげるデメリットが僕の”真名”がバレないようにすることと、バーサーカーとしての消費魔力の高さぐらい。それと比べれば旨味はかなりいい。マスターもなかなかいい駒を手に入れたじゃないか。

「で、協力度制のための契約に、コレを殺すことが含まれている、と」  
「そういうこと。ま、”本体”はとつくのとうにこっちの手中だし、どうとでもできるわな」

うーん……”魂”がゴミ捨て場みたく汚いけど、それを抜きにみれば、『僕』が『俺』として活動する分には、補充される魔力や戦力としては充分すぎるほど、か。さらには”駒”として使うこともできるわけね。

流石は僕のマスターといったところか。ここまで盛大に動けるとはね。



——間桐家という三大勢力の一角を落とす、更には契約で傀儡化。加えて、騎士王サマ達を”俺”がモースで陽動し、マスターは間桐家を陥落、計画の進行を円滑に、と。これだけ聞くと末恐ろしいね。一応間桐家については、聖杯からの知識としては知っているさ。長生きしては魂も腐って醜くなった愚か者——それが僕の評価だった。けれど、その老獪でもある相手を、このたった一晩で陥落させた。

「マスターは”勝ちたい”のかい？」

「勝たない」 つつつてんだろ。まあ、”負ける” つもりもないがな」

いやいや、これもうマスターが勝ちやうんじゃないの？ だつてここまでやつて、更には”アレ”も残つてる。事実上アレに勝てるのは、あの騎士王サマぐらいだけど、当の騎士王サマは拠り所のない弱った蝶のようだし。

「油断すんなよ？ ここからは上手いこと勝ちつつ、上手いこと負けなきゃならん」

「勿論だとも。いやあ、マスターが恐ろし過ぎて、僕はどうにかなつてしまふそだよ」  
——猿芝居しやがって。そんなマスターのぼやきが聴こえたような気がしたけど、気のせい気のせい。こんなに計画がうまくいくのはブリテン以来だなあ。

あーあ、ブリテンの時にマスターが居てくれれば、俺の計画も上手くいったのかもなあ……ま、ないだろうけどさ。

——信じられなかった。何がと言われると、目の前で行われていることが、だ。

『間桐臓硯』という存在は、この500年近く、この世界に生き続ける真正正銘の化け物だ——いや、だった。

それがどうしたことか、今の今まで名前も知らなかったような相手にいい様に転がされて、しかも桜ちゃんに埋め込まれていたはずの延命用の蟲は、彼の持つビンの中で弄ばれていた。

あの時は、まさしく電光石火だった。

——あの契約の後、あろうことか、彼はそのまま間桐の屋敷まで直行したのだ。あの時は、何の対策もしていないのか、間桐臓硯を知らないのかと思ひ、今は止めるように言っていた。けれど、彼は笑みを浮かべて諭すように言った。

『大丈夫ですよ。あの老人は、私には勝てませんので』

そして、盛大に屋敷の玄関に飛び入り、あの臓硯を屋敷中に響くほどの大声で呼んだのだ。勿論、奴は来た。訝しげにする奴を余所目に、彼は懐からあのピンを取り出した。『初めまして臓硯殿。それともゾオルケン殿、とても言いましょうか？まあ、どうでもいいですけど。——こちら、なんだと思います？』

『——き、貴様!?! どうやってソレを——!?!』

驚き固まる臓硯。それを狙っていたかのように、彼の影から何かが飛び出してくる。

『——やれ』

『ぐおおあああ!?! こ、これは——!?! 黒妖犬ブラックドッグ”じゃと!?!』

それは、真つ黒な“犬”だった。ソレらは何体もの塊となつて臓硯に牙を突き立て、食い荒らし、無残に引き裂いていく。何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も何度も——

『うーん、死なないですねえ。予想の範疇ですが』

『き、貴様は……何者なのだ……』

俺は呆然と立つことしかできなかつた。俺達が恐れた臓硯という魔物が、”アルレッキーノ道化師”と名乗った目の前の彼にずたぼろにされている。

——いや、ずたぼろなんて生易しいものじゃない。あれは、”実験体”を見る目だ。あろうことか、彼は臓硯で『実験』しているのだ。

『とりあえず縛りあげて回収しましょう、ええそうしましょう。——”ハインド纏わり付け”』

『ご、がつ——』

彼がそう唱えた途端、噛みついていた犬達が臓硯に纏わりついて拘束する。逃げることにさえできず、真つ黒な塊になってしまう。

『すみませんね、どうやら今すぐは難しいようです。一度持ち帰っても宜しいですかね？』

『あ、ああ………』

俺はもう、頷くしかなかつた。全てがあつという間で、俺が抱いていた願いも、恐怖も、何もかもが一気に崩れ落ちた思いだつた。

人智を超えた、とはまさにああいうことなのだろう。俺は彼に連れられていく間、ずっと腕の震えが止まらなかつたよ——

——お爺様が、いえ、お爺様”だった”ものがオベロンさんに運ばれて、地下へとつれていかれました。出会ったとき、そして、”アソコ”へ入れられたとき、あんなにこわかった人なのに、”お兄さん”がなんにもできなくしちやいました。

「ん？桜ちゃん、どしたの」

「あの…今日も『魔術』をおしえてくれますか…？」

「いいよう。んじやあ今日はねえ——」

お兄さんは、やさしい人です。やさしくなんてないよって言うけれど、とつてもやさしいです。オベロンさんも、ぼくはウソつきだからって言うけれど、二人とも、いつしよにいると、とつてもあつたかいです。

そこにいるだけで、お日さまにてらされているような——こういうのを、『夢見ごっこ』って言うんですよね。なんだかともつても、むねがポカポカします。

「あの、お兄さん」

「はいはいお兄さんですよ。どした？」

なんでこうして話してるだけで、むねがポカポカするでしょう。わからないことがあつたらきいてね、とお兄さんは言いました。だから、きいてみますね。

「あの、わたし、お兄さんと話していると、むねがポカポカして——お兄さん!」

「シロウ、ゴメン……いや、ほんまに……」

と、とつぜんあたまを机にぶつけちゃいました。いたそうです、だいじょうぶかな……。だれかにあやまつてるみたいだけど、だれなんだろう。

「うーんとね? 桜ちゃん、それは『安心』っていうんだよ」

「『安心』……?」

安心……そっか、わたし、お兄さんたちに『安心』してたんだ。

お兄さんにあたまをなでられる。むねのポカポカがもつとあたたかくなる。ああ、お兄さんといっしょなら、安心するなあ……。

「——それは、本当のことなのかね」

「はい。どうやら昨晚のことらしく」

——バーサーカーのマスター、間桐雁夜の姿が見えなくなつた。彼のサーヴァント、アサシンからの報告らしい。そこは大した問題ではない。雁夜は……敵に回つた時から既に道は違えている。

だが、それよりも問題なのが、『間桐臓硯の行方不明』だ。我ら御三家の中でも、50年程は生き続ける老獪が、この聖杯戦争の最中だというのに行方不明になつたとい

う。まず間違いなく、何か”があつたのだ。

「アサシンから、他に報告は上がっていないかね、綺礼」

「いえ、どうやらアサシンも感知できなかったようです」

サーヴァントであり、なおかつ隠密行動に長けているアサシンですら見逃すとは……。いよいよもつて何かが起こっているのだろう。

今回の聖杯戦争は何かがおかしい——そう思わずにはいられなかったが、我々は今、今回に賭けるしかないのだ。

「間桐臓硯の行方について、至急調査を進めるよう、指示を出しておきなさい」

「畏まりました」

何だ……一体なにがこの水面下で蠢いている？アーチャー——ギルガメツシユ王を喚べたことは最高級の結果に近い。だが、何か、不安が拭えない。

何か大事なことが抜け落ちているかのような、そんな言いようのない不安感にかられてしまう。

——一体、どうなっているのだ。



## 騙すのも楽じゃあない

オツス、オラ虚映！突然だけど、間桐邸に来ているお！ちな間桐邸の現状、報告！

その一！家主の臓硯が行方不明！というかワイらが持つて帰つてお人形にしちやつたんだケドモ。

その二！ご当主一家夜逃げしちやつたよ！残念だね!!残つてたらモースにしてやったのに（ゲスウ）

その三！というか、これが今回の本題——だったんだけどなあ……うん。

今晚——開戦から三日目の夜、本来ならばライダー陣営がジル元帥の工房を燃やして、凜ちゃんを勇氣を出す夜。けど、当のキャスター陣営はオレ達だし、どこぞの殺人鬼はモースにしちまつたしでだいぶ改変したわな。

でだ、それで何をしにきたのかというのだ。現在無人となった間桐邸では、オレとオベロンが呼び出した”ブラックドッグ黒妖犬”達を、蠱毒の要領で喰らい合わせて擬似的な『妖精厄災』を再現しようとしてたわけ。

それが、どうして……………

「ほほう？まさかお主らまでここに来たとは、いよいよ何かあると見たぞ」

「勘弁してくれ……」

オレとウェイバー君の声が重なる。いや多分、内包する意味は違うんだけど。マズいな、このままで中で蠱毒の儀をやっているのがバレる……さて、どうしたものか。

「はあ……まあ、確かに怪しい気配の出所だとは悟ったさ。つつても、うちのキャスターに教えられてから、だけどな」

——最近、街におかしな気配が漂い始めていた。それにはわかつてはいたが、出所がわからずどうしようもなかった。そんな中、キャスターに言われてようやく出所がわかり、こうして調査をしにきた——と、こんなシナリオでいいだろう。

今キャスターには、こつそりと中に入ってもらって、”一番優秀な生き残り”を回収しにいつてもらっている。現状から離脱でき次第、モース毒やらいろんなもん打ち込みまくって再現させなきゃならんしな。

「ふうむ、何やら他にもやることがある様子だな。であれば、早急に終わらせるとしよう——」

「——ん？おい待てライダー、お前何しようとしてんだよ」

なぜか手綱を握り直し、間桐邸の扉を真正面に構えるイスカandal。いや、待て待て待て待て。まさかそのまま突っ込むとかなないよな？いややるなよ？フリじゃないから

な？やるなよ!?

「A—rrrrrrrrrrry!!」

「何やってんだバカ——!!?」

いやほんとに何してくれちゃってんの!?

ウェイバー君はまだ不法侵入とかそういうレベルで考えてるんだろうけど、中の状態知ってるこつちからしたらたまたまもんじやないよ!?

だって今中には——

—— 蠱毒の影響で獰猛化している”黒妖犬”だらけなんだから。

「ぬう!?!これは——」

「ひっ——」

驚き固まるイスカندانルと、反対に怯えて固まるウェイバー君。

ああもうメンドクサイなあ!

”代理召喚”、『斬撃瞬蜂』!!

—— オベロンと契約を結んだことで、あくまでオベロンの”代理”として会得したこ

の『召喚術』。召喚術、と言うが、その実『虫』系か『妖精』系しか喚べないし、妖精に至っては、”黒妖犬”を始めとした一部のものか、索敵ぐらいにしか使えない弱小のやつ限定とききている。

『斬撃瞬蜂』——名前の元々の意味は”飛び回る蜂”という意味であり、英語圏では”マルハナバチ”の名前だそう。いつか昔に、どこぞで聞き覚えのある名前だったからつけてみたが、これが中々のものだった。

一匹では切り傷ぐらいしかつけられない小さなハチなんだが、こいつの強みはそこじゃない。コイツの強みは、『喚ばれた際には必ず』**群体**で現れる』という点だ。

考えても見てほしい。一匹だけではそう大した傷もつけられないような羽虫が、突如として群れを成して襲ってきたらどうなるかを。

——つまりはこうなる。

『キャウツ』——

断末魔さえ挙げる暇なく、あつという間に群れられて粉微塵にされる犬共。まさしく細切れと言つていいレベルにまで切り刻まれ、最早見る影もない。

「ふう——」

「ほお、見事なものだな」

ふん、何が見事なものかい。こちとら『手札』一枚どころか二枚も曝すハメになつち

まったよ。やれやれ、さっさと帰りたいものだわ。

現状使えるのはさっきの『斬撃瞬蜂』を始め、『黒妖犬』、そしてオベロンが使う『閃匣鎧蟲』、『絡咬百足』、『翔槍蜻蛉』ぐらいか。他にもいるが、全部あげようとするとキリがない。

とまあ、あとは出した手札でやるしかない、と。どんな“縛り”だよ、怠いなあ……やるしかないけどサ。

そうこうしているうちに、イスカンダルは犬共を蹂躪しながらどんどん奥へ進んでいく。いやまあ、ある種飢餓状態で強化と弱体が比例してるような感じだけど、普通そこまで蹂躪できるか？

「なあおい、キャスターのマスターよ」

「虚映でいいさ。それで、どうした？」

なんだよ、こちららここからどうするか思案中だったんだぞ？アンタに手札知られたリメチャクチャにされたりしたせいで、ある程度の方向性の修復があるんだよ。

——まあ予想の範疇内だけだよさあ。

「この如何にもな気配の出所は掴めんのか？」

「ん、ちよつと待ってな——キャスター」

「どうしたんだい？マスター」

探査魔術を使っている——風に見せかけてキャスターを呼ぶ。勿論、魔術は使っているよ？ただし『偽装用』の、だけどね。本当ならもう少し綿密に計画を進ませたかったが——文句は言ってられんしな。

とりあえず、オベロンから『最優秀作品』は回収したと報告を聞き、地下に強い反応があると行って奴らを地下へと向かわせる。

——出来ればここで仕留めたいが、まあ無理な話だろうな。

と、悠長に思っていた時期がありましたとき。

「なんだよ、あれ……人間、なのか……？」

「むうう、なんと面妖な……」

「——」

あ、ありのまま今起こってることを話すぜ！オレ達は屋敷の中でも、『最優秀作品』達かせめぎあっていた地下へ向かっていたんだ。そして、いざ地下に到着してみれば、中

じゃ”黒妖犬”と”モース人間”が、みっちりとわんさか湧いているんDA☆。

何を言ってるかわかんねーと思うが、オレも何言ってるかわかんねえ……。頭がおかしくなりそうとか、もうそんな次元じゃねえ。どうしてこうなった？

どうにかこうにか二人して真顔を取り繕ってはいるが、流石にこれはビビる。オベロンも、こればかりは意図するところじゃないみたいだし、ほんとどうなってんの？これ。

「——おい、虚映よ」

「なんだイスカandal——いや、解ってる。解ってるんだがこれは……」

奴らがこちらを向く。こりやあmazインネ（白目）。見たところ、憎悪やら飢餓やら、色んなもんがごちゃごちゃになってて従えようにも無理ゲーすぎる。

うおおお!! 走ってきた、走ってきた!! B級映画かよこれ!! 一心不乱に憎悪向けられながらも平然と佇む——とかできるわけねえ!!

ウェイバー君を見よう——あ、ダメだ、腰抜けてら。いいなあ、おれも座り込みたーい。どこぞの外宇宙の神話よりSAN値削られるんだが。一周回って冷静になってきたんだが。

「おおおおお!!」

隣からクソでかい声がして現実に引き戻される。イスカンダルが雄叫びあげて突撃していきやがった。正気か？

次から次へとその戦車で轢き潰していくが、あまりにもキリがない。うーむ……………仕方ない。仮にもその『真名』で活動してんだから、片鱗だけでも見せてやらんとな。

「——オベロン。宝具の開帳を許す。眠らせてやれ」

「——」、解った。さあ、暖かな夢の話をしよう」

魔力の高まりを感じたのか、イスカンダルは周りにいる奴らを吹き飛ばしながらこちらに戻ってくる。モース人間共も、それを感じ取って殺到してくる。うーん、怖い。

「童心の君、夏の夜の後、恋は触らず、懐かしむもの——

『彼方にかざす夢の囁』!!」

オベロンがその背の羽（モドキ）を大きく広げる。それと共に鱗粉が舞い、向かいくるモース人間達を包み込む。



すると—— 一人、また一人と、次々に倒れていき、ついには静けさを取り戻す。よくよく聞けば、彼らは皆、”寝息”を立てており、眠りこけているだけとわかる。

「——す、すい」

「もう彼らが起きることはない。永遠に覚めない幸せな夢の中で、彼らは眠り続けるだろう」

オベロンがそう説明する。多分ウエイバー君は、これがどれ程とんでもない”大魔術”なのか、想像もつかないだろう。

『ライ・ライム・グッドフエロー彼方にかざす夢の囁』—— 敵を眠りへと誘う、『オベロン』としての優しさに溢れた有情の宝具。相手は永遠に眠り続け、幸せな夢を見ながら二度と目を覚ますことはない。代わりに、こちらは手出しが一切できなくなるが。

「なんとまあ……だが、余が言うのもあれだが、良かったのか？宝具なぞ我らに見せて」  
「構わん。これぐらいで不利になるぐらいなら、こっちはとつくに負けてらあよ」

鼻を鳴らして返す。当たり前だ。『彼方にかざす夢の囁』は確かにオベロンの宝具だが、それと共にそうではない。真名を知らない限り、それを悟られることもないが。

—— 最も、本当の真名を知ったところで、こいつの能力が解るわけでもないがな。そうこうしている内に、眠っている奴らは次第に粒子に変わって消えていく。元が妖精やら、肉体が存在しない奴らだからな。当然と言えば当然か。

「今回の件、あとはこちらで後始末を行わせてもらおうか」

「うむ、よかろう、では、これにて一見落着きといったところだな。——おお、そうであつた。次の夜、セイバーの奴の城にて、以前言うておつた”問答”をする故、お主らも来るが良い！ではな!!」

はいはい、さつさと帰つた帰つた。これで残りは隠蔽させてもらいましょかね。実験結果の資料とかもあつたし、帰つてくれてほつとしたわい。

——明日は聖杯問答、か。さてはて、もし仮にセイバーが、オベロンの本性に気づいたなら、こちらも一切の容赦が出来なくなるね。まあ、気づいて欲しいという思いがないわけではないけどさ。

## 聖杯問答（前編）

——氣配がする。何かがちちらへ向かつてくる。アイリスフィールが言うには、罨や結界の悉くを強行突破しながら、真つ直ぐとちちらへ直進しているという。

そして、門を破壊して現れた奴は、慌ててかけつけた我々を見るなりこういい放った。「おうセイバー、出迎え（苦勞）いやはや何ともけつたいな場所に城を建てたもんな。迷いそうだったんで、ここに来るついでに木を薙ぎ倒してやっていたら、つい勢い余つて門まで壊してしまった。が、まあ許せ！」

「——」

呆れるしかなかった。そんな我々を余所に、彼の征服王——イスカンドルはどこから持ってきたのか、酒樽をかついではズイズイと城の奥まで乗り込んでくる。

何しにきた——そう問うてみれば、「聖杯を求める者同士、戦うだけでなく語り合うことも必要だろうとな」と返された。だからといってここを占拠されても困る。

そうこうしている内に、私と征服王は中庭で座り合い、中の酒を掬った柄杓を差し出してくる。

今までの人柄を見るに、この征服王は、謀略といったものをしないのだろう——そう思い、また差し出されたものを無下にするのも失礼であるからこそ、それを受け取った。彼はまた言い募る。——聖杯を求める者として、格を問わねばなるまい？——ふむ、成る程。

「それで、まずは私の格を問おうというのか、征服王」

「如何にも。どちらも王を名乗るのであれば捨て置けまい？言わばこれは聖杯戦争ならぬ聖杯問答。」

とは言え2人だけでは盛り上がり欠けるであろうから更に2人ほどに声を掛けてある。それ、我らの他にも王を名乗るのが1人。そして——

——”王”と言うのをもう一人ほど、余は知っておつてな」

胸がざわつく。まさか、”奴”ともう既に接触を？いや、この口振りや態度からはそうだとは思えない。では、誰だ？残っているとすれば「キヤスター」か「バーサーカー」だが……

「——やあ、ちよつと遅れちゃったかな？」

その声に振り向く。——バカな、ついさつきまで我々以外の気配はなかったはず！ど  
うやらそれは、アイリスフィールやライダーのマスターも同じらしく、声の方向へと顔  
を向けていた。

——いや、ライダーのマスターは見知った顔なのか、納得しているようだな？ 一体、誰  
が——

「おや、そうか。確かに、その征服王とは違って皆初めましてになるのかな。」

——僕はへオベロン。へ”妖精王”オベロンさ。オベロンでもロビン・グッドフェ  
ローでも好きに呼んでくれていいよ。ま、”王”は”王”でも、お飾りの王様だけどね」  
「妖精王………」

驚くしかなかった。我が故郷ブリテンには、確かに『妖精』という存在がいた。時に  
人を惑わし、時に人を助け、そして——時に人を食らうもの。

私のこの『聖剣』も、その妖精の内の一人である『湖の妖精』から貰ったもの。そう  
と思えばこそ、”成る程、確かにそうだ”と思わざるを得ない。

——だが、私の”直感”が違うと告げているのはなぜだ？

「ほんのちよびつとな。まあ構わん構わん。ほれ、駆けつけ一杯、どうだ？」

「これはありがたい。では一杯貰うとするよ」

征服王から柄杓を受け取り、上品にすする妖精王。王族として、確かに品のある所作だ。まさしく、王座に座るものとして鏡のような姿勢、そして動き。”王”というのは伊達ではないということか。

彼は自らを”お飾りの王”などと言っているが、そんなことはない、その所作からありありとわかる。やはり、あの好奇心旺盛な妖精達を束ねるものなだけあって、空気が違う。

「——あーあ、やっと追い付きましたよ……呼ぶなら呼ぶで送ってくれとかしてくれませんかねえ？征服王殿」

「おおっと、すっかり忘れておったわ。だがまあ、許せ。なにぶん、余も浮き足立っておったからの」

セイバーよ、此奴がその妖精王と名乗る（ヘキヤスター）のマスター、あ——「アルレッキーノです、どうぞ宜しく」——だ、そうだ」

彼は……道化師、か？奇妙な仮面をつけて、大袈裟だが、見事な礼だ。時が違えば、宮廷道化師と言われても何も疑問を抱かないな。

「……思い出した。セイバー、切嗣のお仕事の話で、彼の名前が出てたわ。」

——最近出てきた傭兵の中でも、随一のキレ者にして珍しい策士型の傭兵。奇天烈だけれど、権謀術数を極めた作戦を次々と放ってくる相手で、あの切嗣ですら相手するのを、顔をしかめてまで嫌がる存在。

——”ラフィン・サーカス 嗤う大道芸” アルレッキーン」

「おやまあ、随分と買われておりますなあ。恐縮でございますよ、”アイリスフィール・フォン・アインツベルン”殿」

成る程、傭兵か。確かに、その礼節を見れば宮廷の者かと思まごうが、にじみ出す気配はまさしく戦場を走るもののそれ。

——策略を得意とする、か。アグラヴェイン卿とは気の合いそうなものだ。あとは道化というならば、ダゴネット卿もか。最も、卿らと彼とでは恐らく方向性が違うだろうが。

「戯れはそこまでにしておけ——雑種」

そこまで考えていると、黄金の光がそこに溢れる。それを思わず私は顔をしかめてしまふ。

まさか、奴まで来ようとはな

---

どうも皆さん、虚映です。早速ですが出来れば助けて下さい。なるべく、早く。

いや、うん。聖杯問答に参加するのはいいけど、いきなりイスカandalに本名いわれかけるわ、アイリスファイルからは過大評価もらうわで、ちよつと胃がキリキリしてき



ちやつたよ、ほんとに。

え、なに？オレってばそんなに傭兵界隈じゃタブーみたいな扱い受けてんの？

いやまあ、確かに”面白そうだから”って、敵の拠点の地下まで掘らせて突撃させたりとか、川塞き止めては拠点にいる敵を水責めしたあとに爆弾投げまくるとかやつたけど、そんなに？

とかなんとか思っていると、はい出てきましたギルガメツシュ。もう王様だらけだよここ。壊れるなあ（遠い目）。相も変わらず文句ぶーぶーですねえ、

うわあ、睨んでくる睨んでくる。めっちゃ睨んでくるよあの金ピカ。もうやだおうちカエリタイ……。

「そんな雑種」

「何か、ご用でしようか？」

声かけられちやつたよー、やだよー、もー、ヤメテクレメンズ……。

英雄王ギルガメツシュ——サーヴァント Fate シリーズをやってるやつならまず知らないはずがない存在。対”英雄”特攻宝具を始めとした幾千幾万もの宝具を所持し、それをもつたいないほどにぶちまけてくる、英雄版ド○えもんだ。

「貴様……いや、貴様らか。何者だ？」

「……私は、ただの道化にて」

「僕はもう自己紹介はしたよー」

すげえなオベロン。よくあの英雄王相手にそんな口たたけるなあ。アニメで見てるときは粋がれたが、流石に本人の前でんなことできねえなあ。ま、関係ないけど。

ともかく、オレは道化だと言うだけ。本名は言わないし、言うつもりもない。向こうも、オレがそれ以上なにも言わないのを悟ったのか、そのまま静かに引き下がる。

その後、イスカンドルの持つてきた酒を飲んで安酒と言いつ切る。ま、だろうな。現代の品は『大量生産・大量消費』がモットー。だからこそ、神代の頃のような唯一無二のものは作らないし作れない。

「——見るがいい、そして思い知れ。これが王の酒というものだ」

「おお、これは重畳」

ギルガメッシュの宝物庫から、神代の酒が現れる。続いて、黄金の杯が現れて各参加者に投げられる——とと、オレにもか。

「貴様にも一つくれてやる。貴様にはもつたない程だがな」

「では、有り難く」

ここであうだうだ文句をたれても、奴さんの機嫌を損ねるだけだからな。黙って受け取っておこう。

そうこうしている内に酒が注がれていく。うーむ、この香り……嗅いだことはない

が、恐らく英雄王お氣に入りの『ウルクの麦酒』ってやつだろうな。

ちびちび。あ、おいしい。

「すげえな、おい！これは人の手による醸造じゃない、神代かみよの代物じゃないのか？」

「当然であろう。酒も劍も、我が宝物庫には至高の財しか有り得ない。

——これで王としての格付けは、決まったようなものだろうか？」

「ふざけるな、アーチャー。酒蔵自慢で決まる王道など、聞いて呆れる。戯れ言は王ではなく、道化の役義だ」

「——その道化と致しましては、良き酒を生む国は豊かである、と申しましようか」

道化と言われちやあガマンができねえな。視線が一気に集まったが、気にしない気にならない。ふふふ、オナカイタイ……酔いも覚めるわ、この空気。ぐう、辛い。

ギルガメツシユに食つてかかったアルトリアがこちらをムツと睨んでくるけど、知らん知らん。うち道化じやもん。なら言えることを言うだけよ。

「フツ、そこな道化も判つておるではないか。——まあ、宴席に酒も興じ得ぬよ  
うなさもしい輩こそ、王には程遠いというものよ」

「（こらこら、そうつまらん言い分を垂れんでも良からう）」

「そうそう、宴は楽しまないとね。というわけで、僕からはそれなりの演出を開かせても

らおうかな」

オベロンが指を鳴らした。そして、辺りに森が——『妖精國ブリテン』にて、オベロンが仮初めだが領主として治めていた森。『ウェールズの森』、その再現された光景が現れる。しかも、ただの森ではなく、名もない小さな妖精達の舞う神秘に満ちた森として。

あの森って、こういう感じだったのねえ。アルトリアは見覚えがあるのかびつくりしてるし、イスカンダルは感心してるな。ギルガメツシユは——お、意外と好評そう。「おお、こりやまたすごいな。さて？場も整ったことだ、始めようではないか——」

「聖杯問答」をな

——始まるか。さてさて、どうやってかき回してやりましょうかねえ。

## 聖杯問答（中編）

「——アーチャーよ。貴様の極上の酒はまさしく至高の杯に注ぐに相応しい。が、生憎と聖杯は酒器とは違う。これは聖杯を掴む正当さを問う」聖杯問答。

——まずは貴様がどれ程の大望を聖杯に託すのか、それを聞かせてもらわねば始まらない」

馬鹿馬鹿しい、何をわかりきったことを。あのギルガメッシュが聖杯を求めると、否、聖杯を目指す理由など、たった一つしかないだろうに。

つって、現状コイツの真名が解つてるのはオレとオベロンしかないわけだが。

あー、森の夜風は涼しいナリ。あ、お酒？ありがと、じゃもうね。

「さてアーチャー。貴様は一角の王として、ここに居る我ら三人を諸共に魅せる程の大言を吐けるのか」

「仕切るな雑種。第一——」聖杯を奪い合う」という前提からして、理を外しているのだぞ」

そりやそうだ。英雄王ギルガメッシュの宝物庫——バビロンの蔵には、この世のありとあらゆる財、そして、ありとあらゆる武具の原点が仕舞われている。だつたら、わざわざそんな『願望器』を求める必要もないし、ましてやその聖杯の“原点”は『ウルクの大杯』。

ま、オレ達としては聖杯なんざいらんし、そもそもそんなもん使うこともないしな。使ったところで、いいとこオレ達の補助にしかならん。

「——お前の言葉は、あまりにも世迷い言に過ぎる。貴様のような錯乱したサーヴァントは、最早狂人のそれだ」

「いやいや……どうだかなあ。

——ふう……フッフッフ。なあんとなく、この金ピカの真名に心当たりがあるぞ? 余は」

おっと、どうやらイスカンドルの方も気付いたらしいな。ま、”征服王”より態度のでかいつて辺りで、そりや勘のいい奴は気付くだらうな。

それはさておき、こちらは話を振られない限り、静かに黙っているとしましょつか。オベロンも無言貫いてるし。見た目平然としてるけど、なんとなく苛付いてるのはわかるからなあ——令呪のパスで。

「——貴様……もしかしてケチか!」

「戯け！我の恩情に与るべきは、我の臣下と民だけだ。

——故にライダー。お前が我の元へ降るといふのなら、杯の一つや二つ、何時でも下賜してやって良い」

「まあ、それはできん相談だわな」

「あー、お酒おいちい（現実逃避）。そりやあどちらも」上に立ちたがり」なわけだからな。誰かの下につく、なんて謙虚なマネ、できるはずがない。

「結局なところ、ギルガメツシュが聖杯を求めるのは、”自分の所有物だから”という理由なわけだ。それはあの破天荒野郎ことイスカandalも納得してるな。一名不満そうだが。」

「——だがなあ、余は聖杯が欲しくて欲しくて仕方ないんだよ。で欲した以上は略奪するのが余の流儀だ。なんせこの”イスカandal”は、『征服王』であるが故に」

「是非も有るまい。お前が侵し、我が裁く。問答の余地などどこにもない」  
ふむん、これでギルガメツシュとイスカandalの王としての器は示されたな。

——片や、英雄王たるギルガメツシュは、聖杯という名の財は己のモノであるとし、それを篡奪せんとする者を裁くため、今ここに立つ。

——片や、征服王たるイスカandalは、英雄王の所有物であろうとなかろうと、己の欲する望みのままに、彼方へと届かせんと覇を唱える。

王としての“方向性”<sup>ベクトル</sup>は違えど、やっぱりこの二人は相性がいいな、主に在り方が。誰の目に問うこともなく、瞭然とし確固なる意思を持った“王”。そりやあ憧れる奴も出てくるわけだわな。ちびちび、うみやい。

「…征服王よ。お前は、聖杯の正しい所有権が他人にあると認めた上で、尚且つそれを力で奪うのか」

「……チツ」

「(おい、抑えろオベロン)」

あーもー、こういう場じゃあそんな小つちやくても聴こえるんだっつーの。まあ幸い、イスカンドルのクソデカボイスで掻き消されたけどさ。

アルトリアは相変わらず食ってかかってんなあ。どうだつていいだろ”王道”だなんて。それぞれ千差万別に在るものなんだから。その国は、その王は、その道を歩むことで栄光を手にした。その在り方さえ認めればいいものを……夢見がちな王サマはこれだから嫌だねえ。

「そうまでして、聖杯に何を求める」

「うむ……」———”受肉”、だ」

ま、イスカンドルならそれぐらいだろうな。コイツは、『自分の夢は自分で掴む』タイプだ。なら、それを”万能”に請い願うよりも、その足掛けだけ願い受けて、それを使っ



て”征服”する。そういうやつだ。

ははは、ウエイバー君もびっくりして小突かれてやんの。しかも『たかが杯』って、言うねえホント。アンタのそういうとこ、嫌いじゃないよ。

「雑種……よもやその様な些事の為に、この我に挑むのか？」

「あのなあ……いくら魔力で現界しているとは言え、所詮我らは“英雄の靈魂”<sup>サーヴァント</sup>。この世界においては奇跡に等しい、言ってみりやあ何かの冗談みたいな、希人の扱いだ」<sup>まれびと</sup>

「……………」

およ、珍しくオベロンが黙っていやがる。つつてまあ、オベロン自身が一番イスカンドルの言葉そのまんまだしなあ。

——『妖精國ブリテン』において、汎人類史の情報——シエイクスピアの『真夏の夜の夢』から創りあげられた『オベロン』という存在と、ブリテン島が孕んだ破滅願望の塊こと『ヴォーティガン』。

この二つが悪魔的にミックスして出来上がったのが、この『プリテンダー・オベロン』だ。だからこそ、まあ何かしら思うところがあるんじゃないかね。

「いつてて……あいて……お前、だから霊体化するのをあんなに嫌がつてたのか……。でも、どうしてそこまで身体に拘るんだよ」

「それこそが、征服の起点だからだ！」

——イスカンドルにとって、『征服』とはつまり、只人にとって『生きること』にとつて等しい。いや、『存在意義』それそのものだ。だからこそ、彼は奪うために戦い、そして戦うために”身体”を求めた。当然の帰結だな。

おうおう、やっぱりギルガメツシユの琴線に触れたか。愉快そうにしゃがって。そんなんだから愉悦部って言われるんやぞワレエ。

だが、イスカンドルの言い分はわかるし、その在り方も理解できる。言動には困ったものだけどなー。勝手にこちらを巻き込むのはほんとにやめてほしいでござる……。

「なあ、ところでセイバー。そういえばまだ貴様の胸の内を聞かせてもらっていないが？」

「——私は、我が故郷の救済を願う。万能の願望器を以てして、ブリテンの滅びの運命を変える！」

「……………（呆れ）」

「……………（無関心）」

「……………ツ（笑いを堪えている）」

「……………（超絶不機嫌）」

待て待て待て待て、笑うな？ 笑うなよ、オレ。ここで笑ったら全部おじやんだからな？

あーあ、バカらしい。ほんと、バカ。ここまでストレートに来られるとお腹抱えて  
 呵ケ大笑したいぐらいだわ。こんな、自室で聞いてたら大声で笑ってしまつてたな。

「なあ騎士王……もしかして余の聞き間違いかもしれないが……貴様は今、運命を変え  
 ると言つたか？それは過去の歴史を覆すということか？」

「そうだ。例え奇跡を以てしても叶わぬ願いであろうと、聖杯が真に万能であるならば  
 必ずや——」

「ええつと……セイバー。確かめておくが、その、ブリテンとかいう国が滅んだのは、貴  
 様の時代の話であろう？貴様の治世であつたのだろうか？」

あーあ、あーあ。本つ当に愚かだなあ。今さら“終わつたこと”を“無かつたこと”  
 になんて出来るわけないだろうに。第一、それができても『抑止力』<sup>アラヤ</sup>が出張ってくる。

滅びた国をやり直す——その大望はいいでしょう。だが叶えるのだけは愚かだとし  
 か言えんね。そもそも、ブリテンはもうあの時には、滅びることが決定されていたのに  
 な。

「は——は、ハツハハハハ、ハハハハハハハハ!!」

「クツフフ……ツ」

「アーチャー、何が可笑しい!」

やべつ、ギルガメッシュに釣られて笑い声が出てしまった。あー、オベロンにも睨まれ

る。幸い、他の奴らには聴こえてないみたいだし、結果オーライってことで。

「——傑作だ！セイバア、お前は極上の道化だブハハハハハハ!!」

「フフツ……これはまた、”道化”<sup>本職</sup>の立つ瀬が無い程の”道化”<sup>患者</sup>ですなあ」

「ツ……………」

ごめんねえ？ここは啜わせてもらうわあ。もう無理だコレ。あかん、ほんつとオモシロイ。オベロンにはめちやめちや呆れられてるけど、悪い、啜うわ。

王だなんだと煽てられて、それでもつて玉座に就いたはいいけど、国が滅んだからやり直したい？ゲームじゃないんだからさあ、身の程を弁えなよホントにさあ。

「——そうとも。何故訝る、何故笑う！王として身命を捧げた故国が滅んだのだ。それを悼むのがどうして可笑しい！」

「アハハハハハハ!!」

「はあ……………」

ギルガメツシユ、大爆笑。これあれじゃね？『王、腹筋大崩壊』ってやつじゃね？オベロンはやつぱり呆れてます。

やれやれ、コイツはほんと、あまりにも『王』という立場に囚われすぎてるのな。イスカンダル達の治世は暴君のソレだつて？そりやそうだ、その何が悪いつてんだ？『王』という”個人”が”個人”として生きられない国なんて、あつという間に滅ぶだろ

常識的に考えて  
J  
K。

暴君よりなお質の悪い暗君ね、全く的を射てるわ。そうそう、歴史つてのは、その時代、その時に生きた者達が魂を燃やし尽くして生きてきた証そのもの。

それを？悔いる？全くもつてクソツタレだね。そんな王なんて願ひ下げだ。ほんと、嫌になるねえ。

………なんかオベロンに似てきた？ワイ。

「——で？王たる貴様は”正しき”の奴隷か」

「それでいい。理想に殉じてこそ王だ。人は王を通して、法と秩序の在り方を知る。王が体現するものは、王と共に滅ぶような儂いものであつてはならない。より尊く、不滅なるものだ！」

「——はいはい、綺麗事の演説は結構結構。拍手喝采が欲しいのでしたら、演説台に登つて踊れば宜しいかと」

「——キャスターのマスターか。貴様、我が王道を虚仮にするか」

するもするわ、こんなゴミクズにも劣る理想論。聞いているだけで胸焼けがする。うちのサーヴァントはお酒飲んで無視決め込むらしいし、だったらこちらとしても言い募らせてもらいましようかねえ、えええええ。

「虚仮と言われましても、ねえ？だつて貴女、それじゃあ『王』は、国の飾り物、じゃあありませんか。それで『王』が務まるとでも？」

「構わない。むしろ、それこそが王たる者の本懐だ！正しき統制、正しき治世、全ての人民が待ち望むものだろう！」

「民」を侮るのもそこまでにして頂きたい！！

我々”民”は特段、『王』に其れ程の期待など抱いてなどおりませぬ。『王』に求めるは、何を以て彼は『王』たらんとするのか、その背のみを見るのです。救いだの願いだの、そんな上面の薄皮など、火吹き種の種にすら劣ります」

ここは言わせてもらおう。下らない理想で、『国民を救います』だなんて、前世でもう吐き気がするほど聞かされた。そういう奴に限つて大抵ロクでもないもんだよ。

王は王でも、コイツは所詮、”騎士の『王』”。民を統べる”群の『王』”の器じゃない。専ら、戦い護ることだけしか考えられない、愚の骨頂でしかない。

「我がサーヴァント、並びに征服王陛下に代わり、敢えて語らせて頂きます。

——”無欲な王など、飾り物にも劣る”と。最早貴女のソレは、裏でコツソリとほくそ笑む貧者に、際限なくタダ金を渡す。まさしく真実の見えぬ愚者のソレ。導くことを忘れ、ただ救うだけの王に、未来などそもそもあるはずがないでしょう？」

「——ッ。だが、王が救われねば誰が民を救うと言うのだ」

「王に救われねばならぬ民など、物乞いにさえ及ばぬ国の病床です。正義を語らねば通せぬ王道など、それは下手な道化の演芸よりもなお見るに耐えない代物です。そんな国など、滅びて当然と言えるでしょう」

なーんでオレがこんな説教かまさにやらんのだよ……。アンタ、いい大人だろうに。なんでそんな”夢”みるかねえ。気持ち悪いっただけありやしない。

「それに、どうせ貴女、民はおろか臣下でさえも、救うことばかりで、誰も導いていなかったのでしょうか？己が間違っていないとばかり信じ込んで、真実を見ようとしない。

——いい加減気付いては？貴女の抱くその想いは、ただの夢見る街娘のソレそのものなのですよ」

「私は……ただ……」

……ふん。元々この台詞はイスカンドルのものだったんだぞ？それをわざわざオレが言う羽目になって、一体どうしてくれるんだい、全く。

はあ………愉快そうにこつちを見るのはやめてくれませんかねえ英雄王さん。ほんと、こつちに興味もたれると困るんですよ、色々と。

——あーもー、はいはいセクハラセクハラ。やめてくれよこういうの、めっちゃめっちゃ

カオスじゃんこの空気が。どうしてくれんだよ。見ろよ、森の小妖精ちゃん達怖がつてるし困ってんじやん。ほら、よしよし。ごめんね？

「——で、そろそろそちらも観てないで出て来ては？ジロジロと見られては芸のタネも仕込めませんし」

おーおー、へアサシン——『百貌のハサン』の分身人格が、これでもかとわんさか出てくるねえほんと。ゴ○ブリかよ。つか、へアサシンが表に出て来てどうすんだよ、バカか？

はいはい、『斬撃瞬蜂』バンブルビー召喚つと。一応臨戦体制は整えておくけど、まあ多分出番はないだろ。だって——

「——この酒は、貴様らの血で出来ておる——余の言葉、聞き違えたとは言わせぬぞ。この酒は貴様らの血、と言ったはずだ。そうか、敢えて地べたにぶちまけたいというのならば——是非もない」

善意で酒を差し向けたというのに、その酒をぶちまけられてカンカンのイスカandalが、ようやくと本気を出すのだからな。



## 聖杯問答（後編）

—— 辺りに砂塵が舞う。それは、本来森の奥にあるこの古城には有り得るはずのない現象。だが、それは実際に巻き上がっている。

やがて、イスカンダルを中心として眩いばかりの光を放ち、辺り一体の全てを呑み込んでいく。宴会を醸し出していた森は、蜃気楼の如く消えていき、純白に飲まれていく

—— そして、広大なまでの砂漠の上に、彼らは立っていた。

はい、ということ。やって参りました『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』。アニメでもそうだったけど、やっぱ壮観だよなあ、これ。

然りい、然りい、然りい！って。うへへ、こればかりは転生して役得ですわ。つって、端から見たらハチと遊んでるようにしか見えないケド。あれ？それってなんて危険人物？

「——さて、では始まるかへアサシンよ。見ての通り、我らが具象化した戦場いくさばは平野。生憎だが、数で勝る此方に地の利はあるぞ。

——蹂躪せよお!!」

決着あり、だな。へアサシンとは本来、コソコソ隠れながら、隙を見て一撃を決めるピーキーなクラスのサーヴァント。なのに、英雄王を筆頭としたバケモノ揃いの場所に堂々と姿を現すのはまさしく愚の骨頂だわ。

こんなの、戦いと言えるようなもんじゃあない。征服王の言うとおりに、『蹂躪』そのもの。とは言え、これ以上の手札を見せることもないからな。ま、一名とんでもなくシヨック受けてるみたいだけど。どうかもっと絶望してもらって（クズウ）。

——はあ、終わったな。場も白けちまったし、これでお開きってところかね？

「ふう、幕切れは興醒めだったな……いや待て？ そう言えば、始まりから黙して語らぬヤツがおるではないか」

「——おや、僕の番かな？ とは言え、今さら語ることもないと思うけど」

ん、オベロンの番か。まあアサシン共を蹴散らした後でオベロンとか、余計に興醒め

しそうだけど、どうなんかね？

「そう言うな。それで、妖精王よ。貴様は何を以て王道と成し、そしてお主は何を聖杯に願うのだ？」

「そうだね……ただまあ、前提から言わせてもらうと、僕はあくまで“妖精”の王であつて“人間”の王じゃない。だから、君達とはまた方向性が別だということを覚えておいてほしい」

自嘲気味な表情を浮かべている——と、いう演技だな。しかしまあ、堂に入つてゐる分、余計に質が悪いなコレ。初見じや絶対わからんて。

今のコイツは『オベロン』——つまり、”合つてはいないけど、間違つてもいない”という知識がなきや、コイツの真意はわからん。それが知られていない以上、こつちの真意も解ることはない。

「僕は“王”として、今を懸命に生きる者達の側に立ちたい。今を生き、必死に未来へと歩む、そういう者達の道標でありたい、かな。まあ、綺麗事だけだね」

それを聞いて今、オレの脳裏では、妖精國でのオベロンの行動が——いや、オベロンの、“ウェールズの森の領主”としての姿を思い出していた。

確かに、あの時のオベロンは、ブリテンという“目の上のたんこぶ”を壊すために活動していた。けれど、やっぱりウェールズの森で紡いだ彼らへの想いは、どうしても本

物なのだろう。

——羨ましいな。お前は、さ。

「うむう、その気持ちは理解できるが……じゃあなんだ？ 貴様も騎士王と意見を同じくするのかわ？」

「いいや？ 彼女と一緒ににはしないで欲しいね。彼女は言わば『停滞』を望んでいるんだろう。けど、僕としては、人も妖精も、明日へ向かって進んでほしいのさ。いずれ、僕の方が置いていかれるとしてもね」

「ッ……」

ハツハアツ！（CV：大塚〇忠） 盛大に煽りよる。まあ確かに、ソイツがどれだけ偉大で、どれほどの栄光を築き上げたとしても、『国家の停滞』を選んじゃオシマイなんだよな。

国も、民も、人も。生きているなら進み続けるしかない。『停滞』という名の『平和』を完成させてしまった時点で、それはもう、国とは呼べない。——前世も、そうだったしな。

「で、それを踏まえて聖杯についてだけ。僕としては、”使い道もないから要らない”とだけ言わせてもらうよ。強いて挙げるなら——そうだね……『ある相手と話

『したい』かな。喚ぶのは……それは今じゃないしね」

「ふ、むう……成る程な。貴様は明日へ向かつて進む者達の導とならんとする、か。しかも無欲なことよなあ——ああいや、これはそんな小娘と違つて、むしろ善き様なのだがな？うむう……」

——キャスターのマスターは、どうだ？何かないのか？」

いやそこでオレに振る？もうちよつと何か言つてよオベロン……あ、ブランカ——いやブランカでかつ。思つた以上にでかいな……」

まあ、はい、自分で答えろと。やだなあ、注目されるのすこぶる嫌なんだよなあ……。「私めも、これといつて願ひも在りませぬ。挙げるとしても——その某のような、『停滞を望む者』の根絶、と言つたところでしようか」

「なんだつまらん。御主らは悉く無欲なのか？」

「一概に無欲かと言われましても……我々は、自分にできることは全て、己で成すのです。そこで『停滞』すれば、いずれ熟れ過ぎた果実のように腐つてしまいますが故」

「フツ、是非もあるまい。よもや道化の方が道理を知つておるとはな」

アンタほんと人の感性逆撫でしたがるねえ。ニタニタしやがって、顔には出さないけどサ。というか、早く帰らせてもらえませんかねえ……」

ライダーが戦車を呼び出して帰っていきやがった。おいこらテメエ。またか、またなのか？オレを忘れんなっつうんだよ。人のこと呼んどいて置いてくってどういう精神していやがんだ。

英雄王もお帰りなようで——あ、せや。

「失敬、英雄王殿」

「ン——なんだ、これは」

「妖精の蜂蜜ミツにて。貴殿の宝物には遥かに劣りますが、お近付きの印にと。蜂蜜酒ミツにするなり、甘味にするなりご自由に成されるが宜しいかと」

「……ほう？気が利くではないか。ならば是に免じて、貴様の如何については見逃してやろう」

「寛大な処置、有り難く。次に相見える時には、我が仮面、御前にて御見せ致しますよう」  
 ——期待しておるぞ——と言って帰ってった。うちらもとつとと帰らせてもらいまっさ。というわけで、移動用の虫を喚び、ました。はあ、早く帰って仕込みしなきや……。

ちなみにあの蜂蜜、れっきとした本物の蜂蜜です。なんで持つてるかというと、さつき小妖精などでしてたらいくつか貰ったので、それのお裾分けということ。

「待て、キャスターのマスター」

「はい？——何か？」

なんじやい、こちとら疲れてんだ。話すなら話すできつさとしてくれよ？参加したくもないものに参加して、もうほんと反吐が出そうだわ。

フヘヘヘヘ、ヘイトが溜まる溜まる。……そーういやまだ平成なのかこつちは。この唐突な望郷ほんと勘弁してほしいナリ。

「単刀直入に聞く。——『ヴォーティガン』、という名前に聞き覚えはあるか」

「はあ、『ヴォーティガン』、ですか？ふむう……——いえ、聞き及んではおりませんが……それが、何か？」

「……………いや、知らないのなら構わない。引き留めてすまなかった」

「いえいえ、では私めらはこれにて」

あつぶねー、やつぱり感付かれてたか。ほんとセイバークラスの直感嫌いだわあ。”  
オベロンⅡヴォーティガン”の式に至らなかつただけありがたいけど、ここでポカやつてたら確実にバレてたな。

ふむう、もうちと慎重にやるべきだったかね？いや、今はこれでいい。どうせいつか相対するんだ。現状維持で進めるしかない。

せや、置き土産おいてつたる（唐突な矛盾）。

「騎士王殿、道化から忠告を。理想に殉じるのは宜しいですが、理想は理想なのです。真



実を見ずして理想は叶わないのですよ。貴女がやりたいこと、それをはつきりせずして物事は成りませんよ」

「……………忠告、感謝する。だが、宴は終わった。疾く去れ」

はいはい、こりや聞いてないネ。人の話ぐらいちゃんと言いたらいいのに。アンタのマスターもだけど、揃いも揃って人の話聞かないから自滅するつてのにな。

軽くお辞儀してからとつとこ退散退散つと。ほんじゃま、”家拠点”に帰りましょつか。

—— さつきまでのクソみたいな酒盛りが終わって、ようやく家に帰ってきた。やれやれ、僕だつて暇じゃないし、面白半分に参加してみたけれど、イマイチだったなあ。とは言え、ヘライダーの宝具や彼らの信念、ないしは性格を知れただけでも良しとしないとな。へアサシンも始末できたしね。

「それで？ここからどうするんだい？マスター」

「おう—— 『獣』を起こすぞ」

やつとか。まさか、本当に”再現”するなんてね。心なしか、どことなく”彼女”に似ている気もしなくはないけど……まあ、いいか。

本来なら、これでへキヤスターが脱落する。けど、マスターは”コレ”をその身代わりに捧げること、聖杯の穴埋めをしようとしてる。

—— やれやれ、こんなことを簡単に思い付くマスターが、全くもつて末恐ろしいね。あの『蠱毒』のお陰で、存在がもはやサーヴァントのソレになっている。だからこそ、そんな『反則技』ができるんだろうけど。

「それじゃあ、夢の終わりを語りに行くのでしょうか」

「ああ。おい、往くぞ蔵硯。そして——」

「……………」

—— 『終末』が動く。片や、500年に渡って聖杯を求め続けた、今は傀儡の蟲老。片や、こことは異なる未来にて、数多の“妖精”を喰らい尽くし、歩く破滅として暴れし『厄災』の再現体。

絶望までのカウントダウンは、もうすぐそこまで迫っていた——。

## 厄災の進撃

——それは、夕暮れ時に現れた。

上空には、先ほどまでの晴れ間はなく、いつの間にもやら暗雲が立ち込めていた。

さらに上流側から、影のように黒い犬達は何体も現れてくる。それらは、未遠川の周りを歩いていた人々の側を次々に通過していく。その度に人々は酷い眠気に襲われ、一人、また一人と眠り転けていく。

次第に、夜のように暗くなつた上流から、見上げるほどの巨体を持つ存在が、その爛々とした目を輝かせる。

「——全ては……我らが王の為に……」

虚ろな目をした老人が一人、川縁に立っていた——。

異常事態を感じたサーヴアント達が次々に集まってくる。真つ先に現れたのは、セイバー——アルトリア・ペンドラゴンと、その陣営であった。

「あれは——つ、『間桐 臓硯』!? 行方不明になったって聞いてたのに、どうして……」

「つ、その老人。貴様、一体なにをするつもりだ。——いや、何を呼んだ!!」

セイバーが鋭く睨み付ける。妖しげな雰囲気を纏ったその老人——間桐 臓硯は、静かに笑い声を上げる。

そして、セイバー並びにアイリスフィールを見据えながら、その手に持つ杖を打ち鳴らす。

「クッククック……いやなに、何も使えん奴らばかりに任せるまでもなく、儂自ら聖杯を取りに往けば良かったものと気づいただけよ。だからこそ、儂は此奴を呼び覚ました。使サウワントい魔未満だが、充分よ」

臓硯の背後より、見上げる程の巨体を持つ存在が現れる。

——それは、まるで影のように黒く、禍々しい赫色の眼光を放っていた。更には、その巨体の周りには、アルトリアですら見覚えのある存在がたむろしている。

「犬……？ いや、まさか—— 『黒妖犬』 か！ 」

「然りよ。付属品ではあるが、存外有用であつたわ」

老人が嗤う。巨体が歩み寄り、天にまで轟く遠吠えをあげる。それにつられるように、周囲の黒妖犬達も遠吠えをあげていく。

そして、それらの視線はセイバー達へと向けられ、獯猛に牙を剥き始める。そんな中、重厚な走行音を鳴らしながら、一台の大きな戦車がセイバーの隣へと降りる。

「おお騎士王！ 」

「征服王……！ 」

軽快に声をかけてきた征服王イスカンダルに対し、睨みを利かせるセイバー。その様

子に慌てたようにして訂正を入れる。

「よせよせ、今夜ばかりは休戦だ。あんなデカブツを放つぽったままでは、おちおち殺し合いの一つもできはせんわ。さつきから、そう呼び掛けておる」

当人も参つたように語る。その様子に偽りはないように見える。というよりも、最初に現れた時のように、彼自身隠し事はしない主義であることが伺える。だからこそ、多少険を和らげる。

「ランサーは承諾した。じきに追い付いてくるはずだ。——実を言うとキャスターの奴らにも声をかけておつてな。ただまあ、彼奴らも取り込み中らしく、遅れるのとことだそうだ」

「——」。了解した。こちらも共闘に異存はない。征服王、しばしの盟だが、ともに忠を誓おう」

アイリスフィールに確認を取り、征服王の申し出を受けるセイバー。その後、戦車の中からウェイバーが顔を出し、アイリスフィールに作戦の可否を問う。

「ともかく、速攻で倒すしかないわ。あの怪物は、見たところ周りの人達から魔力だけを吸い取っているみたいだけれど、いつその牙を剥いて暴れるか判らないわ。そうなる前に、どうにかしてここで食い止めないと」

「——ふむう、成る程な。奴が飢えに飢えて見境無しの食事をおつ始める前にケリをつ

けねばならんわけだ」

そうして彼らは臓硯を見やる。これらを喚び出した彼の老人は、未だ薄らとした笑みを浮かべ、その巨獣の背に佇んでいた。

——不意に、セイバーの直感が疼く。あの老人を見る度、そして、あの巨大なナニカを見る度に、どうしたことかセイバーにも判らず、只ケ己の直感のみが疼く。

「見たところ、あの老人が主犯であろうな。だが、当の奴はあの厄介そうで尋常でないデカブツの上に乗っておるときた。さあ、どうする」

『引き摺り下ろす。それしかあるまい』

態度は変わらず、しかし、油断のない鋭い注意を巨獣から離さないイスカandal。現に彼の言うとおおり、老人こと、間桐臓硯は巨獣の上で薄気味悪い笑みを浮かべるばかり。

そんなとき、声が響きランサーが実体化する。槍を構え、悠々とばかりな態度を見せる。

「ランサー、その槍の投擲で、岸から巨獣の上を狙えるか」

「モノさえ見えていればどうということはない——と、言いたいのが、あれでは届く前に墜とされるだろう」

「なら、攪乱ぐらいでいいならやってみせるとしようか」

ふと、頭上からの答え。見上げると、手のひらほどな純白の蛾が飛んでおり、そこか



ら何かが飛び降りる。と、同時に、コミカルな演出と共にオベロンが姿を見せる。

舞う様な着地を見せて、彼はこうのたまう。

「妖精王オベロン、有事につき颯爽と登場——つてね。戦う力はそれほどこないけれど、気を逸らすことぐらいならできるとも」

「ならば先鋒は、私とライダーが務めよう。いいな、征服王」

イスカンドルは了承するも、セイバーに対して訝しげな問いかけをする。それに対しセイバーは、己に与えられた『湖の乙女の加護』について話す。

それに感心するイスカンドル。そして、一番槍は貫つたとばかりに戦車を駆け巡らせる。続くようにしてセイバーが川へと駆け出し、水面の、ほんの紙一重分の空間をおいて、まるで地上で走っているかのように巨獣へと向かっていく。

それを見届けたオベロンは、虫や小妖精達を喚び出す。それらに労るように、こう語りかける。

「やあ皆。悪いんだけど、彼らの注意を惹いてほしいんだ。ああでも、無理はしないでね？目の前で踊るだけでいいんだからさ」

小妖精達は元氣よく返事しているかのような動きを見せ、次々に黒妖犬達の前へと飛んでいく。セイバー達を抑えんとしていたはずの黒妖犬達は、目の前でひらひらと舞う目障りな存在に、追い払うようにして注意を逸らせてしまう。

その不意を狙い、セイバー、並びにライダーは、周囲に蔓延る黒妖犬達を討ち払っていく。そして、ついに巨獣に対しても攻撃を加えていく。が――

「くっ――（攻撃が効かない……いや、効いてはいるが、ここまで微々たるものなのか……）」

今までの雑兵モドキであった”呪塊<sup>モ</sup>妖精<sup>ス</sup>”や”黒妖犬”らとは違い、この巨獣に対して有効打が与えられずにいた。攻めるに攻めきれず、どうにかもがく二人。

そんな時、上空から幾つもの武器が巨獣に向かって飛んでくる。その武器群は巨獣の身体を貫き、突然のダメージに驚きの声を上げる。だが、少しして段々と元に戻っていき、ついには完全に修復されきってしまう。

——戦場から少し離れたビルの上——

おーおーおーおー、やってらやってら。揉めてる揉めてる。貴族意識というか、魔術師的意識の高い時臣と、森羅万象を統べる王としての意識の高いギルガメツシユとじゃあ反が合わねえよってハナシ。

どーもー、アルレッキーノこと朝露どすー。いやあにしても、無理矢理繋ぎ合わせてみたけど、案外上手くいくモンね。

この未遠川の上流から、『黒犬公』<sup>パーゲスト</sup>としての能力である『魔力喰い』、それを周囲の黒妖犬共と共有させながら進撃させるといふ、自分でも中々無理のあるやり方だったんだ

がね。

ま、もうあのご老人も必要ないし、このまま首謀者として退場してもらいましょうかね。オベロンも、いい具合でアリバイ作ってるみたいだしな。

『(マスター、この後は?)』

『(戦闘機が二機来る。内一機は落とせ。片方はバサスロ出勤でギル集中。補正は微量でよし)』

『(りよーかい)』

そんなこんやしてるうちに、キマシタワー。んと……F-15”だっけ?あれ。そこまで現代兵器に詳しいわけじゃねえからなんとも言えんが。

どれどれ……?ダメージを受けたバーゲストは、上空を睨んでギルガメツシュを捕捉う。そして足元から鎖をこれでもかと向かわせるも?運悪く一般通過しちまった哀れな戦闘機に当たって墜落。そしてンンン、ゴチソウサマーツ、つと。

『(うわ、何あの変態軌道。キモツ)』

『『ウハハハハ』(いいじゃん最っ高。ああいうのロマンだわあほんと)』

出た出た、バサスロの通常の戦闘機にはできないクソ変態軌道。しかもミサイルが鋭角軌道からの無限追尾とかエグすぎるわあ。あれは空対空戦闘したくねえなあ。

つって、それ以上に変態的な軌道するギルガメツシュのヴィマーナよ。ハハツ、やつ

ぱ直に空気に触れた観賞はたまんねえなあオイ。

——ん？おいおいおい……余計なことしないでくれよな……。

「遠坂……時臣……ッ！」

「……間桐、か」

——伝えねば、伝えねば。このままではマズイ、このままでは危ない。葵さんも、凜ちゃんも。そして——”アイツ”と一緒にいる、桜ちゃんも。

ダメだ、戦ってはダメなんだ。お前が死んでしまつてはダメなんだ。桜ちゃんを、臓硯に養子に出したことは許せない。けど、それ以上に、お前が死ぬのは、俺がここで死ぬ以上にダメなんだよ。

「——逃げろ、ツ。葵さんを連れて、冬木市から、逃げろ！」

「——何を、言っている？」

頼む、届いてくれ。俺はもう、永くないんだ。俺にはもう、伝えられることが少なすぎる。

なぜなら——アイツらの作戦を、俺はつい、聞いてしまった。そして、見つかつてしまった。逃げてきたが、多分もう見つかつている。だからもう、俺は助からない。

「お前が、桜ちゃんを臓硯に養子に出したのは許せない。けど、頼む。逃げてくれ——  
——葵さんを、凜ちゃんを、助けられるのは、お前だけなんだ」

「——雁夜、何が——」

「ガッ、アアアアアアアアアアアアッ!!!」

苦しい！痛い、イタイ！なんだ、これは。なんだ、この痛みは。背中から——蜂？蜂、だと……まさか。いや、そんな早くに？嘘だ。まだ、まだなにも伝えられていないというのに。

不味い、不味いマズいマズいマズイマズイタイタイ——ツ！

「時臣ッ！キャスターは偽物だ!!あれは、サーヴァントじゃない!」

「なんだと……?どういうことだ、説明を——」

したい、けど、もうそんな時間がない。身体が勝手に動かされる。関節一つ持ち上げる度に、自分の筋肉から細胞の一つ一つが悲鳴を上げる。

血が胃の中を逆流して、吐血する。けど、勝手な動きは止まらない。

「逃げる時臣！俺はもう、俺の意思で動けない！桜ちゃんを助けて逃げ——ガアアアアアアアアッ!!」

『(おいおい、白ける真似すんなよ。せっかく助かった命を無駄にするとか、本当にアンタは使えないなあ)』

身体の何もかもが上書きされていくような、そんな不快感と共に、アイツの声が脳に直接送られてくる。

頼む……逃げろ、逃げるんだ時臣……このままだと、葵さんも、凜ちゃんも。皆、みんな……

「みんナを……まもレ……とキおみ……」  
「雁夜ッ！」

ああ……ひさびさに、お前に名前をいわれた気がするよ……。わるい、時臣……。もう、いしき、が……。



## 『聖剣』解放

—— 一体、何がどうなっていると言うのだ。

元旧友にして、今は魔術師の世界と袂を別つたはずの雁夜が、マスターとして現れ、あまつさえ私に警告だと？

それに——”キャスターが偽物”とは、一体どういうことなのだ？確かに、彼の『妖精王オベロン』がキャスターとして召喚されたことには驚いた。だが、それが偽物とは？

「ガアアアア……ト、キ……オ、ミイイ……ギイアアアアッ!!」

「ッ——」

狂ったような声を上げる。半ば、強制的に魔術を使わされているのだろう。身体の至るところの皮膚が裂け、血を流す。あれはもはや、当人の意識はないのだろう。

幸い、向かってくるものが防ぎやすい初歩的なものや、私自身の火炎魔術で一掃できる羽虫操作ばかりだ。だがそれでも、疑問は尽きない。

雁夜、お前は……一体何を知ってしまったというのだ——。

地に蔓延る犬共と、空を飛び交う二色の影を見ながら、思う。——うーん、ビツクリするほど混沌<sup>カオス</sup>。

皆に”足止め”という名の偽装工作をさせてもらっているけれど、正直言つてそのままでも勝てそうなんだよねえ。だって、『英雄王』は『狂った騎士』とランデブーしてるし? 『征服王』はさつきから突撃しかしてないし、『騎士王』に至っては頼みの”聖劍”が振れないときた。

「——妖精王殿」

「うん？何かな」

おっと、いけないいけない。今はまだ戦闘中、油断は禁物だったね。”彼”に話しかけられたことで、素を出しかけてたことに気づいたよ。

「貴殿の御力で、どうにか私も戦場に——」

「いやあ、無理かな。残念だけれど。つて言っても、今行ったら間違いなくお荷物だよ？」

そうそう。ここで”彼”————ディルムツドに行かれると困るんだよね。彼の持つ宝具は、端的に言ってしまうえば、あのバーゲストを倒しうるものだ。ましてや、彼がここで動くことは論外でもある。

ま、そろそろ動きがあるんじゃないかな？

「フ、フフフ、フハハハハハ！好い。英霊なぞに頼らずとも、儂が蹂躪し尽くし、聖杯がこの手に——」

バクリつと。僕が『ヤレ』と指示をしたお陰で、あの気味の悪いお爺さんはあわれゴツクン。まあ、流石に皆驚くよね。主導権を握っていると思っていたら、食べられちゃったもんだしね。

さてさて、更にあのお爺さんに仕込んでおいた”呪詛”によつて、『黒犬公』の身体が膨張していく。そして肥大化したバケモノは、倒れ伏す人々や野次馬目掛けて動き出

す。

「おうい、セイバー！このままじゃあ埒が明かん。一旦退けい！」

「バカな！ここで食い止めなければ——」

「そうは言っても手詰まりであろうが。いいから退けい！」

おや、セイバー達が戻ってくるね。作戦会議かな？

——ふーん。イスカンドルの宝具で足留め、ね。いいんじゃないかな？持つわけないけど。程々に付き合わせて、頃合い見て食い破らせるか。

つと、あの二人が降りてきたか。丁度イスカンドルが宝具を発動したタイミングだったみたいだし、残念ながらぶつかるとはなかったようだ。

さて、アーチャーのマスターに焼かれ落ちたカリヤ君は、一悶着あつたみたいだけど、なんとか回収できたみたいだね。なら良かった。あれはまだ必要だからね。

おや、あれは確か『携帯電話』っていうシロモノだったかな？そして、あの機械の中から聴こえる声の主がセイバーのマスター、と。

——へえ？位置ずらしが利くなんて、随分便利なものだね。それに、左手の解放、ね。

さて？それじゃあ騎士サマ達がどんな選択をするのか、”僕”としてはそれなりに楽

しみだな。破滅か、それとも我欲か。どうするんだろうね？って言っても、基本的には”俺”はどうでもいいんだけど。

「——ここで勝利するべきは、我らが奉じた騎士の道。そうだろう、英霊アルトリアよ」  
ふーん、解き放つんだ。”ソレ”を。はあ……また見ることになるなんて、ね。あの忌々しくも綺麗な『聖剣』を。

さて、まあほんの少しの邪魔はさせてもらおうか。ということ、こつそりとバーサーカーの視線がこちらに向きやすくしてと。

英雄王は墜ちた。けど、セイバーも随分とよくよけるもんだな。あの弾幕の中を、水面の上を駆けて避けていけるのは大したものだよ。いやホント。

ん——やっと、イスカンダルの固有結果が軋みはじめたか。兵士クンも来たけど、どうやら限界っぽいね。ここで王手をかけたところだけ———そうもいかな  
い、か。

———そこまでにしてもらうぞ、狂戦士!!———

これでバーサーカーが撤退、か。しかもあのアーチャー生き残ってるし。ほんと、これだから英霊ってのは。

固有結界が解けて、肥大した『黒犬公』が照明弾の下に現れる。ソレに対して、セイバーがその黄金の剣を掲げる。

——ああ、本当に。心の底から、反吐が出そうな程に嫌いだ。この“光”は——  
 ”彼女”と重ねて、思い出してしまいそうになる。別人だと判っているのに、正反対な存在だと判っているのに。あの融通の効かない、けれど一途に駆け抜けた彼女と。  
 星の内海から溢れる力と、数多の戦士達の魂が光となり、辺りに満ちる。セイバーが、一歩踏み出すと共に、『聖剣』の光は極大へと至る。

——刮目せよ、”卑王”。

——ああ、視ているとも。”騎士王”。

星の内海にて打ち鍛えられた、人々の願いを携えし星の聖剣。幾多もの光を束ねて放たれる、其は——

『約束された勝利の剣』!!』

放たれるは光の奔流。水面を裂き、『黒犬公』の身体を崩壊させていき、遂にはその核に届く。

そして——全てを呑み込み、巨大なまでの光の柱となって、立ちはだかつた”厄災”を消し去つた。

これをもって、三遠川における大規模かつ類を見ない、英霊達の一大共同戦線は終結したのだつた——。

——やれやれ、全くもって見事なものだつたよ。だからこそ、ありがとうと言わせてもらうよ、セイバー。これで僕達は後顧の憂いはなくなつた。

あの『黒犬公』は、ゾーケンとかいうゴミを食らつたお陰で、英霊のソレに準ずる”格”を得ていた。更には、この聖杯戦争自体がもうマトモじゃないのもあつて、本来へキヤスター<sup>ポ</sup>が入るはずだつたスペースに、目論見通りピッタリ填まっている。

「——それで、そつちの首尾はどうだい？マスター」

「おう、バツチリ出来上がってらあよ」

投げやりに放り渡された“ソレ”を受けとる。

——“彼”が持っていたものと比べて、見た目はそう大して変わらないが、禍々しさが格段に上がり、峰となる溝の部分には、大口を開けた芋虫のような意匠が彫られている。

「奴の宝具、『無毀なる湖光』をモデルにしたお前さん専用の武装礼装だ。敢えて銘を付けるなら、そうさな——」

『ケイオス・アロンダイト墮穢せし湖光』

「へえ……」

俺は改めて、その手に持つ『墮穢せし湖光』を眺める。

虚映曰く——本来の『無毀なる湖光』が持つ、パラメーターの1ランク上昇、竜殺し、不壊属性、状態異常を含めた様々な攻撃に対する耐性能力値の上昇といった効果はもちろんのこと、“俺”が持つことによって、接触時に敵からの魔力吸収、及び魔術などによるエネルギー的な間接攻撃の吸収など、中々に便利なシロモノとなっている。

「一応、取り込んだ魔力は小出しにも出来るよう調整してある。——元が元だからな、オ



レでも流石にキツイもんがあるってもんだわ」

「ま、こんなもんならまだマシじゃない？まだ負けてもいないんだしさ」

——虚構魔術による”宝具複製・改造”——。できるとは思ってなかったけど、本当にやりきってしまったとはね。ただその分、かなり持っていかれたらしいけれど。

マスターが言うには、”大規模魔術を五回行使してもお釣りがくる量”が持っていたらしい。事実、工房の床には、すっかり空になった魔力蓄積用の結晶がこれでもかと積まれている——ちなみに、これは今まで溜め込んだ約7割の量だとか——。

「それで？ここからはどうするつもりかな？」

「明日の夜、ランサーが消える。そこはまあいいとする。オレ達が動くのは、アーチャーとライダーがぶつかった後だ。」

——そこから先で、全ての決着が着く。それまでは英気を養うこつたな」

くたびれた様子で、マスターが寝室へと引つ込む。俺は剣を掲げて、その背をなぞりながら思い起こす。コレを制作するにあたって、しばらくはあまり大きく動けそうにないらしい。

部屋の明かりに当たり、妖しく輝くそれを眺める『奈落の虫』。各々の思惑が交差する中、その”悪意”は静かに期を見計らい、その”失意”は静かに牙を研ぐ。

—— さあ、黄昏の時は近い——。

## オベロン②：記憶

——夢だ。誰かの、夢だ。誰かは解っているが、だれかは判らない。

灰色の世界だった。色のない、死後の世界があるのならば、まさにこの通りの世界なのだろう。命の流れが感じられない、色褪せた世界。

——彼は独りぼっちでした。ずっととずっと、独りぼっちでした。助けを求めても、救いが欲しくても、誰も助けてくれず、誰も救ってはくれませんでした。

どれほど努力しても、どれほど功績を重ねても、誰も彼を見ずに、その血と汗を流した日々を知らず、褒められることも、祝福されることもありませんでした。

彼は、神様にすら見棄てられてしまったのです。

『オマエ、ほんつとつかえねー』

『おもしろくない』

幼少期、彼は年を経るごとに、一人になっていきました。だんだん、だんだん、周りには誰もいなくなっていきました。

そうして年月は経ち、少年となりました。

『アイツだよ……』

『うわあ、ないわあ……』

彼は、一人は嫌でした。なので、仲良くしようと、明るく接していきました。けれど、彼に返ってきたのは、侮蔑と差別と、そして嘲笑でした。

彼は、人を信じることをやめました。彼は、人と共に歩むことをやめました。彼は……ヒトを憎みました。

『でさー……そうそう……』

『えー？……それさー……』

『……………』

彼は一人でした。彼は独りでいました。彼は、独りが心地好くなっていました。助けを求めた”親”<sup>ダレカ</sup>は、独りになっていくことを、気のせいだと言った。それは、お前の独りよがりだと言った。

誰にも救われず、誰にも見向きもされなかつた彼は、次第にねじ曲がっていき——遂にはその歯車すらも、狂ってしまいました。

『ゲホツ……いやあ、はは……ここまでかね…』

少年は青年となり、夜の街で独り、赤い染みを洒落た服につけて、灰色の壁にもたれかかりながら空を仰いでいた。

その歩んだ道のりは、常道のものではなく、取り付く島を喪った、憐れな漂流者の成れの果て。殺しに殺し、その果てに砕け散った決意の先。殺戮にのみ、己の生ける道を見出した、愚者の末路。

『ははっ……ロクでもねえ、な……』

こうして、灰色の世界を生きた男は跡絶えた——

「——はッ、はぁ……なんだよ、コレ……」

気持ち悪い、吐き気がする。なんだ、アレは。あんなもの、妖精國の奴らの方がまだマシじゃないか。いや、どっちもどっちだけどき。

侮蔑と差別と嘲笑と、血と殺戮と狂笑と。あの狂ったニンゲン共の世界で、まるで自滅を望むかのように、笑ってアイツは死んだ。

「——それが、オレの前世さ。オベロン」

「……前世、ね。俺のマスターだからロクでもないと思つてたけど、予想以上だったよ」  
「言うねえ。まあ……実際そうだったけどな」

へし折れて倒れた十字架の上に、自嘲染みた笑みを浮かべる”マスター虚映”の姿。彼の言う通りなら、ここは彼の夢の中。もつと言え、彼の『記憶』の中にいるってことか。

正直、不愉快だった。でも、どこか腑に落ちた。彼の異常性は、ここから来ていたってわけ、ね。

「それで？いつまで続くのさ、コレは」

「さあ？わかんね。てか、解つてたら苦労しねーよ」

うーん、こうやって相手するとつくづく感に障るなあ。まあ別にいいけどさ。俺としては、マスターがどういふ奴であろうと、契約の上では従うよ？そりゃあね。

「そら、また続きが来るぞ。見たくもないけどな」  
「それは同感」

——くるくるくるくる、まわる”  
いきつく先は、”奈<sup>ナ</sup>落<sup>ベ</sup>の底<sup>ノ</sup>へ”  
——”選<sup>ト</sup>択<sup>ア</sup>”。

——むかし、むかし。あるところに、声をあやつる一族がいました。彼らは声をつかって、いろんなことができました。

けれども、ある時からそれができなくなりました。こまった彼らは、しかたがないので、自分たちのからだをいじりはじめました。

それでもダメだったので、こんどはダレカのからだをいじっていきました。声をあやつる力がほしくてほしくて……

——そのうち、彼らはしたかったことを見失ってしまいました。

そんな彼らに、とあるこどもがうまれました。彼らはおおいによろこびました。『これですよやくとどく』、『これとどいてみせる』と。

けれども、その願いはかきませんでした。



こどもは、彼らからの愛情が、つくりものであるとわかっていました。わかってしまいました。

だから、こどもは彼らを殺しました。

こどもは知っていました。彼らの目の中になにかがあるのかを。

こどもは知っていました。彼らが、本当は愛情なんてないことを。

こどもは知っていました。彼らから与えられるのは、全て自分のためではないことを。

子供じゃないコドモは、知ってしまいました。

——ここでも、自分が求めたものはないのだと。

だから、コドモは殺しました。助けを求めるコエに対して、『お前達もやってきたじゃないか』と。

だから、殺しました。『誰も助けようとしていなかったらうに』と。

だから、殺しました。『充分殺し尽くしたんだから、今度はアンタらの番だよ』と。

屍の山を築いた、虚ろを映す少年は、やがて死を笑う道化師になりました。

そうして彼は、無差別な肅清<sup>救済</sup>も、無情な殺戮<sup>研究</sup>も、理想を体現した英雄<sup>ヒトゴロン</sup>も。笑い嗤って、最後には自分を嗤うのです。

死に意味は無く、追い求めることは徒勞であり、努力にもまた価値はなく。自らに愛する資格はなく、また愛される資格もなく。愛を嗤い、情を嗤い、嗤いわらって遂には何もなく。

空っぽの伽藍堂は、何かを想うこともなく、童話のような暖かさは飾り物で、英雄譚のような明るさは仮面で。

どうしようもないほどにまで狂い堕ちた彼が願うのは、『ただ、独りでいること』だったのです。それこそが、彼の求まる救いだと信じて――。

「——前世でお前のことを知ったのは、手慰みにゲームをしていた頃さ。しびれたよ、憧れたよ。けれど、それはアンタに対しての侮辱に他ならない。

だから、お前が”ニンゲンを嫌悪する”のなら、オレは”ニンゲンを嘲笑う”。お前が”ニンゲンは気持ち悪い”と言うのなら、オレは”ニンゲンは面白い”と言おう。

それがオレ。『朝露 虚映』にして『アルレッキーノ』というニンゲンさ」

ああ、そうか。オレが人間や妖精達に対して”気持ち悪い”と思っただのに対して、コイツは人間達に対して”無関心”なのか。手を出されたからやり返す、ソイツがやったから仕返す、ただそれだけ。

俺が『ブリテン島の自滅願望』からうまれたなら、コイツは『人類が造り上げた自滅装置』。いずれコイツは、人間共の積み重ねた罪の数だけ殺し尽くすであろう、粛清者になる。

酷い話だ。否定して、否定して、己の思うがままにしようとして、結局は自滅のための粛清機構を造り上げてしまうなんてね。まるで妖精國の妖精たちみたいだ。

「どうだい？オベロン。オレも随分と”くだらない”だろう？」

「……はあ」

……全く、どうしてこのマスターはこうなのかな？ま、境遇を考えたら仕方ない、か。くだらない、本当にくだらない。身勝手なエゴを押し付ける、気持ち悪いあの人間共

と俺と一緒にしないでほしいよ。

「マスター。敢えてそう呼ばせてもらうよ。俺は基本的に、全てどうでもいいんだよ。君の過去も、経験も、俺からすればどうでもいい。

けど一つだけ、本心で聞かせてもらう。

——アンタ、今楽しいんだろう？」

「マスターの目が見開かれる。なに？解ってなかったとしても言いたいのかな？」

確かに、今までのマスターの人生はドン底もいいところ。暗い穴の底、まさに奈落の穴を落ちていつているに相応しいほどだ。

けれど、俺と共にいるときのアンタは、憎たらしいほどにまで楽しんでいただろう。初めはメンドクサそうにしてたけど、それでも俺と一緒にのアンタは生き生きとしていた。

「隠すなよ、だつたらそれでいいじゃないか。俺とアンタで、最高のシナリオを書いてやって、”抑止力”に言ってやれよ。

——『ザマアみろ』ってさ」

「——ぶつ、あつはははは!!いいね、それ最ツ高。中指立てて嗤ってやらあ」

そうそう、こうじゃないとね。確かに、俺は汎人類史だって、何であれ気持ち悪いとしか思えないさ。

けれど、マスターだけは。アンタだけは、気の知れた悪友とでも言うのかな。そういうものを、感じている。まあ、死んでも口には出さないけど。

「さあ、そろそろ夢の終わりだ、マスター。いけるかい？」

「当たり前だろ、誰にもものいってやがる。とことん引つ掻き回してやらあよ」

間もなく、夜が明ける――。

## 決戦前夜

——オベロンが、虚映の夢を見る前のこと——

——それは突如として、私の前に現れた。傍らには、どこか遠くを見ているかなようなバーサーカーのマスターを抱えて、そこに立っていた。

その男は、まるで夜の闇のように黒く、底のない穴のように胡乱な男だった。

『——コイツ、好きに使つてよ。もう用済みだからさ』

そう言つて、バーサーカーのマスターを放り投げてきた。生きてはいる、意識もある程度はしつかりとあるようだ。先日、彼を回収しようとしたところ、仮面の男に邪魔をされたが、その関係者なのだろうか。

一体なにが望みなのか、そう聞くと、男は一瞬だけ面倒臭そうな顔をしたが、次見たときには薄ら笑みを浮かべて宣つた。

『別に？好きに使いなよ。ああでも、もしソイツが望んだら、せめて仇敵——確か、トキオミ？とか言う奴と会わせてやつてよ。きつと、面白いから』

——貴様は、何者だ。

英靈にしては禍々しく、サーヴァントにしては空虚だ。まるで、そこにいるのにいないかのような。そんな印象が感じとられる。

少し悩む素振りをしたあと、先ほどと変わらぬ……いや、先ほどよりも笑みを深めた顔で名乗った。

『俺？ そうだね……名乗るとするなら——』

”卑劣ヴォーで姑息テイで孤独ガイな王ン” さ』

——目が覚める。柔らかな寝台ベッドの上から起き上がり、煩わしいほど輝く朝日を見る。小鳥が歌い鳴き、暖かな陽だまりが届いてくる。

……とまあ、アンニユイな詩を唄ってみましたが、やめました。ええ、やめました（ドマーン）。さっさと着替えてうちのサーヴァントを喚ぶ。



「オベロン」

「昨晚にはもう終わってるさ。仕込みは上々ってやつだね」

おっと、もう終わってたのか。流石だね、ほれほれするよ。

オベロン——いや、ヴォーティガンに頼んでいたのは、『間桐 雁夜にオベロンのスキル——夢の終わり』をかけて、言峰 綺礼へと渡すこと』。その後のことは、まあ多分、ギルギルから”愉快”を教えられた言峰がやってくれることだろうよと。

スキル『夢の終わり』

——対象一体に、究極的なまでなパワフルドーピングをかける、オベロンとしての……いや、妖精國の滅亡と人類史の崩壊を望んだ、”オベロン・ヴォーティガン”としての切り札。

このスキルをかけられた対象は、その能力値が莫大に増加するという。ヘタなサーヴァントであれば、恐らく宝具の連続使用さえできる破格のスキル。

だがその代わりに、このスキルをかけられた時点で対象は強烈な幻覚作用に襲われ、次第に自我が消失。最後には二度と覚めぬ夢の中で、静かに息を引き取ることとなる。

「でもやっぱ……えげつないよなあ、これ」

「なにせ僕は『戯曲オの中の妖精王ロ』だからね。全て夏の夜の夢、その一時の狂騒にすぎないということさ」

手元にある、昔にどこかで買った「遠見の水晶」をいじりながら、オベロンのスキルにあてられたカリヤを眺める。

一応カリヤクンは原作通り、言峰に愉悦のために殺された時臣クンの死体を見つけ、さらにはそこに奥さんも現れ、あわや勢い余って殺しちゃいましたとき。ちゃんちゃん。

愚かだねえ、時臣クンもさ。せっかくカリヤクンが警告してくれたのに、それを聞き入れず母子をこの冬木市戦場から離れさせなかつたんだからさ。

だから、こうなった。これはもう、時臣クンうっかりどころじゃなくて、戦犯だよ？ うん。呆れて言葉も出てこないよ。

「バーサーカーの様子はどお？」

「今のところは静かにしてるよ。ま、夢の中でアイツに何かやってたみたいだけど」「抵抗——だとしたら無駄なんだよなあ」

ま、大方カリヤクンの夢を通して、怨嗟の声でもぶつけてたんだらうけど。とはいえ、オベロンのスキルが発動してしまったからには、どの道彼はもう救われぬ。救えない。

物語も終盤、これより決戦の時。今夜と明日で全てのケリがつく。……ああ、楽しみだ、うれしいとも。たのしくてしようがない。よもや、オベロンを召喚した時はどうなるかと思つたが、ここまですれば出し惜しみはナシだ。

——かつて夢見た自由アルカディアの理想郷は、その追憶から消え、かねて存在すら知ることが能はず。何者にも振り返られることのなかつた道化師。

ついには人を棄て、嘆きを棄て、救済を棄てた彼の側には、あまねく全てを喰らい呑む『奈落の虫』。

希望は無く、絶望はすでに彼方へと。己は人を唾うモノ、傍らには人を蔑むモノ。ならば、最早やるべきことはただ一つ。

語り明かそう、空虚な物語を。笑い明かそう、愚か者たちの末路を。それは、決して誰にも知られることなく、誰にも想われることのなかつた者達が歩む世界。

——自業自得だとも、解っているだろうか？  
ニンゲン共よ、己の愚かさを知るがいい——

その夜、物語は終わりに向けて動きだす——。

狂った泉の騎士は、雷鳴轟く大王に化け、はや貴き騎士の王が守りし聖杯の乙女を篡奪する。なれども、その眼は輝ける剣の王へと、一時も外れることなし。その眼に映るは救済か、復讐か。

数多の蟲をはらみしやつれた男は、叶わぬ夢を想いながら、長らくの仇敵の屍を背負い、かつての愛しき者の亡骸を抱いて、彼らの形見を憂う。己が見ている世界が全て、夢の中の一幕であるとも知らずに。

かつて正義を願った者達は、片や、友も師も、そして妻や仲間も、何もかも全てを失い、その喪に服す暇も無く戦場へ臨む。叶えられることのない、叶うはずもない願いを抱きながら。

片や、星の内海より託された剣に誓いし想い、それは最早届かぬものと知りながら、愚かしくも踊る騎士の乙女。篡奪されし器を取り戻すべく、そして故国復活のため、今一度、盲目に落ちたその剣を掲げる。

雷霆を纏う大王は、騎士の王が持ちたる盲執を憂い、光の奔流と相對する。戦車を失い、己もまた並々ならぬ身でありながらも、金色の王と相見えるべく、未だ若き己が主を乗せて愛馬を駆けらせる。

未だ未熟たる軍師は、己が手に刻まれし紅き印を用いて、自らが王の勝利を願う。未熟であるが故に離別を望むも、王は彼を伴にし、彼もまた友として、戦場へと駆けていく。

万有を謳う金色の王は、覇道を進む王を鉄橋にて待ち構える。その眼に映るは、慈悲なく、そして己こそが唯一の王であるという自負のみ。その笑みが浮かぶは、己が認めたる相手が、自らの前に立ちし時。

笑う黄金と共に歩む、悦びに溺れし聖職者は、蟲に喰われ夢に墜ちた愚者を連れて、篡奪した乙女をエサに、正義を謳う殺戮者を招き寄せる

そして

過去であり未来であるその國にて、醜悪にして墮落せし妖精達を喰い、そして唾棄すべきと嫌悪せし”奈落の虫”は、世界に再び黄昏の時を迎えんと、その食指を伸ばす。その身に宿せし”童話の中の王子様”は、その仮面を破り”卑王”となる。

かつて、救いを求めても、誰からも見向きもされず、砕けた自由を弄ぶ道化師は、異なる世界にて蘇ったその命を以てして、この世界に生ける全てを嗤う。死したる心に浮かぶ笑みは、最早嘲るのみと知り得るからこそ、彼は己の愚と共に、人々を喰い続ける。

—— 決戦の時は近い。最後に笑<sup>う</sup>う者は、誰ぞなるや ——

——くるくるくるくる、まわる”  
世界<sup>トア</sup>”

いきつく先は、”空虚<sup>な</sup>な破滅<sup>の</sup>”。

”死<sup>ア</sup>を望<sup>ナ</sup>む者<sup>ダ</sup>は”生<sup>ヲ</sup>を望<sup>ダ</sup>んだ己<sup>シ</sup>”、

”希望<sup>ヲ</sup>を求<sup>メ</sup>めた者<sup>シ</sup>は”絶望<sup>ヲ</sup>を知<sup>ナ</sup>つた己<sup>ダ</sup>”。



さあ、  
一緒に”  
笑踊いりままししよようう”？  
—

## 妄執の騎士、喝采の卑王

夜が来た、夜が来た。さあさ、やって参りました決戦の夜。終わりの夜、最後の夜、そして、最高の夜。

既にバーサーカー組は言峰と一緒に、冬木の公民館だかなんとかに送らせてある。加えて、そこにはあの”汚れた聖杯”もあるため、生き残った各陣営が集まる

『マスター、ライダーがアーチャーと遭遇したよ』

「了解、お前さんはそつちでヨロシク頼むぞ——へプリテンダーン」

こつちもこつちで、やらにやららんことがある。その為にも、あれこれと設備や対策を、えつちらほつちら用意しているところだ。

一応、状況は見ているし、理解もしてある。間もなくセイバーが到着し、バーサーカーとの戦闘を始める頃合いだ。

さあ、楽しい楽しい”戦争<sup>ゲーム</sup>”をしようじゃないか。

——イスカンダルが、ギルガメツシユと戦い始める少し前——

キリツグから貰った機械バの馬イを走らせ、照明弾甲があげられた場所へと到着する。辺りを見ても、敵の姿は見当たらず、中にいるものだと推定する。

私は、警戒しながら地下へと入っていく。中はとても静かであり、どこに敵が潜んでいるかわからない——

「——いやあほんと、よく生きてたね」

「ツ!!何者か!」

暗闇の奥から拍手をしながら、何者かが現れる。敵か——

「——ツ!貴様は!」

「やあセイバー。あの時ぶりー、元気だった?」

「忘れもしない——」卑王「『ヴォーティガン』。我がブリテンの宿敵にして、強大な敵の一人に数えられる男。

バイクを降りて剣を構える。この飄々とした態度に騙されてはならない。この男は、一度でも油断すればたちまち追い込まれてしまう。

「おっと、残念ながらキミの相手は俺じゃないんだ。

——というわけで、後は任せたよ」

「な、——ツ!ふっ!」

危険を感じてその場から飛び退く。脇から何かが飛来し、バイクを貫く。爆発を利用してヴォーティガンからも距離を——いない?どこへ行つた?

『後はお二人で仲良くね。まあ、仲良くできるかどうか

は、君達次第だろうけど——』

わけのわからないことを語って、奴の姿も気配さえもかき消えてしまう。一体どういう仕掛けか検討もつかないが、間違ひなく見失ったのは確かだ。

だが、今は奴よりも、薄闇の中から現れた存在に注意を向けるのが先決。振り返れば、やはりこちらを睨むかのようにして立つ、正体のわからない騎士の姿。

「バーサーカー……」

「……………Uuuuu」

静かに唸ると、バーサーカーが、キリツグも持っていた“長銃”<sup>ライフル</sup>と酷似したものをこちらに向けてくる。危険を感じて回避行動を取ると、先程まで立っていたところが撃たれ、爆発する。

間合いをはかりながら、バーサーカーの動きを観察する。柱を弾除けにしながらかけていき、爆煙に隠れるかたちで、上から近付く。

「——たあああつ!!」

その勢いで以てして、奴の長銃を切り裂く。そのまま一気に斬り伏せようとした——奴の片手が動く。

追撃の手を止め、その場から跳んで距離を取る。機関銃の弾をばらまきながら、バーサーカーは私を狙い追う。

——このままでは、埒が明かない——

そう思い、近くの車の背後へと身を伏せる。そこへバーサーカーの持つ機関銃の弾が、これでもかと撃ち込まれる。撃たれ続ける車は、あちらこちらに穴を空けられながら大いに揺れる。

一か八か、揺れる車の下に剣を突き刺し、跳ね上げると同時『風王結界』を解き放つ。それによつて車が下部から浮き、壁のように横倒しとなる。

「ぐうう——ッ！」

「A a a a a a!!」

横倒しとなった車を押し、バーサーカーへと近付いていく。その間も車には、ひっきりなしに銃弾が浴びせられ続ける。だが、ある程度近付いたところで、バーサーカーが銃を放り捨てる。

「——今だ！」

その瞬間を見計らつて、車を上へ跳ね上げ、思いつきり剣を突き刺す。はたして、剣は空を裂きながら突き進み、バーサーカーの頭部へと当たる。

だが、その切っ先は、乾いた音を響かせて弾かれてしまう。

「(浅い——っ!)」

落ちてきた車を、バーサーカーが投げ飛ばす。その隙を狙つて、上段から勢い良く剣を振り下ろす——。

「なっ!？」

私は、思わず声に出てしまった。なぜなら、バーサーカーが私の剣を、白羽取りで受け止めていたからだ。

信じられなかった。『風王結界』で隠された我が聖剣に、そんな芸当ができるのは、私の剣の間合いを知る者だけ。そして、そこから考え得るのは、生前に私と縁があつた者のみ。

呆然とする間に、剣に侵食が走る。慌てて剣を振り、バーサーカーを蹴り飛ばす。そうしてもう一度距離を取り直す。

スプリングクラーが発動し、あたりに水飛沫と炎が舞う中、私はバーサーカーに対して剣先を向けて、問う。

「——その武練、さぞや名のある騎士と見込んだ上で問わせてもらう。この私を、ブリテン王『アルトリア・ペンドラゴン』と弁えた上で挑むのなら——」

——騎士たる者の誇りを以て、その来歴を明かすがいい」

剣をバーサーカーに向けてつき出す。バーサーカーは、ただ静かに俯いている。

「素性を伏せたまま挑みかかるは、騙し討ちにも等しいぞー」

語気を強めて言葉を募る。加えて、さらに剣先を差し向ける。バーサーカーは、なお





が彼なのに、それに気付きもしないなんて、彼が可哀想でならないよ』

「ッ——」

聞くな、聞く耳を持つてはいけない。わかっているはずなのに、奴の言葉が明瞭に耳に入ってくる。私の名を叫びながら向かってくるランスロット卿を見ると、さらにそう感じずにはいられない。

私は……私は、貴方を……。思わず、力が抜ける。抜けていく。構えることすらできないほどに、力が入れられない。

『君はさ、救うだけで導かなかった。そりゃあミンナ幸せだったろう。けどさ、導かれなかつた奴らがどうなつたかなんて、想像に難くないだろう?』

「私が……導くことをしなかつたから、なのか……」

『さあ? そんなの俺が知るわけないだろう? 目の前の彼に聞いてみたら? まあ、答えてくれるかなんて、わかるわけもないけどね』

仇敵にさえ教えられてしまう現実には、眩暈がする。その隙を見たランスロット卿が、『無毀なる湖光』を振りかぶつて私に襲いかかる。

私はただ、平和で苦しみのない世界を、ブリテン島の幸福を願っていた。そして、彼もまた賛同してくれていた。そのはずだった。

なのに、最も信頼していた騎士は狂い、私に刃を向け、最も警戒する仇敵からは、結

末という名の現実と、嘲笑を向けられる。

私の、私が願ったものは、間違っていたのだろうか……私が行ってきたことは、すべて無駄だったのか……？

「A a a a a a T h r r r r r r r r r r !!」

「ランス、ロット……」

今はもう、彼の名前を喉から絞り出すことしか、出来なくなっていました……。

## ご愁傷サマ

——はあ、呆れた。汎人類史のアルトリア……いや、”騎士の王”としてのアルトリアは、こんなにも脆いのか。これじゃ、あのカルデアの藤丸<sup>クッ</sup>立香<sup>野郎</sup>の方がまだマシだったな。

アイツの犯した行いを、その結末を象徴するヤツと一緒に見せつけてやっただけなの。それでもうあんなに狼狽えている。あの愚かな女王<sup>モルガン</sup>よりもなおバカじゃないのか？

ほら、力が全く入っていない。腰も引けている。それじゃあ全然ダメだ。だからそうやって追い込まれていく。これで”失意の庭”に放り込んだら、絶対戻ってこられないでしょ、彼女。

「はあ……いつまで御上り気分なのさ、キミは。ああ、そうか。騎士の誉れとかいうのがあるからじゃないかな？ いっそ、彼みたく全部かなぐり捨てたら楽になるんじゃない？」

「……………」

反応ナシ、ね。これはもうダメだな。精神が折れてる、立ち直りそうな見込みもない。アンタは、その程度なんだな。

バーサーカーもさつきからずつと唸って叫んでばかりだし、もういいだろ。さつきとマスターと合流して、この後に備えないと。はあ……全く、時間の無駄だったな。

『——』

「ん？」

なんだ？これ。なんの——まさか。クソツ、それは想定外だ。そこまで脆いとは、考慮していなかった！

「(マスター、カリヤが墜ちた)」

『は？いや早くね!?まだ橋こつちやつと戦い始めるとこだぞ!?』

あーもーッ、やられた！バーサーカーマのマスターウが先に参るとは。令呪ありきでの制御だと言うのに、よりもよつてこのタイミングで『夢幻』に墜ちるのかよ。なにも貧弱すぎるだろう!?

そうだ、バーサーカーはどうなった——ああ、殺ったのか。腹部の鎧を深々と突き抜けて、刀身の前半分が背中から生えているように見える。——やつぱり、魔力切れのバーサーカーじゃあ無理があつたか。

とは言え、それならそれで目的は達成したと言えるし、後は細かい調整だな。流石に

喚ばれたのが性急な状況なのもあって、あんまり準備できてなかったし。

——それで、彼女はこれでもまだ、聖杯を求めらんだね。憐れだなあ……もうあの聖杯は、キミの望んだ聖杯ではないと言うのに。

「(予定が狂った……どうする？ マスター)」

『とりま、セイバーの足止めだな。無茶有りきだが、コツチが終わるまでなんとか耐える。んで、頃合いみて”やられたフリ”だ。出来るな？』

やれやれ、誰にもを言っているんだか。と言いたいところだけど、流石に厳しいものがあるかなあ。別に彼女の相手をするのがキツイわけじゃないけど、後者の”やられたフリ”っていうのがどうにも……。

バーサーカー——騎士ランスロットと対峙するのが前の彼女なら、まだどうにか耐えたけど、今の彼女だと負ける方が難しい。けど、ここいらで退場しておかないと、また、厄介なことになる。さて、どうしたものか……。

「——感動のフィナーレなどこ悪いけど、まだ俺がいるのを忘れないで欲しいかな」

「……そこをどけ、ヴォーティガン。私には、成さねばならないことがある」

霊体化を解いて彼女の前、というか、上階へ行くための道に立ちはだかる。ホントはこういうの、柄でも趣味でもないんだけど。

幸い、まだ偽装魔術は効果を示している。まだ彼女には、『汎人類史の”卑王ヴォー

「ティガーン」』として映っているはずだ。そこだけが今のところ救いかな。

「俺にも」役割があつてね……解つてくれよ？俺だって、やりたくてやつてるわけじゃないんだからさ」

「減らず口を……貴様だけは、ここで倒す！」

んー、こりやあ聞く耳すら持つてくれないか。ま、仕方ないか。一番信頼していた騎士が、自分のせいで狂つてしまつて、更には仇敵と一緒にいるなんて。

俺だって真底嫌になるね。つて言つても、信頼できるやつなんて、そもそもないけど。——ああ、<sup>マスター</sup>彼は別として、ね？

それを知つてか知らずか、彼女は未だ”偽装”させている聖剣を振りかぶり、俺に向かつてくる。だから俺は、ここで新しい”武器”を見せつけてやった。

「なっ?! 貴様、それは——ッ」

「いいだろう? 『墮穢せし湖光』、まさしく君と彼の”証”というわけさ」

目に見えて彼女の顔が歪む。当然も当然か。何せ、さつきまで対峙していた親友の剣が、今再び自らの壁となつて現れているんだから。

自分の行いのせいで狂気に陥つた、最も信頼した騎士。それを自らの手で討つて、なおその友の剣が敵も共に現れる……いやあ、なかなか悪趣味なお話だ。これを考えたヤツは正気を疑うね。

「甘くみたかい？残念、俺だってコソコソしてばかりじゃないんだから——さッ!!」  
「ぐあッ!!」

何度も何度も、軽く振るわれる剣を打ち合わせ。そして、その剣撃のうちに競り合ったところを、剣を払いながら弾き飛ばす。まるで羽虫のように吹き飛ぶね、本当に大丈夫なのかい？

それでも彼女は、その身に許される限り態勢を整えて、また俺に向かってくる。よくもまあ飽きないものだねえ。

「いやほんと、似合ってる似合ってるー。そうやって泥まみれになっている方が、割とお似合いなんじゃない？」

「黙れっ！貴様に……貴様に、私の何が解る!!」

さあ？そんなの知らないって。はあ、ウンザリするなあ……。マスターの方はどうなっているんだ？つと——へえ、あの固有結界、破壊しちゃったんだ。つてことは、あのグルグルしてるのは、俺と同じ『対界宝具』つてワケね。

そりゃアレを見ちゃったら、いの一<sup>ッ</sup>番に警戒してしまうわけだ——

「Vorr<sup>ウオオオオ</sup>rrrr<sup>テイ</sup>tige<sup>ガアアアア</sup>rrrr<sup>ン</sup>ッ!!」

「はっ！——ッ!?なんだよ、まだ生きてたのかよアンタ……ッ！」

おいおいおい、流石にこれはびっくりだ。アンタ胴体貫かれてたじゃないか。それで

もまだ動けた——いや違う、これは……！そうか、俺の『夢の終わ<sup>キ</sup>り』か！

カリヤにかけたスキルの効果で、カリヤ自身がもう二度と目覚めることが無くなった。だが、底上げされた魔力だけは残って、なおも「バーサーカー」に注がれていたとすれば！

「——は、ははははは！いいね、最高<sup>最悪</sup>だ」

「A a a a a a——ワが、王ヨ……」

「ランス、ロット……」

ははっ、マジか。これはたまげたな。この土壇場で自我を取り戻す？そんな奇跡ありかよ。ホント、ふざけてるだろ、コレ。

けど、コイツももうギリギリ。俺と本格的にやり合える程の力は残っちゃいない。ならどうするか、そんなの分かりきってる。

——分かりきっているから、利用させてもらおうよ。

「A a a……ワが王よ、ここハ私ガ……。ハやく、サキへ……ッ！」

「行かせるかよ——」  
”羽<sup>モース</sup>虫”共!!

一応、逃がさないという体でモース共を呼び出して、彼女へとけしかける。ああ、も



ちろん、俺はへバーサーカーとやりあつてゐるから無理ね。うん、ムリ。

さて、マスターから合図がかかるまで時間稼ぎといきたいけれど——稼げるか？  
コレ。うーん、時間を稼ぐだけだとちよつと難しいな。他も並行してなのもあつて、割と難易度高いね。

『——プリテンダー、アーチャーが撤退した。足残すなよ』

「(了解)」

どうやら、タイミング良くあつちも終わつたようだ。それに、こつちも仕留める態勢に入つてゐるしね。彼女の方は……うわ、モース全部仕留めていつたとか、正気？流石聖劍に選ばれた兵器サマ。やることが違うねえ。

つと、余所見してゐる場合じゃなかつたな。こつちも集中しないと。ていうかあの構え、へバーサーカーで持つてゐる宝具じゃないよね？あれは流石にマズイから、こつちも偽造宝具の展開をさせてもらうとしようか。

「——」 最果<sup>さいは</sup>テニ至<sup>いた</sup>れ、限界<sup>ゲンカイ</sup>を超<sup>こ</sup>えよ。彼方<sup>かなた</sup>ノ王<sup>オウ</sup>よ、コノ光<sup>ひかり</sup>ヲ御覽<sup>ゴラン</sup>あれ！」

「——」 夢見た理想は潰え、抱きし願いは終<sup>つひ</sup>に失せた。幾多もの血に濡れし我が晃望、虚空にて睜目するがいい！」

『アロンダイト・オーバーロード  
縛鎖全断・過重湖光!!』

『ケイオスヴォイド・ヴォーテイガーン  
混沌開闢・無底湖光!!』

## 『彼方と落ちる夢の瞳』

……アーチャーは、行ったか。ふう、最初はどうかと思つたが、なんとか” つじつま通り” に行つて良かった。ウェイバー君もこれで成長して、エルメロイ二世になることだろう。

うーん、いやさあ、マジでさあ……今回の聖杯戦争、”この世全ての悪”に汚染されてるせいか分かんねーけど、だいぶ悪意あるよなあ。色んな意味で。

『おーい、マスター。なんとか時間稼いでやつたぞ。全く……ちよつと俺を酷使しすぎじゃない?』

「悪かつたつて。でもま、これで残す障害はあと一つつてわけだし、どうせなら幕切れまで休んでな」

〈プリテンダー〉の方も済んだらしい。いやあもう、カリヤクンが落ちたときはどうしようかと思つたけど、なんとかどうにかなつたな。

さて、今頃アーチャーとセイバーがわちやわちやしてる頃だろうな。さてと……ヨシ、感度良好つと。オベロンが館内に放つていた虫達の目を借りて、観察観察つと。

うっへ、やっぱ何度見ても悪趣味だなあ、あの聖杯は。生憎とその場にいないから、キリツグ君の、あのえげつないやつが見れないのは残念だケド。

——正義の味方なんて、そんなのはただの妄想であって、実現してしまえば反吐が出るほどの殺戮者でしかない。だからオレは、昔から勇者だとか、そういう”正義の味方”が大っ嫌いで仕方がなかった。

……空っぽな正義を振りかざすだけの愚か者なんて、何も考えない無能より、なお夕子の悪い存在だよ。

——私の聖杯を奪うのか!!

ん。ああ、最終局面に突入したのね。あーあ、呆気ない。最後の最後まで、アンタ達は噛み合わない歯車だったな。

輝くキリツグの令呪、そして『エクスカリバー聖 剣』の発動。流石だよ、その判断力は流石と言うべき他不い。

——ただ、誤差範囲で遅かったなってハナシ。

「——おいおいマスター。気味悪いの感じて来てみたけど、なんなのさコレ」

「これが聖杯の”泥”、生きとし生ける全てを穢す汚泥——”この世<sup>ア</sup>全ての悪<sup>リ</sup>”さ」  
 さてさてさーてと、それでは最終局面に相応しい幕切れをしに行くとしますかね。と  
 いうわけで、オレは令呪をかかけてオベロンに命ずる。これこそ、この世界の最後を奉  
 るに相応しいだろうよ。

「我、朝露 虚映が、令呪三画全てを以て、我がサーヴァントに命ずる。」

——  
 〈プリテンダー〉オベロン。受肉し、その力の全てを取り戻せ」

「——ああ、承ったさ。”悪友<sup>マスター</sup>”」

「——理解しなければ」

「どこまでも飽きさせぬ奴。それでいい。神すらも食い殺す貴様の愚道。このギルガメッシュが見届けてやる！」

「——随分と、楽しそうじゃないかい？お二人サン」

愉快そうに笑う二人の元に、俺とマスターが歩み寄る。やれやれ、俺つてば、今回はかなりの貧乏クジ引いたんじゃないかな？ホント、面倒だなあ。

マスターが仮面を取るのと同時に、俺自身もこの偽装を解く。構わないのかつて？もちろん、構わないとも。なにせ——この二人は、ここで葬るんだからさ。

「お約束通り、仮面を取らせて頂きました。故に——御命、頂戴いたします……ネ？」

「ほう？言うではないか、道化。よかろう、今の我は気分が良いのでな、幕引きには丁度良い相手よ」

素っ裸のクセしてよく言うね。割と乗り気だなによりだよ。とは言え、もう手遅れなんだけど、敢えて気付かせないようにお相手しろとね。

——げ、アイツ受肉しても宝具使えるのかよ。なんだソレ、ズルくないか？ま、オレも似たようなものだけども。

「——ふむ？虫風情が、随分とよく動くことだな」

「ああ、何せ虫だからねえ。でも、知ってるかい？英雄王サマ。そうやって傲っていると

——取るに足らない小さな虫の一噛みで、あつという間に崩れていくものだけぞ？」

マスターはどうだろう？どうやら、あの神父の相手に手間取ってるみたいだね。ああでも、アイコンタクトをとるぐらいなら大丈夫みたいだ。

にしても、今回は時間が無かったにしては、割といい具合に進められてたんじやないかな？彼女も、へキヤスターの存在なんて頭から抜けきってたみたいだし。『存在その隠蔽う』意っていうところでは、マスターはかなり相性が良かったようだ。」「さて、それじゃあそろそろ——

——「「不要な役者にはご退場願おうか」

「何？」「む——ツ、ギルガメツシユ！」

もう遅い、遅すぎる。あの神父が周りの違和感に気付いたようだけど、どんな対策をしようとも、もう間に合わない。例え、”彼”アーチャーの宝具が発動しようと、逃れることなんて出来ない。なにせそこは——

——たった一条の光すら届くことが無いのだから。

——俺に、虫が集る。ああ、吐き気がする。気持ちが悪い。こうなる度に集まってくるの、ほんとどうにかならなかなあ。けれど、もうオシマイにしよう。さようならの時間だ、英雄王。



「夜のとぼり、朝のひばり。腐るような……夢の終わり」

——黄昏を喰らえ！ 『ライ・ライク・ウォーティガレン彼方と落ちる夢の瞳!!』——

ソレを視たとき、さしもの英雄王ですら”恐怖”を抱き、言峰は”理解する”ことさえも忘れた。まるで巨大な、生命体のようでありながら、ソレは只々巨大なまでの穴であつた。

思えば、おかしなところなぞいくらでもあつた。なぜ、ヘキヤスターがオベロンなどという存在になつたのか。なぜ、まるで全て知っていたかのように動いていたのか。な

ぜ——自らのところにやってきた男が、そこに立っているのか。

だが、それら全てのピースが埋まりきる前に、ソレは現れた。あまねく全てを落とす『奈落の虫』。彼ら以外には倒しようがない、永劫の穴。それこそが、彼——へブリテンダー〜こと、『オベロン・ヴォーティガン』の真なる姿である。

「おのれ——ッ」

ギルガメツシユは、最後の悪あがきで己の奥乖離剣の手を取り出さんとしていた。だが、もはや間に合わない。それをかかげる前に、ソレは聖杯の穴ごとギルガメツシユを呑み込む。

言峰は、先程まで味わっていた愉悦など、最早気に留めることすらできない。聖杯の”泥”を見たときでさえ感じなかった、身体の奥底から溢れる原始的な恐怖——それを抑えるだけで、精一杯だった。

やがてソレは、聖杯の”泥”も”穴”も、そして受肉していたサーヴァントすらも呑み込んだ。残るは、なにもかもをえぐりとられたかのように更地と化したガレキの山のみ。

自らの敵だけを的確に呑み込む——本来のオベロン・ヴォーティガンに、そんな芸当はできない。だが、ここに『マスター：朝露虚映』というイレギュラーがいたこ

とによって、呑み込む対象をロツクオンし、不必要なものは除外するという恐ろしい芸当ができるのだ。

『奈落の虫』の中、永遠に落ち続ける底無しの穴では、たとえギルガメッシュが『乖離剣』を使おうとも、そして聖杯の”泥”が這い上がるうとしても、決して出口に届くことはない。なぜなら、そもその出口すら無いのだから。

ここに、第四次聖杯戦争の完全なる勝者が決定する。勝ったのは、正義の味方を目指した男でも、己の愉悦を知った男でも、ましてや黄金の輝きを放ちながら、汚染された泥を纏った英雄でもない。

かねて心無くした虚空のような男と、大嘘つきな妖精を騙る王さま——へキヤスタ——陣営であった。

「さあ、オレの思い通りに動いてもらうさね。コトミネ——」

言峰は、仮面の剥がれた青年を見る。その口元は三日月を思わせるようにつり上がり、その双貌は獲物を見定めた狩人の目であった。

ただ、己の愉悦が永劫に達成し得ぬことを感じ取り、失意の中両手を上げて降参の意を示す。

——  
未来はまだ、  
暗雲の中である。

## 幕間：英国／事件簿編

### 幕間①：第四次感想戦

——イレキユラーへオベロンレの参戦、相次ぐ裏切り、交錯する悪意、汚染された聖杯、へキヤスターレ陣営の勝利——

あれから数年経った。色々なことがあったけど、なんだかんだ勝ち越したのはありがたい話よな。とは言え、だ。暴れ足りないと思う反面、ザルなども数多くあったからな。この反省点と失点をどうするかが今後の問題だなつと。

というわけで、振り返りのためにも、この五年間何があったか、何をしてたか振り返ることと行きマツスル。……なんか、どつかの盾持った英霊が奮起したような気がしたけど、スルーだスルー。

——まず、聖杯戦争が終わってすぐ、俺たちは言峰綺礼を拘束し、お互い不可侵である取り決めを決めた。これは『セルフ・ギアス・スクロール』の書面上でも確約させた。

ああそうそう。もう忘れてるかもだけど、実はカリヤクンの時は、実はうちらに對しての拘束がほとんど無かったのよ。確かに、『アルレッキーノ』は手を出さない』とは書いたけど、『朝霧 虚映』は手を出さない』とは一つ足りとも書いてなかったからな。

オベロンも同じく。カリヤクン、相当慌てたというか、余裕がなかったというか。ホント、そういうところ残念だよなあ。皆も、契約するときは中身ちゃんと細かく見ようネ！

それはさておき、言峰に関しては、第五次が始まるまで必要なピースの一つでもあるから、あの時宝具で呑むわけにはいかなかった。外道な愉悦神父だが、第五次を語るにはアイツの存在なしにはまず無理だ。

じゃあギルガメッシュはというと、普通に邪魔だったし、計画にも支障なく進められるから、あそこでご退場願ったというわけだな。そも原作でも終盤まで姿見せなかったし、割とデカイ障害にもなるしでな。

「あの、虚映兄さん」

「ん？ おお、桜ちゃん。どったの？」

そうそう、変わったことと言えば桜ちゃんよ。原作とそう変わらない引き込まれそう

な憂いの雰囲気を持ちつつ、血色良さげにしているのを見てると嬉しくなるね。

あつちだ原作側と、間桐の秘術によるストレスで変色していた髪だけど、今は元の黒髪にア  
クセントで薄めの紫がかっているのがまたいいもんだ。

「この制服、どうですか?」

「おー、いいじゃない。可愛らしくて似合ってるよ」

そう言つて頭を撫でる。いやあもうほんと、可愛いなのつて。もうすぐ高校に上  
がる桜ちゃん見ると、ほんと癒されるわあ。

あれから元気になつてつた桜ちゃんは、無事に中学に入り、ついには卒業も控えてい  
る。そして、最近買い合わせた穂群原高校の制服をひらひらと見せてくれる。んー、淡  
い花の香りがまたなんとも——いかにいかに、これは変態の思考やて。

「ん……嬉しいです」

「そりや良かった。ところで、うちの”黒王子”はどこいったか知らない?」

「——いいセンスしてるね。後で紙に書いて破いておくとするよ」

おっと、ウワサをすればなんとやら。いつの間にか窓に座っていたオベロン。ニッコ  
り笑顔だけど、これは不機嫌気味かな?ンンンン、拙僧、何のことやらサツパリです  
ぞ。

オベロンも、ここ五年間でだいぶ変わったな。第四次が終わってしばらくは『妖精王』

のままだったけど、『虚数魔術』に目覚めた桜ちゃんが、何の気なしに正体を暴いてからは『奈落<sup>三編の時</sup>の虫』の姿にしている。

なんでも——バレてしまったものを隠し続けるより、いつそのこと普段からこつちの方が楽——とのことだ。まあそれでも、外に出るときは前のままなんだが。

「で？オレがどうかしたの？あ、虫も食わないような、しょうもない話は止めてくれよ？思わず手が滑ってしまいそうでね」

「ちげーよ。お前さんが注文してた『作品』が両方とも出来上がったから持つとけつてハナシ」

オベロンに向かって、2つの六角結晶クリスタルをシュート！超！エキサイティン！

つと、ふざけるのもここまでしないとボコられそうだなヤメテオコウ。

あの聖杯戦争が終わって少しした後、オベロンから『作品』——オレお手製の“仮想宝具”を2つ作ってくれないか、もとい造れとお達しが来てたのさ。直に戦ったアイツだからこそ判る力の差を埋めるためってヤツだな。

やれやれ、桜ちゃんが手伝ってくれなかったらホントギリギリだったわ。じゃないと、ケイネス先生よろしく、車椅子生活か寝たきりになってたからなあ。

——オレが仮想宝具を造るにあたって、もちろんのこと必要な条件が存在する。

一つ。宝具にするモノについて、それに類する『伝承』や『伝説』を知った上で理解



していること。

一つ。宝具にするモノに対し、効果や性能についてはハッキリと明確に意識し、想起して製作すること。

一つ。宝具にするモノは、正しく有形のモノに封じ込めておくこと。また、正しく許容できるモノとすること。

一つ。等々……

ぶつちやけ、一例だけでもこれだけある条件をクリアしながらやろうとすると、五年で済んだのが本当に奇跡すぎる。

どれだけハイレベルかと言うとだ、ウェイバー君の技量で第三魔法を作ろうとするよ  
うなものだ。言い過ぎかも知だが、事実そのぐらいの気持ちじゃないとこつちが死にかけ  
るからな。

「ふーん……悪くないね、貰っておこう」

「へいへい。で？本題は？」

そう、今回アレらを渡したのは、たまたま出来上がったから渡しただけに過ぎない。  
本題——〈衛宮家〉の状態について、オベロンには探つて貰っていた。

「ああ、そうだったね。『衛宮 切嗣』は残念なことに、聖杯の泥の呪いを受けてたみたいだ。早かれ遅かれ死ぬ運命だったんだろう。——心配しなくても、『衛宮 士郎』

はちやんと居たよ」

「そうかい、ならええわ」

そうそう、士郎がいないと物語は始まらない。次は、彼が主人公なんだから。主人公がいない物語とか、ぐだぐだすぎて読む気にもなれねえって話だわ。

そして空気を読んで退室してた桜ちゃんマジ偉いわー。あんないい子を、あんなゲテモノジジイに渡したトキオミは許されない、許さない。まあもう故人だからどうしようもないけどネ。

「んで？やることも済んだみたいだけど、ここからどうするのさ」

「んー、そうね。——んじやあちよつと、旅行にでも行きますか」

オベロンがあきれた顔をする。おいおい、そんな顔するなよ。これにだつて意味はあるんだぜ？

オベロンには渡した2つの“仮想宝具”。厳密には、これらはまだ完成していない。この2つはちよつと特殊なもので、完成させるには現地の霊脈からのリソースが必要になる。

「——なので、こちら。『日本発イギリス行便：大人三名』でござ」

「……………は？おい、おいおい待て待てちよつと待て。それはまさか、オレにブリテンに行けつて言うのか？」

イエース、そゆこと。最後のパズルのピースを揃えるためには、なにがなんでもあそこに行く必要がある。幸い、とっていいのかわからないけど、第四次から第五次。そして『事件簿』は前世で履修済みよん。

中・高と孤立してたから、読みあきっては見あさることなんてちよちよちのちよいよ、ハツハアツ！……なんか泣きたくなってきた。

「ま、なんかしらあるとは思うけど、どうにかなるでしょと。桜ちゃん——」  
「はあ……なんでコイツをマスターにしたんだろ、オレ……」

そこ、とやかく言わない！もう全部手遅れなんだがら、後からごねらないの！オレだつて最初お前さん喚んだときは終わりを確信したぐらいなんだから。アキラメモ。

桜ちゃんに旅行券見せたら、「旅行？ほんとに？ありがとうございますー」だつてさ。嬉しいね、娘がいたらこんな感じなんだらうね。娘いないけど。

——さてもさても始まる英国旅行記。きつと、新しくロードに就任した苦勞人なダレカがいることだろうけど、ソイツもどいつもどうなるうと知ったこつちやない。

盤面狂わせ万々歳。ひっかき回していきましようや。なにせこちとら、『道化師』なも

のでね——

「ところでこれ何時のヤツ——明日だとう!？」

「てへっ☆許してヒヤシンス」

「……………『絡咬百足』」  
ヒユッポリユテ

……その後、邸内では汚い高音な悲鳴と、何かを締め上げるような軋む音と、白い目で見つめる二組の視線があつたとかかなかつたとか。

## 幕間②：英国旅行

片道約15時間ほどのフライトを楽しみながら、やっと到着しましたブリテンことイギリスはロンドン。天を臨む時計塔の鐘の音が、ここが海外だと思わずにはいられない。

幸い、昼の便だったから準備も間に合ったし、なにより時差で早朝に着いたのはありがたかった。予約してあったホテルに入り、荷物をほどいていく。

「ふうん、ここが汎人類史のブリテン——いや、今はイギリスだっけか。いいんじゃない？僕はこういうの、結構面白いと思うよ」

「ぼやいてねーで手伝いやがれ、オベロン」

そんなこんなで荷ほどきが終わり、桜ちゃんも連れていざ、ロンドン散策へレッツラゴー。等と、その間もオベロン配下の虫達に、霊脈の集積地探しをしてもらう。

ぶつちやけ言うのと、傭兵時代にもロンドンは何度か来たことがある。傭兵だからな、暗殺だの強奪だの色々依頼されてたもんだよ。だからまあ、地理についてはある程度目処がついてる。

「あれが、『時計塔』……」

「見る分にはすごいよなあ。ま、近寄らないのに越したことはないよ」

自作の翻訳魔術をかけて、あれこれと買物をした休憩ついでに、橋の上からそびえて見える『時計塔』を見る。間もなく夕暮れとなる陽を背に立つソレは、周りの風景に馴染みながらも、判る者にはわかる異様な雰囲気を漂わせている。

かくいうオレも、あまりここには近寄りたくない。なにせ、オレも桜ちゃんも、”魔術の枠組みを越えた魔術”——『封印指定』モノだからな。それで厄介なことになるのは御免被る。

「さて、ちよつと早いけど夕御飯にしようか」

「はい。虚映兄さん」

フラフラと辺りを歩いていると、賑わいの多いところから少し離れた通りに、小さくもお洒落なカフェテリアを見つめる。見たところ、サンドイッチを中心に行っているみたいだし、空いた小腹を満たすには丁度良いな。

一緒に店内に入つて、空いている席に向かい合つて座る。大きくなつた桜ちゃんを見ていると、ほっこりするつてもんだわなあ。

——また一人、誰かが店内に入ってくる。

「——ん？なつ、お、お前はっ!？」

「うん?..」

誰かね、ワタシの和やかなティータイムを邪魔する者は。振り反ると、眉間にシワを寄せた男性が、オレの方を見て眼を見開かせていた——。

——バカな、なぜアイツがここにいる!?!よりもよつてまだ忙しいこの時期に、この顔を見ることになるうとは。というよりも、この英国イギリスにまで何をしにきたというの

だ。

私がかつて参加し、”彼”と出会った極東の魔術儀式——第四次聖杯戦争の、表向き  
の勝利者。〈キャスター〉のサーヴァントとして、『妖精王オベロン』を召喚せしめた若  
き凄腕の傭兵後日、調べていく内に知った。

——” 嗤う大道芸 『アルレッキーノ』こと、『朝露 虚映』。

「……なぜ貴様がここにいます」

「強いて言えば旅行だけど？」

普段お気に入りに入りにしているカフェで、私と彼は再び相見えた。驚き固まる私を、「連れ  
だ」と言つて向かい合う形にする。流石に騒ぎ立てるのも店に迷惑だからこそ、私は誘  
われる通りに座る。

周りに声が聞こえないように、なるべく声を抑えながら問いかける。だが……言うこ  
とにことを欠いて旅行だと？ふざけている。一体何が目的だと言うのだ。

「……信じてねえなあ、まあいいけど」

「……そちらのレディは」

私が視線を向けると、彼の隣にいた少女は居住まいを直して、私に軽く座礼をしてく  
る。見たところ礼儀もしっかりしているようだ。そして——魔術も、天才とって



良いほどのようだ。

並大抵の者には感付かれぬ程度の偽装はしているようだが、そもそもこれほどの偽装ができる時点で相当な腕前だ。恐らくは、彼が『妖精王』から教わったのだろう。

「おつと、こりや失礼。紹介しよう、こちらうちの従兄妹にして内弟子の『朝露 桜』だ」  
「えつと、『朝露 桜』と言います。えつと——」

「——『ウェイバー・ベルベット』。今は『ロード・エルメロイ二世』と名乗らせてもらっている」

「は、はい。宜しくお願いします。ロード・エルメロイ二世さん」

従兄妹、か。直接の血の繋がりがなくても、彼と同じ魔術の気配を感じる。もしこの子を『魔術協会』に入れたとすれば、どれほどの鬼才になるか——いや、止めよう。

ただでさえあの問題児共にすら手を焼いているというのに、これ以上の面倒——いや、厄介事は扱いきれん。”第四次聖杯戦争の勝者の身内”という、厄介事はな。

「ははあ……あのチンチクリンが、こつとも渋柿になるたあね」

「お前にチンチクリンと言われる筋合いはない！……んんつ。ところで、貴様のサーヴァントはどうした」

そうだ。あの童話の中から出てきたかのような、伝承科でも伝説扱いされていた存在

——〈キャスター〉、『妖精王オベロン』がないのだ。

いや、聖杯戦争が終わったのだから、いないのは当然と言える。だが、彼の『妖精王』がそう易々と居なくなるわけがない。そう、予感がしていた。

「——居るよ。今は別行動中だけどな。霊体化できないのがキツいつて言つてたな」

「そうか……ん？まさか受肉したのか!？」

驚く私に対して、呆けた顔をして頷く。正気なのか……〈サーヴァント英霊〉を受肉させるには、それ相応の魔力が必要となる。仮に令呪を使用したとしても、それだけで足りるはずがない。

クソ、聞き出したいことがあまりにも多すぎる。だが、問い質そうにも場所が悪い。今はまだ人が多く、加えて魔術になんら関係のない者もいる。”魔術師の禁忌魔術の秘匿”に触れてしまう。

「色々聞きたいって顔だな。いいぜ？教えても。特に桜ちゃんは聞いておくべきだからな。——ああ、周りは気にしなさんな。普通の会話にしか聞こえないさ」

「色々聞きたいことが増えたが……聞かせてもらおう。——あの聖杯戦争で、どうなったかを」

——それから私は様々なことを聞かされた。彼の地に喚ばれしサーヴァント達の真名と、各マスター達。そして、その最後も。

聞けば聞くほど驚くばかりだった。だが、納得も多かつた。聞けば、彼のセイバーのマスターは、彼と同等以上に有名な『魔術師殺し』——『衛宮 切嗣』とのこと。ならば、あの情け容赦のないやり方も納得する。

ましてや、あの遠坂家と教会が通じ合っていたという話は驚くしかなかった。やはり、あの時へアサシンへアチャーに倒されたのは、通じ合っていたからこそその欺瞞だったというわけだ。

「——んで、これが一番大事なこと。」

——聖杯は汚染されている」

「なんだとっ」

聖杯が汚染されているだ?! 一体、どういうことだというのか。説明を端的にまとめ

ると——”アインツベルンがやらかした”、ということの様だ。

頭の痛い話だ。御三家の内、ホムンクルス技術で名高いアインツベルン家が苦し紛れに行つたことが、巡り巡つて自らの首を締めることになるうとは。

「だからこそ、オレからアンタに、最初で最後の忠告だ。……アンタはもう、聖杯戦争には参加するな」

「……だとしても、私にはやるべきことがある」

そうだ、例え聖杯が汚染されていたとしても、私にはやるべきことが、やらなくてはならないことがある。それをどうにかしなくては、私はどうすることもできない。

聖杯が欲しいわけではない。かといって、欲しくないわけでもない。しかし、そんなことよりも、私は——。

「……そうかい。ならオレは何にも言わねーさ。——さて、気を取り直して、食後のティータイムとしようや。頼んだ紅茶が冷めちまう」

「ああ、そうだな」「は、はい……」

そうして、聖杯戦争の話は打ち切られることとなつた。最後に彼が、私の言葉を聞いて悲しそうな顔を浮かべたのが気になつた。だが、そこまで聞くのは野暮というものだろう。

それに、聞きたいことも充分に聞けた。話し込んだとは言え、陽が落ちきる前に済ん

だのは、彼がそれだけ話上手だということか。

一心地着き、彼の従兄妹だという彼女からの質問に答えていく。出てくるものは魔術についてから学業についてなど、勤勉な態度であった。

しばらくして、人もまばらになった頃。店に誰かが入ってくる。現代風の衣装を着た、彼の『妖精王』本人には驚いたものだ。またいざれ会談の場を設けるとい言葉をもたらす、彼らと解散する。流石にトラブルにならずに済んだのは僥倖だったな。

「——師匠、迎えに……あれ？誰かと居たんですか？」

「いや、もう済んだ。出迎え感謝する、グレイ」

……そう。例え、汚染された聖杯であっても、もう一度お前に会えるのならば、僕は

## 幕間③：会談

成長したウェイバー君こと、ロード・エルメロイ二世との遭遇とかいうハプニングはあったものの、そのあとは何にもなくホテルに着く。そつからしばらくは散策と籠城の繰り返しよ

宿泊している部屋は、いざという時に備えて結界を展開済み。しかもオベロン配下の虫の目もあるから、有事の際はすぐかけつけられる。そも、桜ちゃんだつてもう一端の魔術師だからね。守る必要はないんだけども。

「と、言うわけだから、留守番頼めるかな？桜ちゃん」

「はい、私は大丈夫です。でも、なるべく早く帰ってきて下さいね？」

んー、桜ちゃんの優しさが身に沁みるよ……沁みすぎて逆に痛くなってくるケド。今の今まで残虐無道なことばかりしてきておいて、いざ平和な日常が来るとダメだね。

ま、どうでもいいけど。とりあえず桜ちゃんには、『ロード・エルメロイ二世達と会談するから、終わるまで留守番してて？』っていうのを伝えた。寂しい思いをさせるかもだけど、快諾してくれて助かるよ。

「さて、行こうか」

「ああ、任せてくれ。マスター」

そういうわけで、オレ達は魔術師達の総本山——『時計塔：学部棟』へと向かうのであったー、まる。

ノックの音が響く。どうぞ、と言えば扉が開かれ、マスカレイド仮面舞踏会でつけるような、悪趣味な仮面を着けた男が入ってくる。

その後ろからは白い軽装の、絵物語の中から出てきた王子のような人物——件の、元へキャスター——こと『妖精王オベロン』が顔を覗かせる。

「わざわざ来て貰い、感謝する」

「なんのなんの。『時計塔』には、オレとしても興味があったからね」

人の良さそうな、しかし胡散臭い笑顔を浮かべながら椅子に座り込む彼。そして、その斜め後ろに侍るようにして立つオベロン。

”彼”こそは、数年前に行われた第四次聖杯戦争において、万夫不当の英雄達が集う中、唯一最後まで残った一組にしてオベロンのマスター——朝露家現当主『朝露虚映』こと、魔術使いの傭兵『アルレッキーノ』である。

「んで……（？）用件は？」

そうだ、油断してはならない。彼は、あの『英雄王』<sup>ギルガメッシュ</sup>すら出し抜いたマスター。この誘うような笑みは、さながら餌を誘う食虫植物のようだ。

こちらには、内弟子と愚妹<sup>グレイライネス</sup>、そして私の三人。相手のペースに吞まれないようにするのはもちろん、愚妹が何かしでかさないかが不安でもある。

「それでは、あの聖杯戦争に参加した者としてお聞かせ願いたい。——あの聖杯戦争の顛末について。そして、聖杯がどうなったかについて」

「いいだろう。そんじやま、あらましを語るとしましうかね——」

そこから聞かされた話は、中々信じがたいものであった。

——<sup>イスカンダル</sup>〈ライダー〉を倒したあと、<sup>ギルガメッシュ</sup>〈アーチャー〉は現・冬木中央公園——旧・冬木



市民会館にて、〈セイバー〉<sup>アーサー王</sup>と決闘。始めは〈アーチャー〉が有利だったが、〈セイバー〉のマスターからの令呪により、宝具を放たれたことで相討ちになったという。

それによって、英雄王に狙われないように身を潜めていた〈キャスター〉陣営が生き残るカタチとなった。だが、〈セイバー〉の宝具に巻き込まれる形で破壊された聖杯から“泥”が溢れ、周囲に大火災を巻き起こしたらしい――。

「――成る程。情報提供、感謝する」

「うんにゃ構わんよー。」報酬はもう貰ってるしねー」

粗方語ったあと、渋い顔をしているロード・エルメロイ二世。まあ、そりゃあそうだ。だってあの聖杯戦争自体とんでもないことだったからね。呆気なかったって言われて、ハイそうですかですと終われるような話じゃないわけよ。

んで、この話をするに当たって提示された報酬が、『桜ちゃんの情報隠蔽』と『魔術協会からのマスター候補者リスト』を提示されたわけ。ま、嘘とはいえお互い”win×win”だからいいんじゃない？

「失礼、一つ宜しいかな？……ああ、始めまして。私は『ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ』、こちらの愚兄の妹さ」

「これはこれは。どうも、コチラご存知かと思われませんが、『アルレッキーン』と申しませう。しがなない傭兵ですよ」

おつと……小悪魔シショーのお出ましたあね。流石に油断できないな。p i o o v とかじゃよくデレデレしてるの見たことあるけど、実際可憐ではあるな。……中身は別として。

さてはて、ロード・エルメロイ二世の義兄様と同等以上に鋭くて、なおかつタチの悪い義妹様は何を知りたいのやら。

「では。彼の英雄王ギルガメッシュには、万象を見通す『千里眼』という眼を持っていたとか。そんな相手に、一体どうやって隠れ潜んだというのかね？」

「ふうむ、そうさなあ……」

これにはちよいと顎をなぞってしまふな。確かに、ギルガメッシュには『千里眼』がある。それは未来を見るものであるとは言え、そこをどう誤魔化したか、それが今回の聖杯戦争のキモになる。

けど、それについて語るには様々な問題がある。まず一つ目が、オレの固有魔術『虚構魔術』について。これはもうバレたら封印指定ものだからな。そもそも話せない。

二つ目が、『オベロン』というサーヴァントについて。サーヴァントとしてのオベロンには二面性がある。”皆に人気な妖精王”という表の顔と、”全てを嫌悪する島の破壊願望”という裏の顔。このあたりがまあメンドクサイ。

最後の三つ目。『奈落の虫』が起こしたことについて。コイツがやったのは、大きく別けて”英雄王の失墜・消滅”と、”冬木大火災の半強制的な鎮火”の二つ。ここいらの辻褄を合わせないと、疑いを持たれてしまう。

さて、どう説明したものか……。ふむ、シナリオは……順序としては……矛盾点は

……

「それを説明するにあたって、まずは謝らせてほしい。残念なことに、一つだけ嘘をついてしまった」

「ほう？それは？」

よし、釣れたな。猫みたく目を細めてきたが、彼女にとつてこれは、興味を持ったということ。一番避けるべきは、話を流されることだからな。

さて、それじゃあシナリオを組み立てていくとしようか。

「まず始めに、セイバー<sup>騎士王</sup>とアーチャー<sup>英雄王</sup>と相討ちになった、と申し上げました。が、実は騎士王が聖杯を破壊し、魔力切れになったことで退場。英雄王は勝ち残っていたのです

よ」

「ふむふむ、続けて?」

「長くなりませんが、要点だけ纏めましょう。聖杯を破壊したのは善いものの、原因たる泥は既に顕現済み。その直下に英雄王はいました。泥を浴びながらも、その強靱な精神で受肉を果たしていました」

”ここまで”は事実だとも。さて、ここからが問題だ。気を付けないとすぐバレちゃうね。

「その時我々とその場へと駆けつけ、これはマズイと思い避難活動を優先させたわけですよ。しかし、我々としても予想外で、そこに泥を元にして新たな存在サトウアトが現れたのです。ソレが、溢れ出た泥ごと英雄王を屠ったのです」

「なるほど……で、その存在とは?」

「貴方達も、名前ぐらいいは聞いたことがあるでしょう?かつて、このブリテン島に存在した『厄災』。全てを滅ぼしかけた”白き竜の化身”

”卑王”

『ヴォーティガーン』

「なっ!?!」「なんだと!?!」

うーん、いい反応。ま、そりゃ驚くよな。なにせ、アーサー王伝説の登場人物が三人も——あ、いや、向こうは知らないから、二人か。それでも、関係者が集まったからな。

大筋はこうだ。

——溢れ出た聖杯の泥を因り代として、エクストラクラス（アヴェンジャー）として出現。それに驚く英雄王の隙を突き、英雄王ごと泥を飲み干して抹殺した——と、いうシナリオだ。

ちなみに、英雄王にバレなかった理由として、オベロンの『道具作成』スキルによって“隠れ蓑の粉”を使って転々としていた。というカタチでいかせてもらう。

「ま、そんなとこですわ」

「待て。となれば何だ——」 奴 はまだ、顕現しているとも」

さもそうだとわんばかりに、オレは静かに頷く。なんか、オベロン喚んでからこういう腹芸上手くなったなあ、オレ。

あ、エルメロ（名前が長い）が頭抱えてぐったりしてる。グレイ以外は難しい顔してんなあ。ま、仕方ないけど。“卑王”が復活だなんて、このブリテン——もとい、イギ

リスからしたら厄ネタものだもんな。

「まあ、オレ達が英国（こゝろ）にきたのも、旅行というのもあるが、”卑王”の追跡と言った方が正しいな」

「……奴はこのブリテン島にいる、と」

「そういうこと。な？オベロン」

「そうだね……彼の行動は、流石に僕の目にも余る。とは言え、追いかけてようにも霊脈を通って逃げられてしまつてね。ようやく追い付いたという形さ」

ナイスアシスト。こういうときのアドリブの巧さは流石のオベロンだな。辻褄も合うし、何よりオレ達に正統性とアリバイが出来上がったわけだ。

そこからは、有事の際エルメロイ家と連絡を取り合うことで交渉の席は終わった。ま、架空の”卑王”を追いかけるという無駄な労力を回すハメになつたのはご愁傷様だな。

「——あの、最後に質問、宜しいでしょうか」

「ん？なんだい？」

およ、珍しい。ずっと後ろで目をパチパチさせたりして、リアクションだけで黙りしてたグレイちゃんが口を開くとは。

「聖杯戦争とは、願いを叶える聖杯を求めて、魔術師同士が戦う魔術儀式だと聞きました

た。それで……——お二人の願いは、何だったのですか？」

「——」

ああ、願い。……願い、ね。なんだったかな。うーん、思い返して、どれだったかなってなるなあ。

オベロンは、どうだろうか。役割だった ” 妖精國 ” ブリテン島 の破壊は終わってるし、 ” 妖精王の愛妻 ” テイターニア だって存在していない。

そんなナイナイ尽くしのオレ達の願い、か——。

「そうだな、オレの願いは——」

「そうだね……僕の願いは——」

## 幕間④：妖精と謂ふ者

ロード・エルメロイ二世との会談の後、桜ちゃんには先に戻ってもらい、聖杯戦争の準備を進めておいてもらうことにした。戦争時の対策のため、トラウマを刺激するようで悪いが、彼女には間桐邸を使ってもらう。

オレ達も聖杯戦争のために、人気のない平原のような場所でお互いの手札を確認し合う。ま、今のじぶに何ができて、何ができないのか把握する必要もあるしネ。

ただまあ、闇落ち『無毀なる湖光』をブンブン振ったのもあって、魔力を使いに使ったせいで二人してぐったり。それでもって野原に倒れるようにして寝る。んー、曇り空。

これ、どうしたもんかね。かなり精神力削られるけど、やつぱり合成するしかないかなあ。この先のことも考えなきゃだし、だるいなあ……。

「————おい、マスター？」

「んー？どしたオベロ……は？」

オベロンに呼ばれて空を見る。すると、先ほどまでは疎らだった雲が、いつもの間に



か雷雲へと変わり、今にもスコールとなりそうだった。

慌てて辺りを探して、建物か洞穴を探す。すると、少し遠いが向こうに屋敷があるようだ。というわけで、そこへ向けてとつとこハ○太郎つとな。

「ちよ!?!無人かよ!?!」

「ツイてないね本当に!—— ツ! あつちに洞穴だ!」

ちくせう、鍵が開いてなかったでござる。ので、オベロンが見つけた裏手の洞窟に駆け込む。外は雷鳴が鳴り響く豪雨が降っている。

息を切らしながら、洞窟の壁に手をつける。いや真つ暗すぎない? というわけで、懐から折り畳み式の携帯ランプを取り出して点ける。

「おつとう……そういうところなのね」

ランプに照らされた内部には、白骨化してかなり時が経つたであろう骸が、あちらこちらに散らばっている。こいうの、何て言うんだっけ。ホトケサマになった、だったかな?

流星に死骸と言えど、踏み潰して歩くのは気が引ける。なので、なるべく足元に気を付けながら、ゆつくり奥へ向かっていく。

「今日はここで一晩過ぐすしかないなあ……」

「本気………みたいだね。全く、正気を疑うよ。まあ、招いた僕が言うのもアレだけどね」

おう、すつごいうんざりした顔するじゃねえか。ここ選んだのお前さんだよな。お？  
お？やるか？やんのか？

どうせオベロンのことだ。この”内面”だってその『妖精眼』で丸見えなんじゃろ？  
知つとるぞワレエ。

「……そう思いながらテキパキとテント立ててる辺り、どうかと思うよ」

「やかまし。割トラップと罠多くて大変なんだぞ」

そう、何を隠そう、この地下墓カタコンベ地らしき場所はトラップだらけなのである。いやだら  
けてレベルじゃなくてもうびっしりと。

兎にも角にもさっさと寝て、明日に備えるとしよか。墓で寝るとか、死ネクロマンサー霊術師じゃあ  
るめえし……つてのは笑えねー。

——ソイツらを見たときはびつくりしたぜ。なにせ、こんなトラップだらけの地下墓地で、テント張ってグースピ寝てる奴らがいると思うか？

しかも、何が『この辺りを歩き旅してたら豪雨になって、ここに避難してきた』だ。今この辺りを歩き回るような奴なんて、あの件の関係者か、それか余程の冒険者かだぞ  
「しっかしまあ、そんなとこに出入口があるとはな」

「そうねー……ま、ここも厄介事の臭いしかしかないケド」

そんなうんざりした顔しなさんなよ、と言いたいが、その意見には全く以て俺も同意する。今は静かだが、何かあったときにはただじゃ済まない。

——と、懸念していた通り、この地下墓地のどこかで何かがあつたようだ。死霊達が騒ぎ出しやがった。

「さて、一仕事いくかね。アンタ達は どうする？」

「乗り掛かつた舟よ。嫌だけど、やるしかないさね」

基本的に交渉はコイツがするみたいだな？もう一人の優男は、さつきから目を瞑った

ままのようだし。……なんか、揉め始めてるが、大丈夫か？

と、ソイツがカバンを漁って取り出した、独特な双振りの短剣ダガと仮面を見たとき、俺は驚くしかなかった。というか、割とドン引きだったよ。

「お前——あの『殺人道化師』か!!」

「そういうアンタ、『獅子劫 界離』だろ。知ってるぞ」

「二人とも、呑気に喋ってる暇はないだろう!？」

「つたく、お前さんらが仕切るなよ。とは言え、呑気にお喋りしてる暇はないわな。」

そうして俺達は、死霊達が一番ざわめいているところに駆けつけてきたってわけだ。そうしたら、そこにお嬢ちゃん方がいるもんだから、先に目星をつけてた出口まで送っていったということになるな——。

「初めまして、ですね。魔術使いの傭兵『アルレッキーノ』。お噂はかねがね、先の聖杯戦争でもご活躍なされたとか」

「——うわ” 法政科の蛇” かよ、ナイワー」

「ないわー。ここで『化野 菱理』とかないわあ。そりやあまあ、名前ぐらいは知っていますとも。ええ、はい。」

「なんでか知らんけど、丁度そこにいたエルメロイ二世から事情を聞く。すると、オレ達が夜明かしで寝ている間に、こんな話が巻き起こっていたらしい。」

曰く――

ロード・エルメロイ二世が、降霊科からこの『マーベリー工房』に関して調査を依頼。なんでも、工房が半暴走状態で、前当主含め死人が多数出たと。

そして、エルメロイ二世はそれを受理。その際、案内役兼当事者でもある『ウィルズ・ペラム・コドリントン』を引率することに。

そこからなんやかんやあつて、今に至る。と——

「キミさあ……」トラブルメーカー「巻き込まれ体質」ってよく言われない？」

「ぐっ……否定は、しない」

はあ……（クソでかため息）、もー全く、やつてらんねえなあ。なんでこの世界ってこんな面倒事が多く入ってくるのかねえ。

とは言え、だ。オレのやることは変わらんよ。化野をかわしつつ、魔術協会からの干渉がないように工作するだけ。それが、例えどんな結末になろうともね。

「ところで……そちらの方は、どなたですか？」

化野の目線の先は——ああ、いいよ？好きにしたら？どうせ、そこらへんはもうバレてるんだからさ。

「初めまして。僕は『妖精王』オベロン。オベロンでもロビン・グッドフェローでも、好きに呼んでくれてかまわない。——よろしく、ね？」

「妖精王?!」

おお、異様に食いつくなアンタら。そんなにオベロンに驚く要素ある?……いや、よくよく考えたらそりゃあるわな。付き合ひ長すぎてすっかり忘れてた。

んえ、何やエルメロイ二世。んと?ウィルズ君が「妖精眼」を持つているから、妖精絡みの案件で協力してくれと?まあいいけど……報酬はしっかり貰うからな?

「おーい、オベローン」

「どうしたんだい？マスタ―」

まあ、ここは愉快的妖精王様にお任せするとしましょうかね。妖精案件に関しては、オレよりもオベロンに任せの方がええしな。

そうこうしてる内に、ウィルズ君に頼んで部屋を一室分けてもらいました。ゴツゴツした地面じゃなくて、フカフカのベッドで寝れるよ！ヤツタネ！

「さて、それじゃあマスタ―。――ここからの話をしようか」

「奇遇だな、丁度構想が終わったところだ――」

外では雷雨が響き、内では人の寢息のみの明朝頃。それが起こったことには誰も気付かなかつた。——ただ、二人を除いて。

最初に目覚めたのはオベロン、次に虚映。オベロンは異変のあつた場所へと、ブランカの背に乗つて飛んでいく。虚映は、未だ眠りこける有識者達を起こしていく。

そして、オベロンを追いかけていった者達が目にしたものとは——

——無惨な姿となつた、“ワレッタ・コドリントン”という、ウィルズの幼馴染みの姿であつた。



## 幕間⑤：妖精と謂ふ者 続

「——ダメです。ワレツタの霊は、呼び掛けに答えません」

はい。どうも、朝露虚映です。なんか知らんうちに巻き込まれて、なんか知らんうちに殺人事件の関係者になりました。クソが。

突然だが、オレはオリチャアがクソほど嫌いである。なぜなら、正しい攻略法があるというのに、なんでわざわざ無茶苦茶にしていくのかがわからん。そんでポカやらかすんだから目も当てられない。

「——では、犯罪捜査の原則に乗っ取れば、この死によって最大の利益を得る人物、ということになりましたが。——ウイルス・ペラム・コドリントン？」

「——ツ」

ああそう、オレ達は蚊帳の外ってわけ。別にいいけど。その方が色々都合がいいしね。コイツらと関わりとロクなことにならないし。

そうしてオレを抜いて、どんどんと話が進んでいく。ロード・エルメロイ二世が推理を立てて、化野と睨み合う。その結果、捜査権を任せられることとなり、オレと獅子劫がエルメロイ二世に呼ばれる。

「で、この後はどうすんだ？」

「協力してもらうぞ、獅子劫界離、”朝露虚映”。この件には、死ネクロマンサー霊術師。そしてお前の存在が必要になる」

「ふーん……いいけどさ、報酬代金を頂戴よ」

「むっ、持ち合わせはそんなにないぞ」

お金じゃないんだけどなあ。と、獅子劫の方も同じ意見だったらしく、あつちは葉巻一つ貰って受諾した。てかあれ、魔術礼装では？

こっちは……まあ、後払いでいいか。今のうちに、こっちでのアイツらの名前でも書き出しておくか。

その後、エルメロイ二世から頼まれて、書庫で資料を探す。にしても、出るわ出るわ、貴重な資料がたんまりと。うんうん、興味深い。こんな時じゃなかったら、ゆつくりと読みふけていたかったなあ。

「——どうかしましたか？」

「ああ、ちよいと懐かしくてな」

ん……ああ、妖精の物語かな？死んだ子供が妖精になる、ね。あんな残酷で酷い生き物になるなんて、その子供達が浮かばれないってものだよ。

かつて、前世で見た妖精國の妖精達。陽気で優しく、残酷で狂気に満ちた口クでもな

イクソツタレ。あれと関わると、ほとほと破滅しかない。

「——ッ！獅子劫!!」

待て待て待て！なんだそりや!?!窓を割って入ってきたのは——まさかまさかの

『黒妖犬』だど!?

オレは喚んだ覚えはないし、オベロンも何の予告もなしにするわけがない。というこ  
とは……これは土地に現れた”野良”か!

「逃げな、お嬢ちゃんには荷がおも————つておい!」

「アツド!——第一段階、限定解除!」

ヒュウ、やるねい。流石はアーサー王の……いや、やめておこう。流石に野暮に過ぎ  
る。しかしまあ、アレを礼装に押し込められた時点で、相当なものだな。

談話室に戻り、さっきの件について報告する。もちろん、オベロンも一緒にな。その  
流れで、グレイちゃんに關しての話聞く。

「——あれはアーサー王の槍、『最果てにて輝ける槍』だ」

「槍!」「アーサー王の、槍……」

良かったなオベロン、これでどう扱うべきかわかっただろう?ただ、アイツならわか  
るだろうが、妖精眼で見ても恐らく純粹な子だからな。どちらかというと、初期のアル  
トリア——キャスターの方に近いかな。

……おう。まあ、お前さんがどう思うかは勝手だけどさ。オレはアンタらのこと、嫌いじゃないよ。純粹に、ただひたすらに駆け抜けたアンタらのことはさ。

——さて、エルメロイ二世が天恵を受けたそうだからね。こちらも色々支度をしようか——。

やってきました、隠し地下室。エルメロイ二世、獅子劫、ウィルズの三人で陣をつくる。その中央に、オベロンとライネスが並ぶ。

これから、儀式呪文が始められるのだろうな。

「兄上？この体調では儀式は手伝えないぞ」

「そこに立っているだけでいい」

「なら、僕が支えていよう」

そして、呪文の詠唱がなされていく。つつても、オレは部外者だし、何よりやることがほとんどない。こんな急な展開じゃなければ、色々と段取り踏んでいったんだがなあ……。

つと、どうやら成功したみたいだ。ライネス嬢の魔眼が反応し、その正面から何者かが浮き上がってくる。あれは……妖精か。

『まさか、この様な魔術を使うとは……』

『みたところ、風の氏族に似た風貌だね……』

オベロンが、オレが魔術で組み上げた念話で呟いてくる。そうさな、ソールズベリーにいた風の氏族とそっくりだ。話し方からして、コーラルちゃんに近しいものを感じるね。

エルメロイ二世の推理を端的にまとめると——、この工房は、ウィルズの妖精眼を用いて発動する、妖精生産装置——ってところか。うん、反吐が出るね。

「だが、なぜトレバー卿は死んだ？ 制御出来なくて死んだ、等という話でもないだろう」  
『私が殺した』

ま、だろうな。オベロンがいた妖精國とは違い、堅物……というか、しつかりとしてる彼女からすれば、相当許せないことだろうよ。そういう意味では、自業自得だったわけだ。

「素敵なラブロマンスですが、結局、ウィルズの妖精眼がワレッタを殺した。と、言えるのでは？」

「彼は被害者さ。君は、小さな歯車を犯人にして、法廷にでも立たせたいのかい？」

ま、そういうところだな。化野の推理は、魔術師という存在の前提があればこそだ。だが、人の心はそう簡単なものじゃない。いくつもの意図が、がんじがらめになっているものだ。

まあ……そんな悠長なことは、思ってもいられないが。

「ただ……少し、手遅れだったかもね」

「ツ！ 走れ!!」

エルメロイ二世の叫びで地下から脱出し、屋敷の玄関ホールへと出る。外では、ブ

ラックドッグ達が溢れ出していた。……ヤバくね？

どうやら、化野の封印が強すぎたあまり、エルメロイ二世達の儀式によって工房が活性化した、と。なんてことしてくれたんだお前らア!? 正面からなんてごめんだぞ!?

ああもう、やらなきやダメなのね! わかったよコンチクショウツ!!

ええい、数が多いよ! 短剣を振り回してなんとかなつてるけど、いかんせん捌ききれねえ。

「手作り<sup>でっせ</sup>で失礼! マスターツ、流石に対応しきれない!」

「わかつてらあ! だがどうにもならん!!」

うざつたらしいなあもうつ。このままじゃジリ貧だぞ、これ。なにか、なにか対軍宝具並みの大火力が必要だぞ。

マズイ、あのデカいのが動き始めやがった。あれが来たら、とうとう抑えきれないぞ。一体どうするつもりだ、エルメロイの。

” Gray::Rave::Crave::Deprave:::Grave::me::: : Grave::: , for you:::……”

使うのか、それを。そうだ、それが正<sup>better</sup>解だとも。だが、宝具発動ともなれば、魔力を感じできる奴らからすれば捨て置けるはずがない。

オレ達に向かつて来てきた数体が、グレイちゃんの方へと方向転換する。そりやまあ

オレでもそうするけどよ！

「ぐうつ?!」「くつ——!!」

「気にするな！お前さんのやりたいようにやれ！」

「そうだとも！得意ではないが、塵払いぐらいやってみせるさー！」

間に合わなかった分を、獅子劫とオベロンが身を呈してかばい、片翼に迫る分を排除していく。そして、極光が天を突き、一番デカイのが動き出す。

だが、それよりもーコンマ早く、アレは発動するだろうよ。

「——古き神秘よ、死に絶えよ。甘き謎よ、尽く無に帰れ」

『擬似人格停止。魔力の収集率、規定値を突破。封印礼装、第二段階限定解除を開始』

「聖槍、抜錨——!!」

『最果てにて輝ける槍』!!」

——これが、本当の『聖槍』。モルガンの魔術によるものではなく、正真正銘、本



当の”世界を繋ぎ止める楔”か――。

彼女が放った”聖槍”の光で、人工妖精達はいなくなつた。けれど、”門”はまだ消えていない。

ロード・エルメロイ二世先生が言うには、術式は完全であり、簡単には消すことがで

きないと。皆が対策を考えてくれている。けれど、たった一つだけ、ここからでも術式を解体する手がある。

「——行くんだね」

「ええ、行きます。妖精王殿」

そして僕は、ロード・エルメロイ二世先生からの静止を背に、彼女の元へと歩み寄っていく。

そして、昨晚のことを思い出す——。

『——やあ、ウィルズ君』

『貴方は……！妖精王殿?!』

『ああ、そうだとも。君が惚れた妖精達の王さまさ。まあ、お飾りだけだね。……君の考えていることは分かるよ』

『……そうですか、やはり……』

『いつか、それは甘い夢だと知るかもしれない。そうしなければ良かったと思うかもしれない。それでも、君は行くのかい?』

『……ええ、それがきつと。一番いい選択で、何より僕が望んでいることから——』

——ありがとう、彼方より来たる妖精の王よ。僕の言葉を聞いてくれて、僕の想いを聞いてくれて。これが、例え魅入られていたとしても、僕は何一つ、悔いはない。

そうして僕は、彼女と共に門の奥へと進んでいく。これで、僕の謎は解体された。

——ありがとう、ロード・エルメロイ二世。僕の謎を解体してくれて——  
|。

一件落着し、皆思い思いに帰っていった。虚映達は、ロード・エルメロイ二世達とは別の列車に乗って、ロンドンへと帰る。その最中の車内にて――、

「今回は珍しく黙りが多かったな、オベロン」

「まあ、ね。今回は、思うところは多かったから」

——妖精絡みの事件、その妖精に惚れた人間、騎士王の写し身、現代に甦った”最果ての槍”——それこそ、挙げればキリがないだろう。

だが、それらは最早”終わった”こと。だからこそ、彼らは荷物の中から、一通の『黒塗りの手紙』を取り出す。

「それはそれとして、さ――これ、どうするつもり？」

「まあ……………いくしかないだろうよ。はあ、計画<sup>プランニング</sup>建てしないと。クク……………最後の最後

に面白くなりそうだ」

悪魔は笑みを深める。その瞳孔の奥に秘めたるものをぶつけんと。

嗤う道化師と有り得ざる妖精王は、その手に持つ”心臓無き者”からの挑戦状に、ただ薄く笑うのみであった。

## 幕間⑥：魔眼収集列車 # 1

「――」

「――？」

「おーおー、あそこに色んなの集まってるわ。ロード・エルメロイ二世に、異なる世界ではマスターの一人だったカウレス君。さらには化野まで集まってるらあ。」

「――どこかのロードまで来てると思ったら、噂の現代魔術科とはね」

「……………」

「ああ、生きているんだ、君は。」

『オルガマリィ・アースミレイト・アニメスファイア』――『Fate/Grand order』では、特異点Fで燃え盛るカルデアスに取り込まれ、続く2部では、ラスボスたる“ビーストVII”の寄り代になっていた娘。

「やれやれ、こりやあまた、暇しなさそうな面子ですこと。かと思えば、エルメロイ二世と視線がかち合う。ので、軽く手を振り返してあげる。うーん、あの渋い顔。」

「さ、行くうぜ――『ケント』」

「はいはい。個人的に、その名前もどうかと思うけどね——『リア』」

かくして、オレ達が乗り込み、ついに列車は動きだす。結末のわからない、線路の先へ

客車のリラックスルームのような場所で、僕とマスターは一息つく。遠目には、あのロード・エルメロイ二世とかいう人間が座っている。

と、ふと扉が開き、誰かが入ってくる。黒衣を身にまとい、首もとには十字架を下げ

た老齡の男性だ。

「……『カラボー・フランプトン』。聖堂教会の者だ」

「……………へえ？」

うたた寝していたマスターが、興味深そうに薄く目を開く。どうやら、彼もこの列車でのオークションの参加者のようだ。

その後に入ってきた、奇抜な格好の女の子——『イヴェット』と言うらしい——とエルメロイ二世の会話に、マスターが軽くツボに入ったらしい。いやあ、あそこまで生き生きしてると、逆に面白いよねえ。

それからしばらくして、列車が動き出した。案内に従い、それぞれに充てられた個室へと入っていく。

マスターが個室に防音の魔術を張り、声が漏れないようにする。これで、俺たちの会話が外に漏れる心配はなくなったわけだ。

「それで……ここからどうするわけなのさ？」

「しばらくは大人しくしておくさ。問題は、明日の夜だな」

懐から、様々なメモが書かれたノートを取り出す。そこには、今まで出会ってきた人

物が起こしたことを、元のシナリオであつたこと、その影響といったものが連々と書かれている。

そこに、色々と新たに書き加えられていく。

『魔眼収集列車での出来事』

①エルメロイ二世がくる

②後部貨物車で戦闘↓クラスへフエイカーのサーヴァント

③オークション会場でネタばらし』

「おおまかにはこんなところだ。で、オレ達が動くのは、この二番のときだ」

「へえ？理由は？」

そこから更に、綿密な計画を立てていく。俺達が疑われない程度に、かつ向こうを程よくおちよくくれるぐらいの計画を。

はあ……ほんと、こういうとこだけ息が合うのどうかと思うよ。ま、嫌いじゃないけどね。さてはて、どうなることやら……——



翌、昼休憩時。オレとオベロンはどたばた騒ぎを聞いて、眠りかかっていた瞼を無理矢理開かされることとなった。

オルガマリーの従者——『トリシャ・フェローズ』が首を盗られて殺害された、このことだった。

ほんつと魔術師の世界つて物騒極まりないなあ。と、ここまで折り込み済み。どうあつても彼女は死ぬ定めだし、死ななくてはいけない存在だ。それはもうどうしようもない。

問題はその後、エルメロイ二世達が最後部までいくときだ。さて、どちらがいくか、だ。適役は……まあ、そうだな。それでいこう。んじやまあ、スタンバイしましょうかねえ。

「……そろそろ犯人が指定してきた刻限だ」

列車の最後部、展望台に立つ私達。そこで、彼の聖遺物を盗ったであろう、犯人からの接触か何かがあるはずだ。

この招待状——”魔眼収集列車”レール・ツエツペリン という”異界”につながる鍵。内部へ侵入するのも、外部へと脱出することすら出来ない密室。一見、回りくどい様にもみえる方法をとって、何がしたいというのだろうか……。

「雲が……——ッ。こつちに、何か近付いてきます！」

突然に空が曇りはじめ、まるで雷が走るように列車を追いかけてくる。そして、列車

の屋根に落ちてくる。

グレイとともにはしごを登り、走行時の風が吹き荒ぶ屋根へと立つ。そこに、またしても雷が落ち、何者かの姿が現れる

「ああ、本当に来たのか。……罨かも知れないのに飛び込んできたのを、愚行と蔑むべきか。蹴散らすだけの実力を伴った剛毅というべきか」

「貴方が、師匠から聖遺物を盗んだ犯人ですか！」

「ふっ……その盗賊の労党の一味ではある」

「——じゃあ返して!!」

気を逆立てるグレイを抑え、私はその人物をしつかりと見つめる。——その姿は、まさしく“奴”と瓜二つで、だが明らかに違う。

恐らく、臣下の一人 —— だが、私は目の前に立つ存在を、あの場所（ばしょ）で見たことがない。

「ふーん……？ 気に入らない顔だな。ケチ、せせこましい、暗くて偏屈、寝起きが悪い、さも苦勞人でございという顔をしている癖に、終わってみれば一番事態を掻き回している。—— どうだ？ 全部あたってあるだろう？」

ぐ、随分な言い様だ。……アイツにも、似たようなことを言われたな。やはり、目の

前の奴は、アイツと何らかの関係があるのだろう。

アイツを従えていた、か。——いや、違うな。従えていたわけじゃない。私はもう、アイツの臣下だ。同じ夢を見てあの背中を追い、そして生きると命じられた。

「……下らないな。お前を呼び寄せたのは、単に私の興味を優先してもらったからだ。が、その甲斐はまるでなかったな」

……違う。コイツは、目の前のコイツは、”征服王イスカンドル”と共に駆け抜けたであろう者でありながら、その覇道と共に進んできた者達と何かが決定的に違う。

「ああもうたくさんだ、うんざりだ！こんなのは食傷にも程がある。——だから、死ね!!」

襲いかかろうとした相手を、グレイが抑え込む。だが、圧倒的に膂力が足りていない。

間違いない、コイツは——”英<sup>サヴァント</sup>霊”だ。

グレイが相手の攻撃を退き、距離を取る。だが……”強制の魔眼<sup>ノールカラー</sup>”か。幸い、私は魔眼殺しの礼装でなんとかなった。が、グレイが術中にかかったか。デュオニソス神を主と置く……まだだ、情報が足りない。

「お前達が、自分らで決着できる程度には、マシであると望んでいたのだがな」

グレイが抑えようとすると、一瞬遅く、相手が何かを展開する。あれは——

『<sup>ゴルディアス・ホイール</sup>神威の車輪』か！

そんな、バカな。あれは、アイツの宝具であつたはず。ならば、目の前のアイツは一体誰なんだ!?

「我が名は『ヘファイステイオン』！史上最も偉大なる征服王、イスカンドル第一の腹心なり!!」

—— 貴様に、イスカンドルの臣下たる資格なぞあるものか!!」

不味い。奴が何者であれサーヴァントであるならば、宝具を発動されるのは極めて不味い。

” 聖槍 ” を解き放ち、宝具を相殺させようとしているグレイ。だが、この不安定な、そしてなによりも発動した際の問題があまりにも多過ぎて危険だ。だから—— 私には奥の手を使うため、前へと出る。

「—— 邪魔するなよ、よそもの 部外者が」

——その後、師匠は倒れてしまいました。いくら髪に蓄積した魔力で流したとしても、そのダメージは流しきれなかったようです。

師匠を部屋へと運び込んで、カウレスさんが『原始電池』を使って治してくれていますが、とても心配です……。

それを見かねたオルガマリーさんから、『ドルイドの秘薬』<sup>バ</sup><sup>ナ</sup><sup>ケ</sup><sup>ア</sup>を頂き、薬を塗って容態がようやく安定してきました。

……一つだけ、気になることが。あの時、師匠があの手でサーヴァントの宝具の前に立った時。誰か別の人が、後ろから出てきたように感じました。

有り得ないはずなのに、その姿は鮮明に見えているんです。——深く、青い格好をした、ひどく怖くて寂しそうで、けれども優しそうな背中の人を——。

## 幕間⑦：魔眼収集列車 #2

「——サーヴァントに襲われた!? 生前の人格を持った英霊を、そのまま召喚する現象なんて、『冬木市の聖杯戦争』以外に有り得ないわよ」

「……あれは間違いなく、実体化した英霊だったと思います。あんな力、魔術師のものは……」

そうです。あれは、”降霊憑依”<sup>invocation</sup> だとは到底思えません。あの膂力、敵意、殺意、そして——あの戦車。

「なら、ますます無関係ではないわね。——サーヴァントなら、召喚した〈召喚者〉<sup>マスター</sup>がいるはずよ」



はあい。皆様どもども、虚映ダヨー。ほならね、現状報告といきましようか。  
へフェイカーへ改め、『へファイステイオン』の顕現は確認できた。ロード・エルメロイ  
二世もボロボロで一回休みつてわけだ。

対して、こちらは、この後に向けた準備は着々と進んでいる。ただ、あの”法政科  
の蛇”に見つからないように、気付かれないようにするのが難点だが。

「とういうわけでここか——らあつ!？」

「うおう!?!何事だ!?!」

うおおおおおつ、すつごい急ブレーキ!いや遠心力がきついつて!無茶苦茶する  
なあ!?!

魔眼収集列車が急ブレーキをかける異常事態——つてことは、物語が第二フェーズへ突入したつてことだな。ちよつと色々考えたいのに、この勢いは酔うつてばよ。うっぷ……………。

『お客様にご連絡申し上げます。当列車は遺憾無く、”アインナツシュ腑海林の森”に突入致しました』

「マスター、”アインナツシュ腑海林の森”つて知ってるかい？」

「あー……確か、催眠術を使う魔術師『アインナツシュアインナツシュ』の血を吸つて吸血鬼化した森だったか？今回は、その”落とし子”つてどこだろうな」

そんな嫌そうな顔するなよ。オレだつて、用もなく来たくなかつたよこんなところ。でも、物語の進行上、どうしてもここに来なくちゃいけないんだわ。

ふと外を見ると、三人ほどの魔術師が列車の前方に立ちふさがる森に、火炎魔術を発動させていた。普通の森ならそれで済むだろうけど……ここは、別名『死徒の森』だけ？

「愚かだねえ……」

「うわあ……僕は絶対外に出ないからな、マスター」

外の惨状を見て、さらにドン引きになるオベロン。そらまそうだ。こんなもん見たら、死んでも外になんて出たくなくなるわ。言うて、この列車も”死徒の落とし子”み

たいなもんだが。

そんな風に思いながら外を眺めていると、不意にノックがされる。オベロンと目配せして、扉を開けさせる。するとそこには、参加者のカラボー神父を初めとした、数名が集まっていた――。

・ ・ ・

「この列車を動かすため手を貸して欲しい、ですか……？（だつて？）」

うーむ、確かにそれはこちらとしても最もな話だが……。アレを突破する方法って、中々浮かばないんだが？と、きちんとプランがあるわけね。

ふむふむ……成る程？手っ取り早い話、森の中にある霊脈を活性化させて自壊させるってわけか。いいじゃん、面白そうだ。それなりにリスクはあるが、それ以外に方法はなさそうだな。

「戦力は多いほどいい。……協力してくれないか」  
「やります」

わお、ノータイム。流石はグレイちゃん、師匠のために身を粉にするとは、弟子の鏡だねえ。まあ、こちらからしたらいい喜劇だけだな。

「それでそちらの——」

『リア』、と申します。こちらは友人で『ケント』です」

「失礼した。それで、リア殿らはどうだろうか」

「申し訳ないが、僕は遠慮させてもらうよ。流石にあの中に入って、生きて帰れる気がしないからね」

手をひらひらと振って答えるオベロン——いや、ケント。名前は変えたとは言え、オレ達のスタンスまで変えるつもりはない。要は偽名だな、保険ではあるが。

というかメルヴィン某君、キミそんな有名人だったの？まあ確かに、調律師っていう存在自体希少なものはあるけどな。にしても、綺麗な音色なもんだわ。

「君達の魔術回路を二割ほど向上させた。少しは、役に立つんじゃないかな？」

おー、そりゃあもう役に立つに決まっているわ。こころなしか、さつきまでよりか身体が動きやすくなってるかね。

まあ、彼は知らないだろうけど、いいのかね？これ。だつてよ——敵に塩送つて

るんだぜ？あーでも、メルヴェインならむしろ楽しんでやりそうだなあ………。

——今、拙達は列車から降り、森の中の霊脈を目指しています。カラボーさんを始めとして、イヴエツトさん、メルヴィンさん、そして——リアさんと一緒に。

比較的近場にあつた霊脈を、カラボーさんが活性化させました。ただ、この影響で森への刺激や、師匠達への影響を考えて、急ぐことにしました。

『おいグレイー！』

「どうしたの？アツド」

『ヤベエヤベエヤベエヤベエぞ！ヤツベエのがこつちを見てる！逃げるんだ今すぐにイ！！』

その相手に、拙には心当たりがありません。なので、カラボーさん達を先に行かせます。カラボーさん達を巻き込むわけにはいかないので。

皆さんの姿が遠くに行つたのを見届けて、後ろを振り向きません。そこには——やはりあの『ヘファイステイオン』さんがいたのです。

「ほう？私に気付いたか」

すぐさまアツドに呼び掛けて戦闘体勢をとります。



「——ッ!?」——ッ!!」

重い!!横風ぎに振るわれた一撃に、拙達は押し飛ばされます。お互いにぶつかつていたのもあつて、相当地に踏ん張つていたはずなのに。それを、軽々と……。

警戒するため、現れた相手を見つめました。そこにいたのは——深い夜の闇のような髪に、禍々しい大剣を持った、一人の男性でした。

「おのれ……! 貴様、戦士の戦いに水を差すか!」

「はあ……? 戦士だからなんだか知らないけどさ、そこに居られると邪魔なんだよね。さっさと退いてくれる?」

うんざりしたような顔をする男性——いえ、いいえ。拙は、拙に流れ込んだ刻まれた記憶は。彼を、彼の気配を知っています。知っているんです。

彼は、あれは——

『『ヴォーティガン』!!』

「ん?……へえ。面白い縁もあつたものだ——うおつと!」

「敵を目の前に随分と悠長だな!」

三つ巴になった戦場で、私達は何度も切り結びます。振るわれる大剣を避けて、突き出される剣を受け止める。そんな中、“卑王”の目線が明後日の方向を見ました。

「——チツ、時間切れか。あーあ、惜しかったなあ」



「なっ——」

そう告げると、気怠げになりながら攻撃を止める。次の瞬間、彼の姿はまるで泥のよ  
うな塊となつて崩れ落ちて消えました。

私とヘファイステイオンが彼の姿を警戒しながら探しますが、全く見つかりません。  
そして、声だけが響いてきました。

『これ以上はやつてられないからね。またね、”騎士王忌々しい小娘のの映し身”』  
「待つて!!」

拙の呼び止めの意味もなく、彼の気配は消えていきました。その次の瞬間、向こうか  
ら雪崩が迫ってきました。

それでも拙は、ヘファイステイオンを逃がさないために、師匠の元へと行かせないた  
めにも残りしました。

……その後、拙はヘファイステイオンに助けられ、ほんの少しだけお話しました。ヘ  
ファイステイオンさんの願い、思い、そして——生き方を。

そして、”匣アッド”をボード代わりにして、拙はなんとか列車へと戻ることができまし  
た。けれど……たった一つ、拙は気になっています。

『——最後に一つ、気をつけておけ。貴様が『ヴォーテイガン』と言ったあの男。……あれは、油断ならない男だ。私と似て非なる、おぞましい何かだということを覚えておくことだ』

ヴォーテイガン……貴方は一体、何者なのですか……？

「ごめーん、マスター。しくじっちゃったあ。あでも、マスターなら何とかできるよね？」

「つつくく……まツツた”お<sup>ア</sup>好<sup>ト</sup>きにど<sup>リ</sup>うぞ”かよ畜生ツ!!ブエツクシツ!!」